
Trapper

くら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Trapper

【Nコード】

N05490

【作者名】

くろ

【あらすじ】

Trapperとは、罾を駆使し、獲物を刈る者也。

現代で生きる、1人の男性がいました。変なチラシ一枚で異世界に渡ってしまった主人公。

…特殊な能力を得て、異世界でどう生きていくのか…

物語はユーノスから王都へと…

第1話 さようならこんにちは（前書き）

はじめまして。この作品が処女作となりますので。ストーリーや描写等、色々とつたない部分があると思いますがなま暖かい目で見てください。

更新に付いても、まだまだ文章の書き方や、ストーリーの進め方になれてないので最初は非常に不定期になるかと思いますが、勘弁してください。

それではよろしく願います。

第1話 さようならこんにちは

東京都郊外、現在の時刻は午前2時。

しんと静まり返った通りを一人トボトボと歩いている男が居た。その男がしばらく歩いて行くと、築何年なのかと聞きたくなるような草臥れたアパートが見えてきた。男がアパートの郵便受けを確認し、並んだ扉の中、「保科 和也」とネームプレートに書かれた扉の鍵を開け中に入った。

「ただいま…って、誰も居ないのはわかってるんだけどね」

靴を脱ぎ、鞆を置いてベッドにうつ伏せに倒れ込んだ。男は残業で遅くなり、この時間にようやく家に帰って来れた。

（…仕事でのミスは無い、取引先からのクレームも無いしノルマも毎年クリアしているのに、最初に聞いていた話と違い昇給は無いしボーナスも雀の涙。しかも毎日サービス残業で帰宅はこの時間帯…正直もう限界だ。）

男は起き上がる気力も無いみたいで、ゴロリと仰向けに転がる。天井が見える。

（思えば俺の人生って何だったんだろう。貧乏な家に生まれて26年、学歴は貧乏な家族を支えるため、働きに出たから大学には行かず高卒止まり。社会人になってから家を出て、初めてできた彼女には裏切られ女性不信になり、親友だと思っていた友人にも裏切られた。必死で働いても親父がギャンブルで借金をこさえて実家はさらに貧乏に…女性不信で最早女は信用出来ないし結婚はしないに

ても、このまま親の借金返済の為に働いて生涯を終えるのかな…）
ふと視線を移すと、郵便受けから取り出してから手に取ったままの
チラシが視界に入った。

「人生に希望が持てない人、生きるのに疲れた人？」

（正に俺のために有るようなチラシなこと）

少しだけ興味が湧いて、詳しく読んでみようとしたけれど

「どれどれ…胃…S e k a i n i …興……」

眠気に負けて夢の世界に旅立った。

第1話 さようならこんにちは

ピピピピッ！ ピピピピッ！

「んあ……もう朝か……」

目が覚めた男は、目覚ましを止めてむくりと起き上がった。

「今日も夢も希望も無い1日の始まり……か」

まずはシャワーを浴びようと、無意識のまま寝たときに手に持ったままだったチラシをテーブルに置き、シャワーを浴びに行く。十分後、男は出て来た。テレビを付けて無気力に眺める。

「また殺人事件、今度は母親が児童虐待で実の娘を殺害って……殺すなら産むなよ。大体おめでた婚とかなんとか、ちゃんと将来を考えてるのかね。ま、考え無しだから離婚も多いんだろうな……何であれやっぱり女は怖いし信用できない……って、もうこんな時間！急がなきゃっ……！」

随分時間がたっていたようだ、急いで家を出て駅まで走り抜ける……

「やっと昼飯！つてもカップラーメンだけどね……」

和也は走った甲斐があり、出社時刻に間に合った。いつものように順調に仕事をこなし、ささやかな昼食を食べる。すぐに食べ終わって、煙草を吸いながらのんびり過ごしていると急に携帯電話が鳴りだした。

「はい、保科です」

「おうカズヤ！今大丈夫か？」

電話をかけてきたのは、小学校からの幼なじみ「小林 庄司」だった。

「庄司……！大丈夫だよ。いきなりどうした？」

「今こつちに帰ってきてるんだよ。だから夜にでも会えないかと思ってな」

「成る程ね。明日は休みだし、仕事が早く終われば会いたいけど、何時になるか判らないよ？それでもいい？」

「おう！それなら終わったら連絡してくれ！！」

「ああ、じゃあまた後で」

通話が終わり、青空に目を向けてひと息。

「…ふう。相変わらずいきなりな奴だ。でもあいつ転勤で大阪だったよな、奥さんと子供も一人居たはずだけど…急にこっちに戻ってくるなんて、どうしたんだ？」

和也は少しの間空に目を向けながら思考にふける。

（…ま、兎に角早く上がる為に仕事頑張りますか！）

「おう！こつちだカズヤ！」

「ごめん！遅れた！先に飲んでも良かったのに」

仕事が終わった和也は、庄司に連絡してから、急いで待ち合わせ場所である一軒の焼き鳥屋に向かった。

入り口を潜ると、庄司がカウンターに座っていて、和也に気付いて声をかけた。

「いやあ、そうしようかとも思っただけだな。久々の再会だし一緒に乾杯しようかな…って事ですいませーん！大至急生2つ！」
庄司がカウンターのなかに向かって注文した。

「お待ちせしましたー！」

直ぐに生ビールが中ジョッキで2つ運ばれてきた。

「よしきたな！…それじゃあ、五年ぶりの再会を祝して、カンパイ！」

「…乾杯！」

2人は焼き鳥をつまみにして語り合った。庄司は飲むペースも早く、大分酔っぱらってきたみたいで、ハイテンションで和也に話しかけている。和也も、普段とは違い、ニコニコと話していた。大分時間がたった頃、庄司が徐に切り出した。

「そういえば…カズヤはアレ治ったのか？」

「アレ？…ああ…女性不信か…まだ治ってないよ…っていうか、今の俺からしたら逆に庄司の方が信じられないよ。よく結婚なんてしたね、子供まで作っちゃて。大変でしょ？女なんて生き物はなに考えてるか判らないし、周りから優しくされるのが当たり前だと思っただけだな。まあ時間は掛かるか、女性不信もあいつの事も」

庄司が焼酎をグイッと飲んで続けた。和也が手に持っていた猪口をカウンターに置いて頭垂れた。

「女性不信は今更治すつもりは無いよ。庄司は知ってるだろ？家のこと、一生働いて終わりさ…アイツの事は親友だと思っていたのに…今でも辛いけど、庄司が居てくれて救われたよ。あの頃庄司が居てくれたから立ち直れた、もし庄司がいなかったら女性不信に加えて人間不信にもなってたかもな」

ここまで話してから、和也はニヤリと表情を変えてつぶやいた。

「あの時初めて庄司と友達でいて良かったと思っただけ」

それを聞いた庄司がカウンターに向かって、口の中の焼酎を吹き出した。

「ブッ！…ゲホッ…ゲホッ！バツ…お…おま…お前なあ！小学校か

らの付き合いで!!」

「ハハッ！冗談だよ。でも本当にありがとう。庄司が居てくれて良かった…」

「…今更何言っただか」

そう言いながらも、赤い顔をしながら気を紛らわせるかのようにカウターを拭く庄司。落ち着いたのか、また話を始めた。

「そつえばさっき言っただけど、家の方も相変わらずか。お前は本当に大変だよな。ガキの頃とは大違いだ」

「そうだね。あの頃が懐かしいよ」

「あの頃はお前と俺で散々いたずらしたからなあ…色々した中でも、やっぱりお前の仕掛けた罠が一番だったと思うけどな」

「そんなに大した物じゃ無かったでしょ。隣のクラスの、いじめっ子の主犯格だった佐藤の机の中に煙玉仕込んだり、体育教師の堀田にブービートラップ仕掛けたり…」

それを聞いた庄司が苦笑いしながら話す。

「いや…十分タチが悪いって、それに瞬時に罠を思い付いて仕掛けるのが圧巻だったな。仕掛けた奴に見つかって2人で猛ダッシュで逃げた時なんか、俺は逃げるのに必死だったのに、お前は逃げながらも罠を仕掛けて、結局追いかけてきた奴罠に嵌って沈んでたじゃないか。あの時、コイツは決して怒らせちゃいけないと思ったぜ」
今度は和也が苦笑いを浮かべた。二人の間に、しばし気まずい空気が流れた。

「………帰るか」

「………そうだね」

家に帰り着いた和也は、そのままベッドに転がった。

（今日は会えて良かったなあ。でも…結局良くも悪くも今は今、昔

は昔なんだよな。」

今日聞いた話じゃ、庄司には2人目の子供も生まれ、大阪に家を建てたとの事だ。

「庄司はこのまま大阪に骨を埋めるんだろうな、そうなるとこれからは更に会えなくなるだろうし、俺もこれからどうなるのか……ん？」

体を横に向けたとき、テーブルに置かれているチラシに目が行った。「そういえばこんなチラシ在ったなあ、生きるのに疲れた人の為に……だったっけ」

和也はチラシを手に取り、書かれている内容を読んだ。

「ん……」

『人生に疲れた方、今の生活に限界を感じている方、剣と魔法、冒険に溢れる異世界に興味はありませんか？興味がある方は、心の中で「サイクリス」と念じてください。本当に、心の底から絶望している方の心に素早く反応！瞬時にご案内に伺います。さあ、絶望している方は今スグに！異世界がアナタを待っている！！』

「……何だろう……この何とも言えない微妙なチラシは」

（……………サイクリス……ね）

和也が心の中で「サイクリス」と呟いた瞬間、それは起こった。チラシがボウツと光り始めたと思ったたら

「……へ？」

急激に輝き始めた。直接目にライトを当てられたときよりも眩しさ

を感じ、和也は思わず目を瞑った。

「眩しい！いったい何が!？」

……光が徐々に落ち着き、和也が目を開けた。目に映ったのは…

「……………嘘だろ」

月光に照らされた、広々とした草原だった。

第2話 ツェザリアと和也のチカラ

「ハア…」

異世界に渡ってしまった和也は、しばらく時間が経過しても未だその場で途方に暮れていた。

目の前に映るのは月明かりに照らされた草原、空を仰ぎ見れば星が綺麗に瞬いていた。

満月が辺りをノスタルジックな雰囲気包んでいる。

季節は不明だが、幸いにも寒さを感じない。

「ホント…嘘だろ？」

和也は未だに自分の置かれた状況が信じられない。あのチラシを読んで、ふと心の中で「サイクリス」と呟いた瞬間、光に包まれて…気がついたら草原に立っていた…

「大体、サイクリスって何だよ…」

「それは僕の名前だよ」

「ふうん……なっ!!」

「アハハハ！ビックリした？」

和也がサイクリスと口に出すと、カズヤの後ろに1人の青年が立っていた。

サラサラとした紺のショートヘア、体型はスラッとしている。20代前半に見えるその顔は爽やかな笑顔を浮かべていた。

第2話 ツェザリアと和也のチカラ

「ウワッ！……ビックリしたさ！！でもそれよりも、この状況は何なんだよ！あのチラシに書いてあった《サイクリス》がアンタの名前って事は、アンタの仕業だろ！！」

和也がグルッと振り向いて、サイクリスに向かってまくし立てる。

「あのチラシに書いてあったでしょ？スグにご案内に伺いますって、僕がご案内に伺いました！スグだったでしょ？」

サイクリスが和也に爽やかに笑いかける。それを見た和也はウンザリした顔を向けた。

「ご案内って、ここにくる前にしてよ…で、チラシ通りだとすると此処は異世界で、いつ地球に帰してくれるんだ？」

サイクリスが首を傾げた。

「えっ？そんなことしないよ？」

「……………ハイ？」

「だから、僕はカズヤを地球に返したりはしないよ」

「……なっ、何で俺の名前知ってるんだ！俺の名前をアンタが知っているって事はこれは陰謀か！？ふざけんなよ！さっさと地球に返せよっ！！」

「だから僕はしないって。元々カズヤの願いを受けての異界渡りだし。まあ今から説明するから落ち着いて聞いてね」

サイクリスが冷静に話しかけると、和也は少し落ち着きを取り戻したようだ。

「俺の願いつて、そんな事願った覚えは無いよ！！……………っと、説明してくれるんだな。先ずは大人しく聞くよ、話してくれ。アンタのことも、どうして俺の名前を知っているのかも」
サイクリスは頷き、一呼吸置いて話し始めた。

「それじゃあまずは僕の事を話そうか。僕の名前はさっきも説明したけど《サイクリス》カズヤの居た地球ではなく、この世界の神様の1人さ」

サイサリスが人差し指をピンと立てる。

「アンタみたいなのが神様？そんな解りきった嘘を……いや、とりあえず大人しく聞くんだっとな、説明を続けて」

「うん。で、この世界の名前は《ツエザリア》　チラシに書いてあった通り、剣と魔法に溢れる世界だ。この世界には様々な神がいて、それぞれがこの世界の色々な事象を管理している。僕も管理している事象が有り、それによってカズヤをこの世界へ渡した」

和也がうなずきながら答える。

「ふむ、魔法ね、それは後で良いか。で、アンタが管理しているのは？」

「イレギュラー」

和也が理解できなかったように首を傾げた。

「…ハイ？」

「だからイレギュラーだって。この世界ではイレギュラーも事象のひとつとなっていてね、イレギュラーな事象が起きないと其処から世界が不安定になっていくんだ。で、僕がイレギュラーな事象を起こしたんだけど、それが今回の異界渡りって訳だよ。それで誰をこちらに渡そうかって事になったんだけど、誰でも良かったんだけど、無理矢理じゃその人にとっての迷惑になるからね。どうせならあっちの世界、地球で生きるのに本当に限界を感じている人にしようって事でカズヤにしたんだ」

「…俺はこんな事望んでない」

「いや、望んでたんだ。こっちに来たキツカケになったあのチラシ有るでしょ？アレには魔法によるフィルターを掛けていてね、心の底から願っていないければ反応しない仕組みにしてあるんだ。カズヤは自覚無いかも知れないけど、無意識に、心の底では悲鳴を上げていた。本当はもう限界だったんだよ」

「……そうなのか……」

「うん、それでチラシに掛かっていた魔法がカズヤに反応して、カズヤはコッチの世界に渡ってきたんだ。僕はその異界渡しの力の波動をキャッチしてここに来たのさ。因みにその時にチラシから僕に送られて来た情報によって、カズヤの名前が解ったんだよ。この世界にカズヤを渡し、案内というか説明だね…を、した時点で僕の役目は終了。カズヤはこの世界で好きに生きていけばいい」

「好きに生きて行けばって…急にこんな所に放り込まれて、どうすればいいんだよ…」

和也が頭垂れる。

「この世界に来た時点で、地球に居た頃にカズヤが縛られていた物は全て無くなったんだ。カズヤのしたいように生きていけばいいんだよ。…まあ、こっちには縛られていた物はないけど、魔物とかは

いるから、気をつけてね」

それを聞いた和也が、今度はガバツと顔を上げた。

「ま、魔物！？それって危ないじゃん！！武術とか何もしたこと無いし、襲われたら死んじゃうよ！！！！」

「あ、其れについては、この世界には魔法があるし、僕からカズヤにプレゼントがあるから大丈夫だと思うよ」

サイクリスがニコニコと答えた。

「…プレゼント？」

「うん、一つ目はカズヤの体のリミッターをカットしといたから、鍛えれば鍛えるだけどんどん強くなれるよ。二つ目は、能力をプレゼントしたんだけど、コレはカズヤの深層心理の状態で決まるから、どんな能力かは僕にも解らないんだ」

「解らないって、身体は鍛えればいいとして、能力の使い方とかは？」

「発動は直ぐにできると思う。要は超能力みたいな物だから、目標に向けて集中すれば発動するはずだよ。後で確認してね」

それを聞いたカズヤは、サイクリスに対し集中した。

「って、カズヤ！何してるの！？」

「何って…ねえ…」

「いや、チョッ！！ホントに止めて！！！！危ないから人に向けては行けませ」

そこまで言ったサイクリスが、急に姿を消した。

「あれっ？おゝい、どこ行った？」

「カズヤ…下…」

「下？」

和也がサイクリスが立っていた場所の足元を見ると、直径、深さ共に五メートル位の穴が空いていた。サイクリスはその穴に見事に落ちていた。

「…これが能力？…これってもしかして」

「うん、僕にも解った気がする。今そこに上がるから待ってて…っ

と、お待たせ」

「ウワッ！だから後ろに立つなよ！」

「ささやかな仕返しだよ」

一瞬の内にサイクリスがカズヤの後ろに立っていた。

「さて、君の能力は…ズバリ畏だね」

「だよな………今のはどう見ても落とし穴だし、小さい頃の影響なのかなあ、何かパツとしないなあ」

「いや、地球から来たカズヤの能力と考えるとコレは凄い能力だよ。能力にもリミッターは掛かってないから、経験していけばそれだけ強くなるし、カズヤには地球に居た頃の知識も応用できるからね」

「まあ、コッチの文明がどの程度かは判らないけど、そう考えれば確かに強力かも？」

和也はまだ納得がいけないのか、複雑な顔をしている。

「うん、ただ…身体能力もこの畏の力も鍛えなければ今のままだから気をつけてね。経験値を上げなきゃただの一般人と変わらないから」

「うん、わかった」

サイクリスが念を押すと、和也がコクリと頷いた。

「さてと、まだ後は魔法とか町の事とか色々あるけど、これはあえて説明しないでおくね。此处で教えるより、自分で実際に触れていった方が面白いでしょ？」

「まあ、確かにそうかも」

「…それじゃあ、僕はこの辺りで失礼するよ。もう会うことは無いけど、新しい世界を謳歌してね」

説明を受け、自分が限界だった事に気づいた和也。しかしツェザリアにきて、確かに解放された気分になっていた。小さい頃に持って

いた好奇心とポジティブな感情が蘇ってくる。

「…こっちに来て心が解放された気がするし、確かに限界だったのかもね。ハッキリ言って納得はしていないけど、とりあえずはこの世界で生きていくしかないし、前向きに頑張ってみるよ」

それを聞いて安心したのか、サイクリスがにっこりと笑いかけた。

「うん、その調子だよ！それでは！！」

話が終わると、サイクリスは景色に溶け込むように消えていった。いつの間にか、朝日が登り始めていた。

しばらくして、和也がウンと伸びをした。その顔は、地球に居た頃とは違い晴れやかな表情をしている。

「さて、それじゃあ行きますか。ってそういえばここ何処なんだ！？アイツに聞くの忘れてたー！！！！」

……和也の旅はまだ始まってはいなかった…

第3話 街は何処？

「さてと、ホントに何処に行けばいいんだ？」

朝日に彩られた草原で、和也は未だに立ち尽くしていた。

「うーん、取り合えずは人が居るところを探さなきゃな。服しか持っていないし、このままじゃ行き倒れになる。能力については、この世界の事が解るまでは人に見せない方がよいな…能力に頼ってばかりいたら、身体は弱いままだし、魔法も在るみたいだからなあ。基本的には、能力は練習場意外で使わないようにして、この世界に合わせて物理的な手段と魔法を使っていくか」

和也はヨシッと気合いを入れた。

「ずっとここにいてもしょうがないし、適当に歩いて行きますか」
特に方向も決めないで、和也はテクテクと歩き出した。

歩き始めて早1時間、周りは未だに草原が続いている。

「それにしても広い草原だなあ、日が暮れる前にどこかにたどり着ければいいけど。道路…この世界じゃ街道かな？とか在れば解り易いんだけど無いのかなあ？」

いったい何処へ向かえばいいのか解らない。いい加減歩いてるだけというのも飽きてきたみたいだ。

「ふう、少し休憩するか」

和也はどっこいしょと、その場に座り込みあぐらをかく。

「休憩するのは良いけど暇だなあ。…よしっ、今の所能力しか持っていないし、早いところ把握しときたいから少し練習するか」

和也は地面に視線を向けて集中した。と、音もなく穴が出来上がる。

「今は落とし穴だけなのかなあ？それともイメージで変わるとか…」

今度は自分の真上に視線を向け、集中した。…と

ガンッ！

「ッ！！〜痛いつ！！」

和也が集中したら。頭上に唐突にタライが出て来て、下にいる和也に向かい墜ちてきた。さっきの音からすると、見事に直撃したみたいだ。

「イツ痛あゝ、まさかと思って想像してみたら、本当にタライが出るなんて。って、あれ？タライはどこ行っただ？」

和也に当たったタライを探すが、一向に見つからない。和也は少し和也は腕を組み考えて、おもむろに少し前の上空に集中してみた。すると今度は和也の少し前の位置にタライが出現し、目の前を落下

すると、タライは地面につく前に音もなく消えた。

「ふむ、成る程ね。じゃあ次は…」

今度はその場で目を瞑り、目を瞑ったまま集中を始めた。少しして和也は目を開けると、後ろを向き、地面に落ちていた大きめの石を手に取り、少し前の地面に放り投げた。石が地面に付くと、その部分が陥没し直径五メートル程の穴が口を開けた。

「成る程、しっかりイメージ出来ていれば、視界の外でも設置可能で、罨自体もイメージ次第と。しかし、イメージで作れるって事は、近代兵器も可能はずだし、罨として認識していれば何でも使えそうだなあ。意外と応用が利くみたいだ。あ、そうだ！その内魔法も覚えたら、罨に組み込めるか実験してみよう。でも罨を設置したときに何も合図みたいな物が無いのが解りづらいな。ん？でも本質が罨だから、解り易かったら罨が在ることがバレるから駄目なのか」

和也はある程度能力の事が把握できたようで、1人頷いた。

和也は一通り実験をして息抜きをすると、意気揚々と歩き出した。

「しかし…街は何処にあるんだ…」

それから約三時間、今度は色んな所に穴を創りながら歩いていき、和也の体内時計では12時を回った頃だろうか。唐突にその人物は現れた。

「ん？あそこに見えるのは人だよな？……！！あの人に聞けばここに街があるか解るかも！！オーイ！！」

和也が遠くにある人影に手を振り声を張り上げる。人影の方も和也に気づいたようで、手を振りながら近付いてきた。

「ようニイチャン！おかしな格好して、こんな所で何してんだあ？」
近付いてきた人物は全部で三人、どの人物もニヤニヤと嫌な笑い顔を見せている、口調も荒い。ぼろ切れのような布を体に巻き、その上に革の鎧を着込んでいる。何となく怪しい雰囲気醸し出していた。

（う、良い人には見えないし何か胡散臭い。…って、もしかして追
い剥ぎとか！？）

「え、えーっと、旅の者なのですが、どこか休める場所を探してま
して、近くに町や村はありますか？良ければ教えて貰いたいのです
が」

「町かぁ、あるにはあるが、ニイチャン金持つてるか？」

「いえ…持ってないです」

「ソイツはおかしいなぁ、そんな身なりだ、隠してるんだろう？…
良いから大人しく出せや！」

（やつぱり！かしどうする！？…逃げるか！！）

「ホントに持って無いです！！…所で…あなた方はどちら様で？」

そう訪ねられて、盗賊風の男の中のうち、先頭の男が腕を組み、胸
を張って得意げに声を張り上げた。

「ハンツ、俺たちはなぁ、この辺を荒らし回っているスクアイパー
兄弟だ！！俺達にかかれば守備隊も相手にならねえ」

先頭の男が話しをしていると、後ろにいた男が先頭の男に話しかけ
た。

「アニキ……アニキ！！」

「何だよウルセエなぁ！！まだ俺が喋ってんだろぅがっ！！」

「いや、あのニイチャン逃げちまいやしたが」

「な、何い！！」

男が和也の居た方に目を向けると、遙か彼方に和也が爆走している
後ろ姿が見えた。ドンドン距離が離れていく。

「なっ！何っ！逃げ足だ」

三人の男がぼかんとした。

「って、ボーツとしてる場合じゃない！急いで追っぞー！！」

「ヘイツ！！」

三人の男が和也に向けて走り出す。が、10メートル程進んだ時、
突然足元の感覚が無くなり、三人の男はドスンと落下した。

「痛てえー、一体どうなっただ」

「ア、アニキ！上！上見てくだせえ！！」

「うえだあゝ？つて、オイイ！！どうなってんだコリヤあ！！どうして穴にハマっちまってんだ！！！！」

「あつしらに言われても解りませんよ！！」

和也は逃げた時、逃走経路に落とし穴を設置していた。三人の男は其処に見事にハマったのだ。三人の男が呆然していると、暫くして和也がやってきた。

「おゝ、見事にハマりましたね」

和也の顔はニコニコとしている。とても楽しそうだ。しかしその顔を見た盗賊達は、これが和也の仕業だと確信し、ビクビクとしていた。

「オ、オマエがやったのか！？オ、オオ俺たちをど、どどうするつもりだ」

「どうもませんよ。ただ、街の場所を教えてくださいませんか？」

「わ、わかった。東だ、東の方に行けば街道に出る。そこを太陽の方に進めば《ノール》という名前の、小さい町がある」

「東、ね。教えてくれてありがとね！！」

町の場所を知った和也は、東に向けて歩き出す。

「オ、オイ！！俺達を助けてくれないのか！？」

「アハハ！！そんな事するわけ無いじゃん。そこでしっかり反省するんだよ。頑張つて脱出してねえ」

「オ、オイイ！！置いてくなこの人でなし！！！！チ、チクシヨー！！！！！！」

スクアイパーの叫びが草原に響き渡った。

「ふむ、やっぱり逃走ルートに仕掛ければ、追ってくる相手はかなりハマってくれる。人間どの世界にいても、考え方は余り変わらないみたいだ。」

東に暫く歩くと、街道が見えた。今和也はその街道をテクテクと歩いている。

「しかし昼間から盗賊に遭うとは…ツェザリアは治安が悪いのか？で、街道はアスファルトじゃなくて石畳…文化レベルは地球より進んでいないと」

和也が言った通り、街道は石畳が敷き詰められていて、それが延々と続いていた。

「街灯もないのか、夜とかどうするんだろう？もしかして電気も無いか…ウワァ、思ったよりもアナログかも」

そして、休憩を挟みながら歩くこと4時間、やっと和也の前に木製の門が見えてきた。

「…！や、やっと着いた！！疲れたあゝ」

和也が門に歩いていくと、鎧を着た40代位の男が話しかけてきた。どうやらこの町の門番のようだ。

「ようこそノールへ、この町へはどんなご用で？」

（あ、やばい！目立ちたくないし、素直に言わないでごまかした方がいいのかな）

「はい、私は旅の者なのですけれど、実はこの付近で盗賊に襲われまして有り金と荷物を奪われてしまいました。宿をとるお金もなく、旅を続ける為にもお金を稼ぎたいのですが、どこか在りますか？」

「何と、それは災難な。因みにその盗賊の名前は判りますかな？」

「あ、はい。三人組で、スクアイパー兄弟と名乗ってました」

その名前を聞き、男は驚いた顔をした

「スクアイパー…！よく無事でしたな！！奴らには我々守備隊も手を焼いているのです。命があっただけでも幸運ですな…成る程事情は解りました。取り敢えず今日の処は守備隊詰め所のベッドをお貸しします、そこで眠ると良いでしょう」

「本当ですか？ありがとう御座います！！」

「私もまだ仕事があるので、明日この町を御案内しましょう。仕事についても明日考えましょう」

「何から何まで、本当にありがとうございます」

「いえ、盗賊に襲われたとの事だし、持ちつ持たれつという奴だ。

…おっと、申し遅れたな、私の名前はオッド・タウルだ。何かあったら言ってくれ」

「あ、僕の名前は保科和也、カズヤと読んで下さいタウルさん」

「不思議な名前だな。カズヤか、私のことはオッドで良い。さて、それでは今日はゆっくりと休んでくれ」

「はい！ありがとうございますオッドさん！！それではまた明日」

この世界に召喚された、その日のうちに何とか町にたどり着いた。

第4話 ノールと仕事

「…知らない天井だ」

（まさか自分で言う事になるとはね）

「と、ノールに着いて、守備隊の宿舎のベッドを借りたんだよね。」
ノールに着き、守備隊の宿舎のベッドに案内された和也は、そのま
まベッドでグッスリと寝たのだった。

「今日はオッドさんがこの町を案内してくれるんだったよね。でも
その前にお腹が減った…そういうばこつちに來てからまだ何も食べ
てないんだ」

グギユルウウウ

何も食べていないのを思い出したら、和也の腹の虫が活発に騒ぎ出
した。

「オッドさん早く来てー！！」

第4話 ノールと仕事

コンコンツと扉をノックする音が響き、和也の部屋に1人の男が訪れた。

「失礼するぞ。おはようカズヤ、昨日はよく眠れたか？…って、カズヤ、何やってんだ？」

カズヤの部屋を訪れたのはオッドだった。オッドが部屋に入ると、和也が床に這い蹲っていた。

「オッドさん…め…飯…」

「いやあ、お腹と背中がくっつきそうでしたよ」

あの後和也は直ぐにオッドさんに連れられて、守備隊の食堂でご馳走になってしまった。和也がパンパンに膨れたお腹をさすりながら言う。オッドが呆れた顔をした。

「まったく、昨日から何も食べて無かったとは。嫌…盗賊に襲われたんだっとな。それじゃあしょうがないか」

和也が引きつった笑顔を浮かべる。

「ア、アハハハ…」

襲われたのは事実だが、実は落とし穴に落として撃退している。目

立つのを避けるために嘘を吐いたのが後ろめたい。

「さてと、それじゃあそろそろ町へ行こうか」

「あ、ハイッ！！よろしくお願いします！！」

和也はオッドに連れられて、宿舎から外に出た。

「へえ、此处がノールの町かあ」

オッドに連れられて、和也はノールの町の広場に着いた。広場では朝から子供が元気に走り回っている。ノールの町は、建物が全て木造で、どこか長閑な雰囲気醸し出している。広場から十字に大きな通りがあり、それぞれの通りには様々な店や露天が並んでいる。その周りを囲むように民家が軒並み経っているという風情だ。

「ノールは人口約五百人の、割とのんびりした町だ。どうだ、気に入ったか？」

和也がにこやかに答える。

「ええ、みんな生き生きとしていて、とても良い町だと思います。気に入りましたよ」

地球に居た頃の自分の居た環境と比べ、どの人もみんな生きる事に活発的だ。長閑な雰囲気と人々の生き生きとした表情に、和也は直ぐに気に入った。

「それで、仕事はどんな物があるんです？」

「オツと、そうだったな。直ぐに出来る物だと、ヤッパリギルドかな。ギルドは初めてか？」

「ギルド？聞いたこと無いですね」

和也が首を傾げながら答えた。

「ホウ、ギルドを知らないなんて珍しいな。ま、簡単に言えば何でも屋だ」

オッドの説明では、この世界には王国等、様々な国が存在するが、騎士（この世界には騎士もいるらしい）や守備隊等はそういった物

に所属していて、基本的に一般市民からのトラブル等は、騎士や守備隊では、市民からの相談が来ると、先ずは上に報告して、その後上から指示が来ないと動けない。そのためにどうしても初動が遅れ、解決出来ない事が多いらしい。ギルドとは騎士や守備隊とは違い、市民の依頼を受け、それをギルドに所属している者が速やかに解決して報酬を貰うという物らしい。また、町によって違うが、ギルドには色々と種類があるらしい。

「種類？どんな物があるんですか？」

「先ずは冒険者ギルドだな。此処は基本的にどんな依頼も請け負っていて、ギルドの中では一番でかい組織だ。次に大きいのが商人ギルド、まあ此処はその名の通り商いに関係した物を扱っている。その次に大きいのは魔法ギルド、此処は魔法関係だな。因みに錬金術関係は商人ギルドじゃなくて魔法ギルドになるぞ」

「錬金術？そんなものもあるんだ。で、次は？それで全部？」

「いや、後は盗賊ギルドと暗殺ギルドだな。このふたつに関しては俺も名前ぐらいしか知らないんだ」

「盗賊ギルドに暗殺ギルド？名前からして危なそうですね。係わない方が良さそうだ」

和也がブルリと震えながら呟いた。オッドもウンウンと頷く。

「うむ、そうだな。俺もその方がいいと思うぞ」

「はい。それでオッドさん、この町にはどのギルドがあるんですか？」

「ああ、この町には冒険者ギルドと商人ギルドがある。まあこの二つのギルドはどの町にもあるんだがな。因みに魔法ギルドはちらほらと色んな町にある、しかし盗賊ギルドと暗殺ギルドは何処に在るのかは判らない。二つとも後ろ暗い組織だし、秘密が多いんだ。特に暗殺ギルドは、噂だけでその存在自体あるかどうかも判らない存在だ」

「成る程、なら僕は商人ギルドかな」

和也が呟くと、オッドが首を横に振りながら応えた。

「嫌、カズヤは冒険者ギルドに連れて行こうと思っている」

「え？何故ですか？俺には戦う力なんて無いですよ？」

オッドが申し訳無さそうな顔をしながら話を続けた。

「まあそうだろう、しかし商人ギルドの場合、金を稼ぐには物品の取引等が主流でな、基本的に元手が必要なんだよ」

和也が茫然とする。とっさにオッドが話を続ける。

「い、いやっ、しかし冒険者ギルドは戦うことだけじゃないんだ。

町の中の雑用なんかの依頼もくるし、決して危ない事だらけじゃない。それに依頼が終われば直ぐに報酬を貰えるし、金が無いカズヤにはちょうど良いと思わんか！？」

それを聞いた和也は、ハッと顔を戻す。

「そうですね。雑用みたいな依頼もあつて、報酬も解決して直ぐに出るなら俺には冒険者ギルドが最適みたいですね…オッドさん、冒険者ギルドに行きましよう！！」

オッドがホッと一息吐いた。

「ああ、それじゃ案内するよ。こっちだ」

オッドが歩き出す。和也もそれに付いていった。

ギルドは広場の南側の通りにあつた、ほかの建物よりも大きな作りで、威圧感を感じる。

「此処が冒険者ギルド…」

「ああ。…さて、中に入るぞ」

オッドが両開きのドアを開けて中に入る。和也も続いて中に入った。

ギルドの中は、正面に長いカウンターが鎮座しており、カウンターの向こうに受付らしき女性が横に並んでいる。他には幾つかのテーブルと椅子が置いてある。この時間は丁度空いていたのか、余り人が居ない。

「さて、じゃあカズヤ…あそこのカウンターで登録すれば仕事を受けられるからな。俺はそろそろ仕事に戻らなけりゃいかん。後は受付にでも聞いてくれ」

「あ、ハイッ。オッドさん色々と有り難う御座いました」

和也がぺこりとお辞儀をすると、オッドが手を振りながら返事をした。

「いや、此処までしか案内できなくて申し訳無い。まあ先ずは簡単な仕事をしていけば問題も無く生きていけるだろう。それじゃあまたな。この町に居る以上は会えるし、何かあったら直ぐに相談に来い」

「ハイッ！有り難う御座います！！」

オッドが後ろ手に手を振りながら、ギルドから出て行った。

「さてと…」

オッドを見送り、和也は、カウンターに近付いていく。カウンターにいた受付の女性が、和也が近付いてくるのに気付いたようで目が合う。和也の身が強張った。

「あの…すみません。ギルドに登録をしたいのですが」

「ハイッ、初めての方ですね！！」

受付の女性がニッコリと答えて説明する。長い茶色の髪の毛と、パツチリとした瞳でとても可愛い。しかし女性不信の和也には何の変化も無く、寧ろ余計に警戒しているかの様だ。

「それではお名前をどうぞ」

「はい。保科和也…和也が名前です」

和也がぼつりと言う。

「ハイッ…と、名前が後なんて珍しいですね。其れではカズヤ・ホシナ様、と…」

受付の女性が用紙に名前を書き込んだ。

「ハイッ、これで登録は終了です！！」

「え？これだけ？」

「ハイッ、冒険者ギルドは大きい組織なだけあって、ネットワーク

がしっかりとしているので登録は簡単なんですよ」

「ふーん、そんなもんか」

和也は納得したようなしてないような顔をした。

「では次に仕事についての説明をしますね」

「あ、ハイッ。お願いします」

冒険者ギルドの仕事は大まかに4種類に分けられているらしい。討伐、護衛、採取、雑用の4種類だ。そしてランクみたいな物は無く、どの仕事をするかは自由に決められるのだが、依頼を請ける冒険者の実力や実績によっては、ギルドの判断で冒険者に依頼を請けさせない事もあるらしい。

（なるほどね。それじゃあ、最初は難しい依頼を受けれないって事は、暫くは身の危険は特に無いな）

「成る程、解りました。それじゃあ雑用の依頼を請けたいのですが……」

「ハイ。それではこちらのリストから選んで下さい……」

……こうして、和也のノールでの生活が始まった……

第4話 ノールと仕事（後書き）

初めてアクセス解析なる物を見てみたのですが、このような小説を読んで下さった方がいてくれたようで感激です！！

この小説を読んでくれた皆様方、どうもありがとうございます！！
！！

第5話 捕獲依頼？

「よっこいしょっと！ポールさん！終わりましたよ！！」

「おお、有り難い。いつもカズヤ君に頼んで悪いなあ」

和也が、小太りな40代位の男性に声をかける。声をかけられた男性が、にこやかに返した。

「いえいえ、仕事ですから。此方こそ指名までして貰って有り難う御座います」

「いやあ、カズヤ君以外の冒険者ギルドの連中じゃ、こつも丁寧に仕事をしちゃあくれないからね。やっぱり依頼するなら質が良い方に頼みたい、町の連中の評判になってるぞ」

ポールの言葉に、和也はぺこりとお辞儀をした。

「有り難う御座います」

第5話 捕獲依頼？

和也がノールに来てから、1月がたっていた。その間に和也は、冒険者ギルドでの依頼のうち、雑用の依頼のみをこなしていた。これはただ単に、ほかの依頼の場合、地球育ちの和也には戦いの経験が無いし、それ以前に体力が保たないと考えたからだ。しかしサイクリスの話だと、鍛えれば鍛えるだけ強化が可能だとの事なので、先ずは雑用の依頼で鍛える事にしたのだ。

「…そういえば最近の依頼は、指名しか来ないと思ったら、そういう事だったんですね」

和也は地球に居た頃も、仕事は丁寧にキッチリとこなしていた。その為、クレームも無く取引先での評判は良かった。ギルドでの仕事でも、その時の経験を活かして依頼をこなしてきた影響が出て来た様だ。

「そうなんだよ。お陰で最近じゃあ、和也を指名しても先に依頼されてて指名できない事もある。まあそれでも和也を指名するんだがな」

和也が申し訳無さそうな顔をする。

「何だか申し訳ないです」

ポールは頭を振りながら答える。

「いや、気にしないでくれ。それだけ和也に助けられてるって事なんだから、今まで通りにすると良いさ。さて、それじゃあこれが報酬だ。今日も有り難う」

ポールが和也に銅貨を20枚手渡した。

「此方こそ、有り難う御座います!!」

報酬を受け取ると、挨拶をして和也は立ち去った。

「これで今日の依頼は全て終了だな」

今日和也が請けた依頼は全部で5件だった。

基本的に冒険者ギルドの人間は、雑用の依頼を余り請けない。何故ならこの依頼は報酬が余り高くないからだ。請けるとしたら、本当にお金が無くて小金をチャチャツと稼ごうという輩ばかりで、普段請けない仕事だから当然仕事は荒くなる。和也は雑用の依頼が有り余っている事態にこれ幸いと1日平均5件、簡単な依頼ばかりの時は1日10件もの数をこなしていた。この仕事量、そして他の冒険者ギルドメンバーの仕事の荒さも、丁寧な仕事をする和也の高評価に繋がっていた。

和也は町の中を歩き、一ヶ月前から契約している宿屋に辿り着いた。和也が泊まっている宿屋は、ノールの町の南東部に位置している。

宿屋の中は、観葉植物などが飾っており、全体的に柔らかい質感のレイアウトだ。

宿屋の入り口のドアを開け中に入る。

「只今帰りましたー!!」

「あ、カズヤさん！お帰りなさい!!」

「あ、はい…ただいまコニーさん」

宿屋の看板娘が出迎える。歳は17歳、明るい性格で黄色の長い髪の毛、パツチリした青い瞳の可愛らしい、近所でも評判の娘だ。しかしコニーを見た和也の表情には何も変化はない、相変わらず女性恐怖症は治っていないかった。和也は簡単な挨拶だけすると、そのままそそくさと二階にある自分の部屋へと歩いていった。

「あ……カズヤさん……」

コニーが落ち込んだ表情でぼつりと呟いた…

「ふう、今日も1日働いた。もう大分稼いだな」

部屋に入り、木製の少し堅いベッドに仰向けに寝転がった。もうコニーとのニアミスは頭に無いようだ。

今の和也の資金は、銀貨で30枚。これは一般人の家庭が、3ヶ月生活するのに使う金額と同程度だ。

因みにこの世界での通貨は金貨・銀貨・銅貨の三種類だ。各百枚づつ銅貨↓銀貨↓金貨と上がっていく。和也の計算では、銅貨は日本の円で換算すると、一枚が約100円程度と考えられた。

「そろそろ雑用以外の仕事も請けようかな…」

ある程度のお金が貯まったので、これで旅に必要な道具や、戦闘の為の装備も最低限の物は揃えられる。装備を整えて、町の外に出る採取や討伐の依頼を請けようという事だ。和也はノールに来て2日目に、この世界の服は買ったが、その時は必要性を感じなかったのだ、まだ鎧などの装備品を購入していかった。

「結局まだ魔法は習得してないけど、違う町に行った時に覚えるしか無いよなあ」

そう、この町に魔法ギルドが無い時点でもしやと思つたら、予感的中とばかりにこの町には魔法に携わっている人が1人も居なかったのだ。

「まあいいや、兎に角明日は雑用以外の依頼を請けて、装備品等を揃えに行こう」

和也は1人ヨシツと気合いを入れると、一階にある食堂に行き、柱の陰からコニーに見つめられながらも、それに気付かずパクパクと夕飯を平らげて、部屋に戻るとその日は早々に眠りについた。

翌日、昼前に目が覚めた和也は宿屋でご飯を食べないで、町の通りに並んでいる露店で簡単な食事を取り、早速武器・防具屋に行き装

備を整える。

防具は自分の体力や筋力と相談し、一番低いランクの物の中で、動き易いように胸から肩までをカバー出来るタイプの革の胸当てと、金属製の肘当てと膝当てに決めた。

「問題は武器なんだよなあ。ナイフと剣と、どちらにするか」

和也がウーンと唸った。が、直ぐに結論は出たようだ。

「まあいいか。本当はナイフの方が使い易いけど、相手は魔物だし、ナイフじゃ致命傷にならない魔物もいるかもしれないから、両方共買っておこう」

斧や槍は、持ったことも無いし重いので使いこなせるか判らないので論外。その他の中距離武器にしても、扱いに自信がない。まあ、その距離だったら魔法を覚えれば、畏と魔法でカバーできると考えるのチョイスだった。

和也は、懐と相談して一般的な簡素な造りの両刃剣：いわゆるロングソードと、ナイフは剣よりも金額が安いので少し良い物をと、頑丈に造られた大振りなダガーを購入した。

「さて、それじゃあギルドに行くか」

和也は、武器・防具屋を出てギルドに向かい歩き出した。

「こんにちはー」

「カズヤさん、お疲れさまです。依頼を請けに来たんですね。またカズヤさんへの指名依頼が溜まってますよ」

和也はギルドに着くと早速カウンターに行き、30歳位の、髪をオイルバックに整えた穏やかな雰囲気の男性職員に話し掛けた。ギルドのメンバーは、いつも女性職員の列に並ぶので女性職員の列はいつも長蛇だ。しかし男性職員の列は空いている。その為、女性恐怖症の和也には良かったようで、いつも男性職員の列に行き、並ぶこともなくノンストレスでスムーズに依頼を請けていた。

「そうなんですか。それは悩むなあ…ノイルさん、実はそろそろ他の依頼を請けようかと思っっているのですが」

それを聞いた男性職員―ノイルは驚いた顔をした後、嬉しそうに話し出す。

「そうですか！それは此方としても有り難い。カズヤさんなら他の依頼でもしつかりやってくれるだろうし大歓迎ですよ！」

和也が困った顔をする。しかしノイルは穏やかな顔で話を続けた。

「でも、指名が入っているんじゃない」

「いや、基本的に此处での依頼は、指名であつても請ける方の自由です。幸い雑用の依頼は緊急性が無い物が多いですし、事情を話せば解ってもらえます。特に依頼者から好印象のカズヤさんなら、何の不満も無く納得してくれるでしょう。カズヤさんの自由に依頼を請けて下さい」

「そうですか。それじゃあ時間がある時には、雑用の仕事もさせて貰いますね」

「それが良いと思いますよ」

「はい。じゃあ雑用以外の依頼をお願いします」

「はい。それではこれがリストです、この中から依頼を選んで下さい」

ノイルはコクリと頷くと、和也の前にリストを広げた。

「有り難う御座います。うーん、どれどれ…」

和也は、リストをじっくりと見ていく。ふと、一つの依頼が目についた。

「ノイルさん、この依頼って」

「ああ、この依頼ですか。魔物を生け捕りなんて、珍しい依頼ですよ」

和也が見つけたのは、魔物の討伐依頼なのだが、普通討伐の依頼の場合は、魔物を殺す依頼なのだが。この依頼は魔物を殺すのではなく、生け捕りにするというもので、とても珍しい依頼だった。

（魔物を殺したり撃退するんじゃなく生きたまま捕獲か。討伐依

頼じゃあ、人や動物を殺した事が無いから余り気が進まなかったけど、これなら捕獲すればいいんだし、どんな魔物が判らないけど、罾の練習には丁度良いかも」

「…ノイルさん、この依頼を請けたいのですが」
ノイルが驚く。

「これを請けるんですか！？…まあ、初めての仕事ですけど、カズヤさんなら雑用依頼での実績があるので大丈夫でしょう。あ、まだ教えていなかったのですが、雑用以外の依頼の仕方を教えますね」
ノイルの説明では、雑用以外の依頼ではまずギルドで依頼書を受け取り、依頼が完了したら依頼者に依頼書に完了のサインをして貰う。それをギルドに持って行くと報酬が支払われるとの事だ。

「成程、依頼が終わったら、ギルドに来ないと報酬が貰えない」と和也が理解して頷いた。

「はい、そうです。ではこれが依頼書ですので、無くさないように気をつけて下さいね」

そう言うと、ノイルは和也に一枚の羊皮紙を手渡した。依頼書には何かの暗号のような文字が書いてある。

この世界の文字は、二種類の共通の文字が使われている。ヌウム文字と古代文字だ。現在古代文字は、一部の遺跡にしか使われていない。なのでヌウム文字が読めれば特に困ることはない。知識の神の名前が与えられたこのヌウム文字は、読むのが非常に簡単だった。

何故なら漢字や英語の様な物ではなく、一語一語を平仮名のように並べてあるだけなのだ。文字を覚えれば問題がない。此方に来た当初は、何がなにやら解らなかった和也だが、文字の五十音表を作り、それを使って文字を読むうちに、直ぐに読めるようになっていた。

「はい、えーっと…依頼者はチムリスさんですね、それではこれから向かいます」

「チムリスさんはこの町を出て、東の街道を20分位歩いた位置にあるダクレルの森の入り口にある家に住んでいます。それではお気を付けて、行ってらっしゃい」

ノイルとの話が終わり、ギルドを出ると和也は東の門から町を出て…

「捕獲かあ、どうなるかな…」

東の街道を、意気揚々と歩いて行った。

第5話 捕獲依頼？（後書き）

いつも読んでくれて有り難う御座います。 ころです。

えーと、仕事の時間帯が不定期な為、更新も不定期になってしまい申し訳ないです。

なるべく読者の皆さんが、更新に気づき易い時間に更新したいと思ったので、予約掲載なる物をしてみようかと思いました。 かしながら、予約掲載をして更新される前に、次話が完成してしまう可能性もあるので正直迷っています。 どちらが良いでしょうかね？？

という事で以上、 ころでした。 Trapperを読んでくれている皆様に感謝！！！！

第6話 ダクレルの森

「つと、此処がダクレルの森かぁ。お、あそこの家にチムリスさんが居るのかな？」

和也が町の東の街道を、20分程歩いていくと、ダクレルの森が見えてきた。

ダクレルの森はかなり規模を誇っていて、此処に来るまでに情報を仕入れていなかった和也には、どれだけかいのか想像もつかない。

「しかし、街道があるだけに、守備隊には会っても盗賊や魔物に遭わなかったなあ」

そう、この辺りは守備隊の警戒範囲に入っているのか、安全にダクレルの森まで歩いてこれたのだ。

「さて、それじゃあさっそくチムリスさんに会いますか」

和也は森の入り口にある家に近づいていく。近くに行くとその家が普通の民家とは違うのに気が付いた。先ず気付いたのは、この辺りでは珍しい石造りだった事だ、そして大きい。家というよりは小さな砦のようだ。和也はその異様な雰囲気、ゴクリと唾を飲み込んで扉をノックした。

コンコンッ

「すみませーん!!」

第6話　ダクレルの森

「いやあ、物々しくてご免なさい。ビックリしたでしょう」

そう言いながら、チムリスがテーブルの上にお茶を置いた。ビクビクしながら和也は答える。

「ええ、しかし何故このような場所に、あなたの様な方が住んでいるんですか？」

そう言いながら、和也は警戒しながらチムリスに目を向ける。

チムリスは20代の、体型はスラリとしていてエメラルドの短い髪の毛がサラサラと揺れる、同じ色をした瞳が意志の強さを伺わせた

……とても綺麗な《女性》だった。

さつきから和也がビクビクと警戒しているのは、まさか自分の所為だとはチムリスは気付かない。

チムリスは、和也の態度をこの特殊な環境の所為だと思い、気にせず質問ににこやかに答える。

「それには私の仕事の説明からした方が良さそうね……私はある研究機関に所属しているの。その研究機関から、此处に常駐して研究す

るよう派遣された、簡単に言えば魔物の研究者よ!!」

「ま、魔物の研究…」

「そう、今までツェザリアでは誰も魔物の事を研究してこなかった…ただ襲ってくるのを撃退するだけで何も魔物の事は何も判ってはいない。何処から来たのか、そしてその生態も…そこで私は研究機関に掛け合い、魔物の研究をする事にしたの!!今回の捕獲依頼も、魔物を研究するために必要だから依頼したのよ!!」

チムリスが誇らしげに胸を張る。和也は若干後ろに下がる。

「そ、それは立派なお仕事で!!それでどの魔物を捕獲してくれば良いのですか?」

和也は早くもこの場から離れたい様で、本題の依頼の話しを進めた。
「あ、そうねそろそろ依頼の件を話さなきゃね。今回の依頼は、この森なら何処にでも現れる《一角狼》を捕獲して欲しいの。一角狼は見たことある?」

チムリスが和也に訪ねる。和也は未だに魔物に遭遇した事はない、頭を横に振りながら答える。

「いえ、見たことは無いですね。名前からすると角が生えた狼ですか?」

「ええそうよ。大きさは普通の狼と変わらないけど、額から鋭い角が生えてるの。普段は5匹の群で行動していて、獲物を見つけると一斉に襲いかるわ。普通の狼とは違い鋭い角での攻撃もあるから気を付けてね」

「はい。判りました。それでは早速行ってきます!!」

和也がソワソワと返事をして、外に飛び出した。

「あ、ちよっと!…もう、そんなに急がなくてもいいのに。いい人そうだけど、変な人ね」

チムリスは呟くと、のんびりティータイムを楽しんだ。

「フウ!あー、ようやく落ち着いた」

和也は外に出ると深呼吸をし、落ち着きを取り戻した。

「さてと、一角狼か…よしっ、行きますか!!」

気合いを入れ直し、森の中へと歩んで行った。

ダクレルの森は、鬱蒼と木々が覆い茂っている中に、入り口から一本の細い道が延びている。

この地方の気候の影響からか、緑のムツとした空気は無く、爽やかな空気が流れていた。

「スウー……プハー……いやあ、空気が美味しいって、こう言う事をいうんだな」

和也はいい気分で森の中の一本道を歩いている。

「っと、そうだそうだ、一角狼を捕まえなきゃ」

気持ちを引き締め、森の中を歩いて行く。

森の中は、植物の葉の擦れる音、鳥の鳴き声や小動物の動く音で気配が判りにくい。普段自然の中で過ごしていなかった和也には特にそうだ。

と、不意にガサガサと茂みが動いた。

「ウワツ！なんだっ！？一角狼かつ！？」

ビクツと驚いた後、ナイフを太腿に着けてある鞘から引き抜き身構える。と、其処から飛び出たのは

「……なんだ……ネズミか」

和也は大きく息を吐き出す。

茂みから現れたのは、地球にいた頃のドブネズミよりは大きいものの、何の変哲の無い普通のネズミだった。

和也がナイフを太腿の鞘に戻した。ネズミが和也に近付いていく。

「それにしても、このネズミはデカいなあ。ハハツ、まさか魔物じゃないよね」

和也がしげしげとネズミを眺めていると、突然ネズミが和也に襲いかかってきた。

「ドワツ！？危ないっ！っ」と

「チューツ！！」

和也は間一髪でネズミを避けて、再びナイフを抜き、ネズミに向けて構えた。

ネズミが和也の方に向きを変え、再び飛びかかるかと身構える。

……………が

「ガウルルル！！」

突然、和也とネズミが対峙する横の茂みが激しく揺れて、何かが飛び出した！！

「なっ！！…あれは…一角狼！？」

突然現れた一角狼は、その鋭い角でネズミを串刺しにして誇らしげに吠えた。ネズミは絶命したようだ。

「あ、あんなのこんな鎧じゃ意味が無いじゃんっ！！」

和也はパニックに陥り、自慢の逃げ足で一目散に逃げ出した。しかし相手は四足で機動力に長けている魔物、和也を逃がすことなく唸りながら着いてくる。

「ガルルル、グアウ！！グアウ！！」

「ゲッ！なんで増えてるのっ！？ってそうかつ！！基本的に群で行動するんだっ！！」

何か後ろが騒がしくなったなーと和也が逃げながら振り返ると、一角狼は5匹に増えていた。和也は森の中を必死に駆けながらも少しづつ冷静さを取り戻して行く。

「ハアッハアッ…どうする？…どうするっ！？」

和也がもう一度後ろを振り向き考える。

「くっそー！！こんな時に虎バサミがあれば！！」

「ギヤウンッ！？」

と、突然一匹の一角狼が何かに足を挟まれたかのように急停止した。その足には、サメの歯のような禍々しい刃が左右から食い込み一角狼の足を固定していた。

「あれは！？って…そっか！！能力があるんだっ！！！！！！」

此処で完全に和也の思考は、逃げる者から狩人の思考へと切り替わった。

「確か一匹だけ捕獲すれば良いんだよな。なら」

和也は逃げながら罠を設置する。

まず、残りの4匹の内最後尾にいた一匹が、その足を地に着けた瞬間に地面が陥没した。一角狼が穴の底に落ちると、頭上から土が降ってきた。後には何も形跡が残らなかった。

落とし穴の発展した物だが、これはノールの町に来るときに、能力の練習で周囲を穴だらけにした事から反省して、穴があいた後に土が被さる様にアレンジした物だ。

「後3匹っ!!」

次の一匹は首元に何かに触れたと思った瞬間、強引に上に引き揚げられた。その首元には一本のワイヤーが括られていた。じたばたともがいた後、動かなくなった。

普通こういうくくり罠は、獲物の通り道で移動する位置を予測して仕掛ける。しかもかかる位置は、首ではなく足だ。今回は逃げながらの設置だった為、足下が見えなかったので設置できなかった。其処で、頭の位置は見えるので、一角狼の走るリズムを読み、首の位置に設置した。

頭の中でイメージして設置を決めれば、瞬時に罠が設置される故に可能な芸当だ。

「後2匹は…そうだっ!!」

和也はひたすら走りつづける。残り2匹の一角狼も血眼になって追いかけていく。

と、少し開けた場所に出た。

「!?!? 此処ならっ!!」

少しだけ進んだ和也は、走るのを止めて振り返った。一角狼も2匹とも動きを止める。

緊張の意図が張りつめる……………

と、一角狼の方が耐えきれなかったのか、2匹揃って和也に向かって飛びかかった。

「よしっ！！かかった！！！！」

2匹の一角狼が和也の目の前まで来た瞬間、一角狼達に向かって頭上から鉄の檻が降ってきた。

ガシャンッ！！！！

「グア！？グアウルルル…」

一角狼達が檻の中で暴れ回る…と、檻の中、足下から白い煙がプシューッと噴き出た。

それを吸い込んだ一角狼達は、2匹とも眠りに落ちた。

「ふう…これで依頼完了かな」

和也は大きく息を吐き出し、その場に座り込んだ。

「では、これが依頼の一角狼です」

「まあ！！全くの無傷の一角狼を二匹も捕獲してくるなんて！！これなら予定よりも研究が捗るかも！！カズヤさんっ、有り難う御座います！！」

チムリスはキラキラした目で和也に詰め寄る。和也の背中汗でびっしょりだ。

「い、いやっ、偶々ですよ偶々！！偶々運が良かったんです！！それよりも依頼書にサインをお願いします！！」

和也はチムリスに依頼書を押し付け、強引にサインをさせた。

「はいっ、サイン確かに！！それではこれで失礼しますっ！！」

和也はチムリスがサインをした羊皮紙を受け取ると、一目散に駆け

出した。そのスピードは、一角狼から逃げている時以上だった。
「あつ！カズヤさん待って！！って、もう見えなくなっちゃった。
実力者みたいだし、余程忙しいのね。っと、研究研究！！」
チムリスは和也を見送ると、ルンルンと音がしそうな程の歩調で家の中に入っていった。

「ップハツ！！ハーツハーツ！一つの壁を越えた気がする」
行きに20分かかった街道の道を、5分程で4分の2を走破したところで、和也は走るのを止めて歩き出した。

「まあ兎に角これで今回の依頼は終了だ。明日はどうするかなあ」

和也の後ろ姿が、夕陽に照らされながらノールの町に吸い込まれていった。

第7話 貴族の護衛

和也が、豪華な馬車の横を、馬車の速度に併せて並んで歩いている。「ゲイルさん、後どの位でマイルの町に着くんですか？」

和也が、馬車に乗っている40代後半位の、身なりの良い男性に聞く。

「うむ、このまま街道を北に行けば、3時間位で着くはずだ」

身なりの良い男性―ゲイルが、馬車の中から顔を出し、重々しく話す。

「あと3時間…お父様、どうせ何もないのだから、こんな男雇わなくて良かったのに」

ゲイルと同じ馬車の中から、若い女性の声が高飛車に響いてくる。

「…やれやれ」

和也が嘆息した。

第7話 貴族の護衛

和也が、チムリスの依頼を完了してから五日が過ぎた。その五日間の間に、討伐や採取の依頼を中心にクリアしていった。

ダクレルの森での薬草採取。西の草原での魔物退治。南東の村への輸送品の護衛と、順調に依頼をこなし、実戦での実力を上げていた。「さあ、今日は何の依頼があるかなあ」

実戦にも馴れてきた和也は、軽い足取りでギルドに入った。

「おはよう御座いまーす」

和也が呑気に挨拶をして、すっかり和也担当の受付になったノイルが居るカウンターに向かうと、ノイルが和也の姿に気付き、凄い勢いでまくし立てた。

「あつ！カズヤ君丁度良いところに！！カズヤ君にVIPから護衛の指名依頼が入ったんだ！！」

「へっ！？ちよつ、ノイルさん落ち着いて下さい！！護衛の依頼がなんなんですかっ！？」

和也が、驚きながら尋ねる。

「だからカズヤ君に、護衛の指名依頼が入ったんだよ！！依頼者の名前は、此处では喋れないけど、兎に角凄い方からの使命だ！！詳しいことはこの依頼書に書いてあるから、今すぐに向かつて！！」

ノイルが和也に依頼書押し付けて、ギルドから追い立てた。

「だあああつ！！もうっ！ノイルさんどうしたんだよ…取り敢えずそのVIPなお方に会いに行きますか」

和也はイマイチ理解が出来ていないのか、首を傾げながら歩き出した。

ギルドの中で、少しは落ち着いた感のあるノイルが1人ぼつりと呟いた。

「まだギルドで依頼を始めて1ヶ月で、この町の領主に指名されるなんて…」

和也はこの町を中心、丁度広場の前に位置するこの町で一番大きな屋敷の前に居た。

「……あれ、場所間違えたかな……」

和也がこの町の領主の名前を知ったのはつい最近だった。何せ今までの1ヶ月間、自分が生きる事に必死で、町や国の事など二の次だったのだ。

最近知ったこの国の名前は《ダクラマクラ》、この国は他の国とのわだかまりもなく、土地も豊か。治安も良く平和な国だそうだ。

そして、この町の領主の名前はゲイル・フォルスト。依頼書に書いてある依頼者の名前も……ゲイル・フォルスト……

和也はもう一度じっくりと読み返す、裏から読み、逆さまにして読み……

「……間違いないようだ……何で？」

和也はまだ、この町に来て1ヶ月と五日しか滞在していない。何故自分がこの町の領主に指名をされたか解らない。

「うん、いやな予感しかない……って、言ってもしょうがない……行くか」

和也は屋敷の門番に声をかけた。

「ふむ、君がカズヤ・ホシナ君か。私がゲイル・フォルストだ。今回の護衛、よろしく頼むよ」

和也は屋敷の応接室に案内されて、沈みすぎるソファに座って待つこと五分、ゲイルと対面した。ゲイルは和也の勝手なイメージの貴族とは違い、威厳はあるが人を身分で見下すような人物では無かった。屋敷の中の調度品や家具なども、品はあっても、決して値段が高そうな物ではない。私腹を肥やす人間でもないようだ。

「はい、此方こそよろしくお願いします。しかし何故、私を指名したのですか？」

「うむ、調べさせて貰ったが、まだカズヤ君はこの町に来て1ヶ月……まあ当然の疑問か。ではまずは其処から説明させて貰おう」

ゲイルは真顔で頷くと、話を続けた。

「普段護衛を雇う場合は、ギルドの実績上位者に依頼をするのだ。しかし今回は勝手が違う。実は今回は我が娘ステラが同行するのだ。和也もギルドに所属する身、彼等の素行の悪さは知っているだろう？ステラは彼等の素行の悪さが気に入らないのだ。其処でカズヤ君、君なら素行に問題ないと、ギルドの人間と町の市民に太鼓判を押されてな、依頼も全て完遂していて実力も申し分なしと判断し、今回の護衛に指名したのだ」

「はあ、有り難う御座います」

和也の思っていた以上の高評価に、普段なら喜んだものの、今回は素直に喜べなかった。高評価なのは良いのだが、それが原因で女性と関わる事になってしまったのだ。

ゲイルはそんな和也に気付かず話を進めた。

「それで、今回は北の都市ユーノスまで護衛をして貰う」

「ユーノス、ですか」

「ああ、其処でユーノスの領主主催のパーティーがあるのだ。そのパーティーにステラも主席する」

（ふむ、ユーノスカ……ノールから北に街道を進むとある大きな町だよな。パーティーなんてどうでも良いけど、確か魔法ギルドがあったな。なら、ユーノスなら魔法が覚えられるかも！？それならこのまま活動拠点をユーノスに移すか）

「わかりました。今回の依頼、請けさせて戴きますそれでは何時出発で？」

「おお、やってくれるか。出発は明朝だ、ではよろしく頼むぞ」

「はい。この依頼、誠心誠意やらせて戴きます」

ゲイルとの話を終え、和也は移動に必要な物を買いに屋敷を出た。

そして冒頭の展開に戻るのである。

ステラは、簡単に言う和金髪縦ロールだ。気品があり、とても綺麗な女性だが、ゲイルの言葉通りギルドの人間が嫌いみたいで、とても高圧的な態度だった。

逆に和也はこの嫌われている状況に、必要以上に接しなくて良いと判断し、ホツとしていた。護衛に専念出来ると気持ちを引き締め、周囲の警戒に当たった。

馬車の中ではフォルスト親子が会話を続けていた。

「ステラ、まだギルドの人間嫌いは直らないのか。もうお前も18歳だ、将来は町を治める領主の身、いい加減にするのだ」

「それは判っていますお父様、しかし野蛮なものは野蛮、好きになれせんわ」

ゲイルが窺めるも、ステラはプンスカと答える。

「お前は彼とキチンと接していないからそう言えるんだ、人を自分のイメージだけで判断するなんて、まだまだ未熟な証拠。今のステラよりも、彼の方がよっぽど領主に相応しい」

「なっ！？お父様っ、そんな事ありません！！それはあんまりですわっ！！」

馬車の中は、重苦しい雰囲気包まれた。

「あの、ゲイルさん、ステラお嬢様と何かあったのですか？」
あれから30分位して、休憩のために街道の脇に馬車を止めてくつ

ろいでいる。ステラは1人不機嫌なまま周囲の散策に出掛けた。和也は着いて行こうか迷ったが、ゲイルの1人にしてやれという言葉に、ゲイルと共に馬車の近辺で待機していた。

「いや、娘と少々喧嘩をしましてな。誠に恥ずかしい」

ゲイルが申し訳なさそうに言う。和也が慌てて手を振りながら答える。

「そんな、私の事は気にしないで下さい！早くお嬢さんと仲直り出来るの良いですね」

和也が心配そうに話す。

「うむ、そうだな」

ゲイルは頷いた。此処までの道中でゲイルと話して、和也はステラには興味も無いが、ゲイルはともよくできた人間だと好感を持ち、ゲイルさんの為に自分が出来る全力を尽くそうと思い直していた。ゲイルはゲイルで、和也の事をとても気に入ったようだ。

「そういうえ、ステラお嬢様が散策に出掛けて、もうずいぶん経ちますね。探しに行きましょうか？」

「ふむ、そういうえもう30分近く経っているな。…カズヤ君、すまないがお願いできるかな？」

「はい、おやすいご用です…それでは捜してきますね」

ステラを捜しに行こうと和也が腰を上げたとき、女性の絹を裂くような悲鳴が鳴り響いた。

「まっ、まさか!？」

「ステラッ!!」

…まだまだ護衛の旅は終わらないようだ。

第8話 和也の本気

「ステラさん!!」

和也が悲鳴のあった場所にたどり着くと、其処にはステラの姿と、20程の男達が、ステラを囲むように立っていた。

「は、早く何とかしなさい!!その為の護衛でしょ!?!」

ステラが和也に向かって怒鳴る。

「うるせえ!!おいっ、そこを動くなよ、動いたらこの娘がどうなるか解るな」

「ひっ…」

1人の男が、ステラの首にショートソードを当てながら和也に警告する。

「…クッ…わかった」

和也がその場で動きを止めた。

第8話 和也の本気

「よし、まずは武器を捨てて貰おうか」

「ああ……」

先程話しかけた男が和也に言う。和也は武器を男達に向かって放り投げた。

「よし……おいつ、そいつらを縛れ！！とりあえず2人ともアジトに連れて行くぞ！！」

男達は、和也とステラを縄で縛る。和也は男達に問いかけた。

「おい、お前達は何者だ」

「ハッ、俺達はこの辺りを牛耳る盗賊団《森の牙》だ」

「も、森の牙……」

ステラが驚く。和也は訳が分からないようで、ステラに小声で尋ねる。

（ステラさん、森の牙って一体……）

（あなたギルドの人間の癖に知らないの……！！）

2人は森の牙の者達に気付かれないように小声で話す。

ステラの説明では、盗賊団森の牙は此処最近、ユーノス近郊で盗みや強盗、要人の誘拐、果ては人身売買と活発に活動している盗賊団だとの事だ。ノール近郊では活動していないため、ノールから討伐隊などの派遣はしていない。その為、ノールでは話題になつていなかったのだが、流石に領主の元には情報が入っていたようだ。ユーノスでは、守備隊を森の牙壊滅に派遣するも返り討ちにされ、ギルドから高額報酬の依頼として出し、実力者に森の牙壊滅を期待する

も全て失敗に終わり、最早手に負えない状況になっているという。

（兎に角早く何とかしなさい。それとお父様は無事なのですか！？）

（ゲイルさんには先にユーノスに向かって貰った。恐らくもう到着しているはずだ。ユーノスで救出隊を組織して此処に戻ってくる手筈になっている）

（あなた、その口調！！）

（ああ、済まないけど緊急事態だから、言葉遣いに気を回してられないんだ、勘弁してね）

ステラは今の状況を思い出し、確かに言葉遣いなど気にしている場合ではないと理解する。

（わかったわ、兎に角この状況を何とかしないとイケないわね）

（ああ、悪いね。それにしてもゲイルさんの身を案ずるなんて意外だね）

（そんな事当たり前ですわ！！私のお父様だし、それに何より今のノールを繁栄させ、支えているのはお父様なのです。今お父様を失っては、ノールは廃れてしまいます。私の命などよりも余程大事だわ）

その言葉に、和也はステラの評価を改めた。そして、只の箱入り娘ではない思考、ゲイルの娘だとはつきりと解る、町や町の市民を大事にしている考え方に、女性相手に持つはずのない好感を覚える。

（ゲイルさん、貴方の教育が良かったのでしよう。ステラさんは立派に育っていますよ）

和也がぽつりと呟いた。

（なに？何か言った？）

（いいえ、何も…大丈夫、ステラさんは必ず無事にゲイルさんの元へ届けます）

さつきまでは見せなかった和也の引き締まった表情にステラの鼓動が踊る。

（え、ええ……頼りにしていますわ）

（??? はい、任せて下さい）

和也は、ステラの自分を見る目が変わったのを疑問に思いながらも、素直に返事をした。

森の牙のアジトは、ユーノスに向かう北の街道の途中で道を外れた森の中にあった。

「さて、コイツ等をどうしようか」

アジトの中の小部屋の中で、頭と思わしき男が呟く。先程ステラを人質にしていた男だ。

「私を早く解放するのです！！私はノールの領主ゲイル・フォルストの一人娘、ステラ・フォルストです！！」

「あ、バカ……」

和也が額に手を当てる。この状況で身分を曝すなんて愚の骨頂だ。案の定、盗賊達が下品な笑みを浮かべる。

「ほう、これはこれは……良い身代金が採れそうだ」

「なっ、父は身の代金など出す訳がないわ！！」

「なら、売り飛ばすまでだ。貴族の娘なら、高く売れるだろう」

盗賊の話聞き、ステラは顔を青ざめる。これから自分がどうなるのか想像したのか、身体がブルブルと震えている。

（……ステラさん可哀想に、しかしまだ動いちゃだめだ……それにしてもコイツ等……）

和也は心の中で呟く。そして自覚する。

確かに和也は女性が嫌いだ、しかしそれ以上に許せないものが、自分の中にあるらしい事に気付いた。

……何かが和也の中で変わろうとしていた。

「カシラあ、この娘味見しちまいあしようよ」

部下の1人が頭にニヤニヤと話し掛ける。それを聞いた頭の男もニヤニヤとした顔に変わる。

「フツ、そうだな。隣の部屋に連れていけ」

「ヘイツー！グフフフ、さあ、こっちへ来るんだ」

「イ、イヤ！？離しなさいっ！！」

ステラの抵抗虚しく、部下の男はステラの腕を掴み隣の部屋に運び込もうとする。しかしステラは尚も抵抗した。

「や、やめて！」

「うるせえ！！」

「キャア！？」

パンッ

「あ…あぁ…」

いい加減しびれを切らした盗賊の1人が、ステラの頬を力一杯叩いた。ステラの頬が見る見るうちに真っ赤に晴れ上がる…それを見た瞬間、和也の心臓がドクンとざわめいた。

「そっか…そうだったんだ…」

和也がぼつりと呟く。森の牙のアジトが異様な雰囲気包まれる。

「カ、カズヤ…」

ステラが心配そうな顔をする。

「おい、お前なんか言ったか？」

盗賊の1人が和也に聞く。しかし和也には盗賊の声が聞こえていないようだ。和也の独白が続く。

「確かに俺は女性恐怖症だ。しかし、女性恐怖症でも女性を守るべきものなんだ…今ならまだ許してやる、投降しろ。もし投降しないなら…今の俺は手加減が出来ないぞ」

「なんだコイツ、頭がおかしくなったか？おい、コイツはほつてて女を連れていけっ」

「いやっ！！止めて！！カズヤあ！！」

盗賊が再びステラを捕まえようとする…しかし

「おい、その手を離せ…」

ブツリ

「ギャッ！！て、ててて手がっ！？俺の手があ！！！！」

和也は既にステラをトラップの起動スイッチに変えていた。男がステラにふれた瞬間、男の手首にギロチンが降ってきた。男の手はギロチンの刃によって綺麗に切断されていた。

「な、何だ！？何が起こったんだ！！」

「だから言っただろ、今の俺は手加減が出来ない…いや、しないの間違いかな。今のは警告だ、次からはもつと無残な結果になる」

その言葉に盗賊達が全員和也を注視した。和也が盗賊達に鋭い眼差しを向けている。まるで別人かと思うほどの変わりようだった。部屋

の空気が凍り付く。

しかし盗賊達は自らを奮い立たせ、一斉に和也に襲い掛かった…が。

「ウギヤア！！」

「あ、足が…俺の足が！？」

「これは奴の魔法なのか！？」

「だ、ダメだ。さっぱり解らねえ…奴は何を仕掛けてきているんだ！？」

最初に間合いに入り、和也を取り囲んで殺そうと動いた4人の盗賊が和也の周りに殺到したとき、彼らの足下で「カチリ」と音がした。そしてカズヤに切りかかるうと足を上げた瞬間、4人の足元から小規模な爆発が起こった。和也が自分の周りに設置していたのだ。

ある者は全身が吹き飛び、またある者は両足が無くなる。半身を巻き込まれた者も居たようだ。

盗賊達は、和也に近付くのは危険と判断し、和也と距離を保ったまま囲む。

しかし、「本気で殺す気」になった和也には、この程度の間合いなど最早ゼロに等しい。

和也は右にいる盗賊達に手をかざす。その瞬間、盗賊達の足元から「カチリ」と音がした。

その瞬間男達の足元から鋭い槍が飛び出し、男達を股間から脳天まで串刺しにした。

「次！！」

今度は左側に手を向ける。盗賊達が怯んで後ろに一步下がると何かに足が引つ掛かった。

すると何処からか矢が盗賊達に向かって飛んできた。矢に直撃してしまった男もいたが、ほとんどの盗賊達は掠っただけだった。

しかし、末路は皆同じだった。盗賊達が掠っただけで直撃していないことにホッとした時、突然皆が苦しみだし、のどを押さえ、泡を吹きながら絶命した。

矢には掠っただけで確実に死に至る猛毒が仕込まれていた。

「後ろ！！」

次は後ろに振り返り手をかざす。すると盗賊達の足元に大きな穴があいた。皆一つの大きな穴に落ちて、痛みで苦しんでいる。と、突然天井が穴に向かって降りてきた。

後に残ったのは一本の巨大な柱。中にいた者は皆押しつぶされただろう。

「最後だ！！」

和也が前に向かって手を振りかざす。すると虚空から、幾つものワイヤーが盗賊達に襲いかかる。流石は頭なのか、ワイヤーを全て避けきっていた。

残りの盗賊達は、ワイヤーに捕まり、そのまま引き絞られて全員細切れにされていた。

「よ、よくも仲間を！！」

森の牙の頭がカズヤに向かって切りかかる。

…しかし

「カチリ」

「な、なにい！？」

頭が足元の地雷を踏むと、足元からワイヤーが生え、頭をそのワイヤーで拘束した。

「クツ、クソツ！離せ！！離しやがれ！！」

「これが最後だ、降参しないか？」

和也が質問すると、頭は完全に興奮していて説得に応じなかった。

「そうか、じゃあな」

和也が手をかざすと、男の真後ろに、丁度男が入るサイズの鉄の棺桶が出現した。

中は外から内に、入った人間を傷つけるための棘が無数に生えている…アイアンメイデンだ。

徐々に棺桶の蓋が閉じてゆく。

「ま、まてっ！？お願いだ、此処からだして、ギヤアアア！！！！」
棺の蓋が完全に閉じた。頭の叫び声が、小さくなりながらも響いていたが、やがて聞こえなくなり、辺りに静寂が訪れた。

残った者は和也とステラのみ。ほかの者は皆、無惨な姿で横たわっていた。

「カズヤ…」

ステラの呟きが、妙に響いた。

第9話 ユーノスに着いた！！

「ステラさん、外に出ましょう。近くにゲイルさんが来ている筈です」

静寂の中、息を大きく吐いてから、和也がステラにきりだす。表情は、既にいつもの穏やかな顔に戻っていた。

「え、ええ。行きましょう」

ステラが先程の一方的な戦闘。そして和也の変わりように、戸惑いながら返事をした。

（うーん、やりすぎたかなあ…でも、全く罪悪感が沸かないなんて俺って何処かおかしいのかな）

ステラの戸惑いように、和也が眉根を寄せて、心中で呟く。

しかし、実は和也は地球に居た頃から、人を殺すことに対する覚悟が出来ていた。少し前の話に戻るが、和也は女性恐怖症なのに女性を護ろうとする。これは厳密に言うと、女性だけではなく、和也が思う弱者を護るという事なのだ。そして自分自身への害や、和也の視点で悪とを感じるものには敵対行動をとる。程度によって対処の仕方は異なるが、程度によるので殺害も辞さないという考えだった。おかしいと思うかもしれないが、これが「保科 和也」という人物なのだ。

（まあ、最初から嫌われてるし、もう会うことも無いからいいか）

和也は素早く結論し、歩き出した。ステラもその後が続いた。

和也は前を歩いていて見えないが、ステラの和也を見る目が熱を帯びていた。

第9話 ユーノスに着いた！！

「カズヤ君！！ステラ！！無事だったか！？」

アジトの外に出て、ユーノスへ続く街道に出ようと歩いていると、ゲイルと、救助隊と思われる人達と合流できた。ゲイルが慌ただしく話し掛ける。

「ええ、2人とも無事です。…ゲイルさん、申し訳御座いません。ステラお嬢様が襲われる事になるなんて…これは僕のミスです。今回の報酬は無しと言う事で許して貰いたいのですが」

「何を言う！！カズヤ君はミスなんて一つもしていないじゃないか！！それに2人とも無事に戻ってきた。何も問題は無い」

「ええ、カズヤさんにはミスなんてありませんわ。それを言うなら、今回は1人で離れた私のミスですわ！！カズヤさんは私をしっかりと護って下さいました。それにたった1人である「森の牙」を壊滅

しましたし、名声が上がる事はあっても、ミスなんて何処にも御座いませんでしたわ!!」

ゲイルが話し、何故かステラも、赤い顔をしながら必死にフォローする。

ゲイルはそんなステラにおや?と思ったが、その前にステラの一言が気にかかる。気にかかった一言を理解し、驚愕した。

「ちょ、ちよつと待て二人とも。ステラを浚ったのは、あの「森の牙」だったのか?」

ゲイルが質問し、ステラと和也は同時にコクンと頷いた。

「あ、はい。盗賊達がそう名乗ってました」

和也が答えた。その瞬間、ゲイルと救助隊の人達が騒ぎ出し、周囲が喧騒に包まれた。

「ほ、本当に壊滅したのか!?」

「ええ、私が目の前で見てましたもの。間違いないですわ」

今度はステラが質問に答えた。

「ば、馬鹿な!?!」

「確か50人近くいるはずだぞ!!それをたった1人で...」

「お、おい。兎に角ユーノスに早馬を出せ!!それとアジトに行つて確認するぞ!!」

救助隊が慌ただしく動き出す。

「済まないが、私達は先にユーノスへ帰らせて貰うぞ。後でアジトの様子を聞かせてくれ。ステラ、カズヤ君、行こうか」

ゲイルが救助隊と話し、ステラと和也の方に振り向いた。

「はい、お父様」

ステラが答え、和也が頷く。そして今回は和也も馬車に乗り、ユーノスに向かった。

「それでは、この依頼書にサインをお願いします」

和也は、馬車に入るなりゲイルに言う。

「うむ…よし、これで良いかな？」

ゲイルは依頼書にサインをし、和也に渡した。

「はい、確かに。それではユーノスに着いたらお別れですね。また機会があつたら依頼して下さい。次回は確実に成功させますから」
和也は今回の礼を2人に言った。

「まだそんな事言っているのか」

「カズヤさん…」

ゲイルは呆れた顔をし、ステラは心配そうな表情を浮かべている。
ステラの表情を見て、ゲイルがニヤニヤした。

「ふむ、ならば我がフォルストの専属にならないか？」

「いえ、私は世界中を旅してみたいので。申し訳ないのですが…」

「ふむ、やはりな」

「済みません」

「そんなあ…」

ゲイルは結果が分かっていったのか特に変化は無かったが、ステラは心底がっかりした表情になる。

「ならば、今回の責任をとって貰うかの。それで満足するのだろうか？」

「はい、私に出来る事ならば誠心誠意させていただきます」

またゲイルはニヤニヤと言う。和也が真顔で答える。

「よし、それならまずはその敬語を止めて貰おうかの」

「え？はい、いや、しかし其れでは不敬罪に当たります。それにほかの者への示しもつきません」

「いいのだ。ワシはカズヤが気に入ったのだよ。それに森の牙を、たつた1人で壊滅させた英雄だ。不敬罪になんかならんよ」

「はあ、そうですか。ならばいきなりは無理なので善処させていただきます。しかし一つだけ、僕は英雄なんかではありません。そう呼ぶのは止めて下さい」

和也は人を殺して英雄とは言われたくなかった。たとえ人を殺す覚悟があっても。

「うむ。それで良い。後もう一つ…」

ゲイルはステラを横目で見ながら言った。

「ステラの婿になれ」

「お、お父様！！」

ステラが驚いて言う。驚いている割には、その表情は嬉しそうだ。

「お断りします」

しかし和也は即答する。

「何故じゃ？位置もあるし、性格も良い…それに何よりまだまだ美しくなるぞ？」

「ええ、それは否定しないです」

「そ、そんな事ないですわ」

和也の言葉を聞き、ステラは真つ赤な顔を両手で押さえ横に振る。それを不思議に思いつながらも和也は話を続ける。

「しかし、先程も言ったように今はまだ旅をしたいし…僕は女性恐怖症なんです」

和也がその言葉を放った瞬間、馬車内の空気が凍り付いた。

「女性恐怖症？」

ゲイルが気を取り直して聞く。ステラは固まったままだ。

「はい、それに女性不信も在るかもしれせん。兎に角、女性と関わり合いになりたくないのです」

「そ、それは難儀な」

ゲイルが横目で気の毒そうにステラを見ながら言う。

「それに、ステラさんは本当に素敵な方です。僕なんかにはもったいない、もつとふさわしい方がいるでしょう」

しかし…和也の言葉がスイッチだったようで、ステラが爆発した。

「そ、そんなの関係在りません！！カズヤは私と結婚するのです！！」

「ええ！？ちよつとステラさん！！」

ゲイルはぼかんと口を大きくあけたままだ。

「カズヤ、私の事はステラと及び下さい。将来に向けての練習です！！」

「いや、だから将来なんて何もありませんって！！」

「あります！！無くて今出来たんです！！もう決して変えることの出来ない事実にしたんです！！」

「それってステラさんだけの妄想ですよ！！」

「問答無用！！えい！！」

「うおお！！ステラさん！！馬車の中で暴れないで！！」

「カズヤ！！何で避けるのですか！？」

ステラが突然和也に抱きつこうと、カズヤに向かって跳んだ。ステラに抱きつかれれば、どんな男でも骨抜きにされてしまうだろう。しかし…和也は神懸かり的な反射神経でよけた。

「カズヤ！！だから避けないで下さい！！」

「嫌です！！避けます！！」

まだ2人の攻防は続く。しかし和也に限界が来たようだ。

「カズヤ！！」

「うおお！！…くそつ、こうなったら！！」

和也は狭い馬車の中で避け続けるのに限界を感じ、突然馬車から飛び降りた。

「それではゲイルさん、ステラさん。先に失礼します！！」

そして挨拶をすませた瞬間、ユーノスへ向けて猛ダッシュした。…

まあ、ようするに自慢の逃げ足を使って逃げたのだ。

「カ、カズヤ！！って、もうあんなに遠くに…」

ステラが慌てて馬車から顔を出し、和也を呼び止めようとするが、ステラが馬車から顔を出したときには、和也の姿は既に地平線の彼方にあつた。砂埃が凄まじい。

「カズヤ…決して逃がしませんわよ！！」

ステラが決心した顔で呟く。ゲイルが横で冷や汗を垂らしていた。
「こ、これは失敗したかの？」

「…プハア！…ここがユーノス…や、やっと着いた…ハア…」
和也は馬よりも早く駆け抜け、ユーノスに着いた。あのまま馬車に乗っていたら、後二時間は掛かっていただろう。この世界に来て、依頼で身体を鍛え続けていた所為で、それ程までに和也の逃げ足は速くなっていた。

「さて、先ずは宿を取って、ギルドでも探すかな」
さすがに疲れたのか、和也はヨロヨロとユーノスの中に消えていった。

……… 新たな町での生活が始まる………

第9話 ユーノスに着いた！！（後書き）

えーと、少し短いですが、第9話です。

明日、明後日と仕事が休みになったので、更新が何時もより早く出来るかもしれません。

楽しみに…していてくれる神様のようなお方は、頑張りますので…あ、期待しないで待っていて下さいね。

あと、お気に入りが二桁行きました！！これもひとえに皆様のおかげです！！有り難う御座います！！

Trapperを読んでくれる皆様に感謝！！

第10話 ユーノスの冒険者ギルド

「へえ、此処がユーノスカ」

和也はユーノスの街で早速宿を取り、冒険者ギルドに向かいユーノスの街並みを歩いている。

ユーノスはノールの町より遥かに大きい町だ。街の規模は約4倍、全部で五つの区画に分かれており、貴族が住む貴族区、一般住民が住む住民区、魔法ギルドや魔法学校等がある魔法区、各種商店や冒険者ギルド、宿屋等がある商業区、貧民や後ろ暗い者が住むスラム地区だ。建物は石造りで大小様々、どこかヨーロッパを思わせた。流石に大きい街なだけ有り、人々の表情も様々で、裏通りやスラム地区等は、怪しい雰囲気醸し出している。

通りすがりの人に道を聞いたら、宿屋と冒険者ギルドは、同じ商業区にあるらしい。

しばらく色々なものに目を奪われながら歩いていると、程なく冒険者ギルドに着いた。

ユーノスの冒険者ギルドは、ノールとは作りが違う様だ。カウンタ―とテーブルがあるのは変わらないが、酒等も提供しているようで酔っ払いが管を巻いている姿がちらほらとあった。規模がでかいだけあり、その分荒くれ者や、酔っ払いとの相手も頻繁にするためか、椅子やテーブル等もとても頑丈そうだ。

和也は周りに目を向けながらカウンターに近付く。此処でも和也は、男性の職員に声をかけた。

「あの、ノールから今日この街に来たのですが、此処で依頼を受けるのに、何か登録とかの手続きは必要なのですか？」

「ん？周りには美人の受付がわんさか居るのに、俺に声掛けるなんて珍しいな」

（いや、だからですよ）

男は年の頃40代位の、とても大きな体躯をしていた。荒々しい顔つきで、もつさりと生えた顎の髭が印象的だ。和也は心の中で返答しながら男の言葉を待つ。

「おっと、悪いな。俺はユーノスのギルドの支部長だ、よろしくな。ノールではギルドに登録してたんだろ？なら移動した先のギルドに報告さえすれば、ギルドのネットワークで情報が届くから大丈夫だ。どの街に行っても変わらないから覚えておけよ？」

ガルフは見た目とは裏腹に、とても親切に説明してくれた。面倒見

が良いのだろう、ギルドの支店長というのも頷ける。

「それじゃあ、暫くこの町に滞在するので、そのように手続きをお願いします」

「おう！！わかった。ああ、あとほかの街で請けた依頼でも、依頼書を持って行けばどの街でも処理できるからな。今依頼書があるなら処理するが？」

「あ、そうなんですか。それじゃあこの依頼書を、失敗として処理して貰えませんか？」

和也が一枚の依頼書を渡す。先のゲイルの依頼の件だ。

「おう、これだな。ふむ、お前さんは「カズヤ・ホシナ」だな。どれどれ…」

ガルフが和也の名前を確認し、依頼書に目を通す。

ガルフが読み終わるのを待っているとき、一つのテーブルで、酔っ払いの喧嘩が始まる。

それをみた和也は…

「お前ふざけんフギヤ！！…な、何だあ？」

酔っ払いの頭にタライを落とした。酔っ払いは頭を押さえながらキョロキョロしている。

「ん、確かに。って、どうかしたか？」

ガルフが依頼書を読み終わり、和也に声をかける。

「いえ、何でもありませんよ」

和也がさらにと答えた。

「しかしこの依頼、成功としてサインを貰っているが？」

「それでは僕が納得できないんですよ」

「そうか、そんな事気にしない輩が多いというのに、報酬も要らないなんて……よし！気に入った！！」

「え？」

和也の話を聞き、ガルフが満面の笑顔で言う。

「今回の依頼、成功として処理しておこう」

「いや、だからそれは」

「カズヤが納得しないんだろ？だから依頼は成功したものとするが、報酬は依頼者に返す。これで良いだろ？」

「うん」

「カズヤ、こういう指名依頼の場合な、成功と失敗では大きく評価が変わるんだ。今回みたいなVIPの依頼者の場合は特にな……依頼者からは成功とサインを貰っているんだ。これが一番良いと思うぞ」

ガルフが諭すように言う。

「そうですか、それならガルフさんの提案通りをお願いします」

「おう、任せろ！！」

ガルフがガハハと笑いながら答えた。

「あ、あと、魔法の使い方を基礎から覚えたいのですが」

「ほう、魔法か。カズヤはまだ魔法を使えなかったのか。それでVIPから指名依頼があるなんて珍しいな？つと、スマンスマン、魔法を使えるようになりたいんだっただな。まあ説明すると、方法は幾つかに別れるな」

ガルフが元気に説明する。

「まあまずは、この町にある魔法ギルドや魔法学校に所属する事だな。これなら確実に魔法を覚えられるが、学校なら授業、ギルドなら魔法の研究で時間を使う。もう一つはこの冒険者ギルドで、魔法を使える奴とパーティーでも組んで、依頼をしながら教えて貰うか、町で誰かに師事するか。これでも魔法は覚えられるが、性格等に当たり外れもあるし、人によって使う魔法が違うから、教えて貰う方も偏った魔法しか覚えられない可能性がある。あとは、本屋で魔法書を買って独学で覚えるかだな。とまあ、大体こんなところだ」

「成る程……」

和也がガルフの話を聞き考える。

「まあ取り敢えず、雑用依頼でもしながら考えてみます」

しかし、直ぐには結論が出なかったようだ。

（うーん、魔法ギルドや学校で教えて貰うのが一番良いんだろうけど、いつこの町を離れるか解らないしなあ。基礎だけ教えて貰ってあとは本でも買って覚えていくのがベストかなあ？）

「そうか、まあ急いでもしょうがないしな。しかしVIPから指名が来るのに雑用依頼か？…まあ、どの依頼を請けるかは自由か。ノールでも雑用依頼はいっぱいあっただろ。ここユーノスでも腐るほどあるから頑張ってくれ！！」

「はい」

ゲイルが意外そうな顔をしながらも、和也にエールを贈る。和也も素直に頷いた。

と、早速何か依頼を請けようと、ゲイルと依頼の相談をしていると、一つのテーブルで騒ぎが起きた。

「や、やめてください！！」

「へっへっへ、良いじゃねえか。相手してくれよ」

どうやら酔っ払った数人の男が、1人の女性に絡んでいるようだ。女性はギルドの職員の様で、スタイルが良いとても綺麗な女性だった。

「ちっ、またあいつ等か。あいつ等はこのギルドで上位のパーティーなんだがな、あの通り女癖が悪いんだ。無理矢理止めようにも、上位者だけあって実力もある。周りへの被害を考えると…どうしたもんか」

「ふむ」

ガルフが困った顔で話す、和也は何か考え事をしている。

と、段々エスカレートしているようだ。女性に手が伸びている。

「や、止めて！！」

「おう、良い乳してんじゃギヤアア！！」

男の手が女性の胸に触れそうになった瞬間、鈍い音が響き、突然男達が床に沈み込んだ。

「え？一体なにが？？」

女性は1人キョトンと立ち尽くしている。

「お、おいカズヤ。今の見たか！？あいつ等の頭にタライが…」

「え？そうですか？何もありませんよ？見間違いないですか？」
「うーん」

ガルフが驚いた顔で和也に尋ねるが、和也はしらを切る。納得が行かないのか、ガルフが首を傾げる。

「まあ、それよりも、この依頼を請けたいのですが」

「ん？あ、ああこれか。わかった」

「はい、それではまた」

和也はガルフに挨拶をして、ギルドを立ち去った。

（バレなくて良かった）

和也が空に目を向け、ホッと息を吐いた。空は夕焼けに染まっていた。

その日、ギルドで無理やり女性に手を出すと、手を出した者に天罰が下る（タライが振って来る）という七不思議が出来た…

第10話 ユーノスの冒険者ギルド（後書き）

いつも読んでいただき有り難う御座います。 ころです。

今回はギルドと街の簡単な紹介と言う事で、短いですが掲載させていただきます。

感想やらお気に入り登録やら、皆様にして頂いてうれしい限りです
！！

決定では無いですが、次話は今日の夜、日を跨ぐか跨がないかの更新になると思います。

それでは、T r a p p e rを読んでくれている皆様に感謝！！

第11話 魔法使いのお手伝い

「さて、今回の依頼は魔法区での雑用依頼だったな」

冒険者ギルドに行った翌日、和也は宿屋で朝食を食べ、朝から魔法区に向かって歩いている。

魔法区は、商業区から北東の位置にあるらしい。

昨日、他にも雑用依頼はあったのだが、魔法に触れてみたいという欲求に負けて、和也は今回の依頼を請けた。

「しかし魔法かあ…俺に使えるのかな？」

実際の魔法がどんな物なのか、和也は思いを馳せた。

朝日が街を照らしている。露店も店を開き始め、街が活動が始めた…

第11話 魔法使いのお手伝い

「へえ、此処が魔法区か」

魔法区は、ユーノスの街でも他の区画とは異質な地区だった。

皆が皆ローブを纏っており、建物からは青や赤、紫や黄色等様々な色の煙が昇っている。

「うわぁ…なんか凄いとこに来たなぁ…」

和也は頬がひきつったまま魔法区の大通りを歩いて行く。

「何あの煙の色、まさか毒じゃないよね…」と、うわー！こんな所に魔物！？」

きよろきよろと見物しながら歩いていると、突然頭が二つある犬がしっぽを振りながら飛び出してきた。和也が構える。が、よく見ると、首には輪っかがしてあり、リードがついている。リードの先を追ってみると、ローブを着た女性が持っていた。どうやら散歩中の様だ。

「ペット…なのか…？」

まさか魔物をペットにしている人が居るとは思わなかった和也は、先程とは打って変わって、若干警戒気味に歩き出す。

「えーと、確か依頼人はこの魔界（魔法区）の魔法学校にいるんだよな。名前はソイルさんだっけ」

魔法学校は、この地区にしかないがざっと50はある。探すだけでも大変だった。

「…何処にあるんだ？」

和也の道のりは遠い…

「よ、よし…ここか。」

和也はやつとの事でソイルがいる魔法学校に辿り着いた。

そこは、他の魔法学校よりも随分と規模が小さい。学校というよりは、個人でやっている塾の様なものに見える。

和也は入り口と思われる扉の前に立ち、ノックした。

「すいません。依頼の件で来たのですが…」

ノックをしてから五分、何も反応はない。和也は再度ノックをする。

「すいません。誰か居ませんか？」

今度は10分待つてみた。やはり返事はない。和也はムキになり力一杯ドンドンとノックをする。

「すいませーん！誰かー！！」

すると、いきなり目の前の家から爆発音がして、黒い煙がもうもうと立ち上る。

「え？…俺の所為じゃないよね…？」

和也が冷や汗を垂らしながら、自分の手を見つめる。

と、扉がガチャリと開く。中から真つ黒な影が飛び出した。

「ゲホッ…」

と、よく見るとそれは煤を纏った男のようだった。和也が心を決めて話し掛ける。

「あ、あのー、すみません」

「ゲホッ…ん？どうしたのかな？」

男が和也に気づいた。

「あ、はい。僕はカズヤという者ですが。冒険者ギルドで依頼を請けてここに来ました。ソイルさんは居ますか？」

和也はソイルの居場所を尋ねる…が

「ああ、依頼を請けた方ね。ソイルは僕だよ。ようこそソイル魔法学校へ」

彼がソイルだった。

「さあ、散らかってるけど、中へ入って」

「あ、はい。お邪魔します」

ソイルと共に、中へ入る。確か学校の筈なのだが、中は研究室の様な有り様だった。

（え〜と、まさか雑用依頼って、ここの掃除とか…？）

和也は心の中で呟きながらソイルに続く。

「とりあえず、そこに座って。今お茶でも出すから」

「あ、すいません。お構いなく」

2人は家の中の一室…どうやら応接室で、向かい合わせにテーブルに座った。ソイルはカズヤと同年代で長い灰色の髪の毛、眼鏡をかけた、優しそうだか少し気の弱そうな顔付きが特徴的だ。

お茶といって出された、ピーカーの中の紫色の液体が恐怖を誘う。

「さて、今回の依頼だけど…明日から3日間、僕の助手をして貰いたいんだ」

ソイルがお茶？を飲みながら切り出す。

「助手…ですか？」

和也が、お茶？を飲むソイルを見て、若干引きながら聞く。

「そう、本来はこういう依頼は魔法ギルドに出すんだけどね、今回は外での活動もあるから、魔法ギルドのメンバーじゃ戦闘になった場合に不安が残るから、冒険者ギルドに出したんだ」

「戦闘もあり得るのですか？」

「うん」

どうやらソイルの話では、今回の依頼、研究や授業の助手をするらしい。しかし戦闘も在るかもしれないなんて、これは本当に雑用なのだろうか？

（もしくはノールとユーノスでは、依頼のカテゴリズに違いがあるのか…兎に角、ユーノスの依頼はひと味違うようだね）

和也は気を引き締めて、依頼の話を進めた。

「取り敢えず依頼は明日から初めてほしい。初日は授業の助手、二日目は実験のてつだいで、三日目は課外授業をする予定だ。場所は

朝、此処に着てくれればいいから」

「はい、判りました」

和也がコクリと頷く。

「それと、報酬の事なんだけど…実は余りお金が無くてね」

ソイルの話では、魔法学校（この町では、塾も学校と呼ぶらしい。

此処は最初のイメージ通り、どうやら塾のようだ）を営んでいるが、大手の魔法学校に生徒が流れてしまっているため、授業料での収入が少ないという事だ。

（ふむ、別に今の所はお金に困っているわけじゃないけど…）

和也は少し考え、ソイルに質問する。

「ソイルさんつかぬ事を聞きますが…この学校には、生徒が少ないと聞きましたけど、ソイルさんの魔法の実力はどの程度なんですか？」

「僕の実力？うーん、余り自分の事はアピールとかしたくないけど…魔法に関してはこの町でも五本の指に入ると思うよ」

「ええ！？それなら何で生徒が少ないんですか？それだけの実力者なら、生徒がいっぱい居てもおかしくないのに」

「ああ、実はね…」

和也が驚いて疑問を質問し、ソイルが穏やかに説明する。

「この学校を始める前は、最初、僕は魔法ギルドで依頼を請けて生活していたんだ。その時の序列は4位だった」

ソイルの話では、魔法ギルドでは冒険者ギルドとは違い、序列という物がある。そしてその序列が、魔法ギルドでの実力を示すそうだと。因みに上位の者の方が、優先的に依頼を請けることが出来る。また、権力もある。

「4位！？…本当に凄い人だったんですね」

和也が驚く。ソイルが少し恥ずかしそうだと。

「まあ、権力を振りかざすのは嫌いだから、序列なんてどうでも良かったけどね」

ソイルは心底そう思っているようだ。和也はソイルという人物に好

印象を持った。ソイルが話を続ける。

「それで魔法ギルドで活動しているある日、この魔法区でも有数の、とある魔法学校から好待遇でスカウトされたんだ。いつまで魔法ギルドで続けられるか判らないからね、そのスカウトを請けたよ」

魔法学校の待遇としては、先ずは教授の下で生徒に魔法を教えたり、研究をして、いずれは教授としての席に付けるという事だった。

「それから5年間、必死で働いたさ…幾つか研究の論文も出した。しかし僕の論文は、すべて教授の手柄になっていったんだ。それを知って、教授と学校に抗議したんだけど…学校をクビになってね。他に出来ることもないから、自分で学校を開いたんだ」

ソイルが軽くうなだれながら話す。和也が少し罰の悪い顔をした。

「そうだったんですか…」

「うん、あと恐らくは、魔法ギルドにも学校からの圧力が掛かっていると、正直魔法ギルドには依頼を出しにくいんだ」

（そういう事情か…うん、魔法の実力は申し分ない…それなら…）和也は心の中で結論を出し、ソイルに切り出した。

「…ソイルさん、一つ提案があります。今回の依頼、報酬は要らないので、僕に魔法を教えてくれませんか？」

「…カズヤ君に魔法を？」

ソイルが首を傾げながら聞く。

「ええ、基礎だけでもいいので、報酬の代わりに教えてくれませんか？」

「…判りました、基礎ならすべて修めているし、僕で良ければ精一杯教えるよ」

少しの間考えた後、軽くはにかみながら、ソイルが了承した。

「それでは、明日からよろしくお願いします」

「ええ、此方こそよろしく、カズヤ君」

2人は握手を交わした。

「ソイルさんか、良い人だったな。でもあのお茶は…」

和也はソイルの家を出て、1人帰路につく。夕焼けが街を赤く染めている。

結局、和也は紫色の液体（お茶）は飲まなかった。

「兎に角、やっと魔法を覚えられる。一体どんな感じなんだろうな…」

和也が魔法への思いを馳せる。

「…でもその前に、依頼をしつかりやらなきゃな!!」

和也が明日に向けて気合いを入れた。

「明日から頑張るぞ!!」

再度気合いを入れる…と…

ドカアアアン!!

…どこかで何かが発射した音がした。黒い煙が東の空で昇る。魔物の遠吠えが辺りに響いた。

「…………大丈夫かなあ…………？」

心の中に若干の不安を残しながら…魔法区での3日間が始まる…

第12話 ソイルの魔法授業

「今日は確か授業の助手だったな」

和也は宿屋の食堂で朝食を食べている。

「でも授業の助手って、魔法の事解ってないけど大丈夫なのか？まあ、ソイルさんの事だから、大丈夫だろ」

朝食を食べ終わり、一息つく。

「ふう、そろそろ行くかな。女将さん、御馳走様でした。それじゃあ、出掛けてきますね！！」

和也が席から立って、宿屋の女将に声をかける。どうやらその人その人の性格等にも依るが、在る程度の年齢を越えれば、女性恐怖症の拒絶範囲から外れるらしい。女将さんに声をかける和也に変化は無かった。

「はいよっ、気を付けていつてきな！！」

「はいっ、行つてきます！！」

元気に返事をして、和也は宿屋から出た。

「お、おはよう御座います…」

和也はソイルの家についた。

「おはよう、カズヤ君。あれ？なんか疲れてるね…大丈夫かい？」

「ええ、途中で魔物に追いかけて、走っただけなので問題ないです」

「そ、そうか。ハハ…それは災難だったね…」

ソイルが顔を引きつらせて笑う。

「いえ、所で授業は？」

「あ、ああ。そうだったね、もう直ぐ生徒が来るはずだから、中で待とうか」

ソイルが自分の家を指し示す。

「…そうですね。取り敢えず片付けでもしますね」

「ハ、ハハ…悪いねえ」

二人はソイルの家へと入っていった。

和也が簡単に片付けをして待っていると。生徒が徐々に集まりだし、ソイルの家の裏手で授業が始まった。

（昨日の話通り、生徒は少ないんだな）

和也が生徒を見る、皆10代前半位の年齢で、全部で六人しか居な

かった。

「前は魔法の基礎知識を教えたね。じゃあ今回は実際にマナを感じてみようか」

（マナを感じる？）

ソイルの授業が始まった。和也はまだ魔法を勉強していないので、何のことかさっぱりだった。

和也の頭に、ハテナマークが飛び交いながら授業は進んでいった。
（マナを感じる？何のことだ？それに皆はソイルさんと手を繋いで、一体何をしてるんだ？）

「さあ、僕がみんなにマナを流すから、それを感じてごらん。感じた者は、次は自分で操ってみるんだ」

ソイルの手が淡い緑色に輝き出す。それが徐々に手を伝って生徒達に流れていく。

「！？あれは！？」

和也がそれを見ながら1人驚いている。

輝きは手を繋いだ生徒全員に行き渡り、一定方向に流れ出した。

「…あ！先生っ、何か感じた！！これがマナだよね！！」

1人の生徒が驚いた様子でソイルに言う。

「うん、そうだよ。それじゃあ今度は手を離して、1人でやってごらん…カズヤ君この子を見て上げてて」

その生徒は1人輪の中から外れ、少し離れたところで目を瞑り、集中する。和也はその生徒を見守る。

「…あ！！」

和也が見守っていると、徐々にその生徒の身体から、淡い黄色の輝きが溢れ出す。ソイルよりは弱々しい光だが、しっかりと輝いている。

「そ、ソイルさん！！」

カズヤがソイルを呼ぶと、ソイルも生徒の変化に気付き、コクリと頷く。そして、ソイルは輪になっている生徒に声をかけ、今度は黄色の輝きを出している生徒と手を繋がせ、輪を作らせた。

輪の生徒達に、徐々に黄色の輝きに染まり始め、全員が染まるとまた一定方向に流れ始めた。

手の空いたソイルが和也に近付く。

「どうだい？カズヤ君。これが魔法の基礎…マナだ」

「…マナ？」

「そう、魔法とは、世界に存在するマナという物を、自分を通して操り加工し、それを放出する…そして発生する現象の事を云うんだ」
「それじゃあ、マナを感じる事が出来れば、魔法が使えるんですね」
「まあ、感じてから次に操るという工程に入るんだけどね。まあ、これが魔法の第一歩だよ」

「なるほど…」

ソイルの説明を聞き、和也が顔つきを変えて生徒達のマナの流れをじっくりと見る。集中しているとふと、その光りに気配を感じた。どこか暖かい気配だ。

（この感じ、気配が…マナ…？）

その後、恙無く授業は終了した。

「それじゃあ、カズヤ君の授業を始めようか」
ソイルが言う。

今は昼過ぎ、ソイルの授業が終わり、生徒達が帰った後だ。どうやらソイルの学校では、一日中授業をする訳では無いようで、今日はもう授業は無いとの事だ。

「まあ、生徒が少ない為でもあるんだけどね」

ソイルが苦笑いをしながら言う。和也も苦い顔だ。

「ハハ…それでは授業をお願いします」

「うん、先ずはね…」

ソイルの授業で、魔法についての知識を得ていく。

魔法とは、この世界に溢れるマナという物を操り世界に事象を起こすことを言う。基本的には誰でも扱えるのだが、人によってレベル

は様々だ。マナを感じるセンスと、そのマナを加工する創造力、そして放出する出力が大事になる。

マナは、感じ方は人によって変わるらしい。感度はそれぞれの才能によって異なるため、マナを感じるのに鈍感な人だと、此処で挫折して魔法を使うのを諦める。最初の壁らしい。

イメージと放出についても、人それぞれで感覚が異なるとの事だ。特に呪文などには必要ないらしいのだが、起こす事象をしっかりとイメージし、威力の効果の底上げをするためには、呪文を唱えるというのは有効な手段らしい。

そして実際に放出すると、魔法が発動するのだが。魔法によって必要な出力が変わる。出力が低い者だと、魔法によっては出力が足りなくて魔法が発動しないらしい。出力が大きな者ほど大規模な魔法が使ええると言う事だ。しかし、イメージによっては少ない出力で複雑な魔法、大規模な魔法も発動出来るとの事だ。

「なるほど…大事なのは才能では無く、起こす魔法に対するイメージと理解力か」

「カズヤ君は理解が早いね。いくら出力が高くても、ちゃんと理解してしっかりとイメージ出来ていなければ、同じ事象を起こす魔法でも、出力の高い方が打ち負けるなんて事もあるんだよ」

「それじゃあカズヤ君、実際にマナを感じてみようか」

「…はい」

和也が頷く。

「うん、まずは僕の手から流してみるから、それを感じてみて。さあ、手を…」

和也がゴクリと唾を飲み、腹を括ったのかソイルの手を握って目を瞑る。

「じゃあ…いくよ」

ソイルが徐々に淡い緑の光に包まれ、光が手を通して和也に流れ始めた。

（……！これは……優しくて暖かい……しかし大木のような力強さを感じる……そうか、自然そのもの……これがマナ）

和也が目を開くと、ソイルと自分が淡い緑の光りに包まれている。

「ソイルさん、この暖かい光がマナなんですね」

和也がそう言うと、途端に光が霧散した。どうしたのかと和也がソイルを見ると、ソイルの顔が驚きに染まっていた。

「か、カズヤ君……！光って……！」

「あ、違いました？ソイルさんから僕に流れてくる暖かい感覚と、淡い緑の光が見えたんですけど……」

「何だって……？い、いや……カズヤ君これが見える？」

ソイルは1人悩んだ後、手のひらを上に向けて和也に見せる。

「……？あ……ソイルさんの掌の上に、丸い光りが見えます。今回は紅いですね、何か刺々しい感じですよ」

「やっぱり……カズヤ君、君はマナを感じるだけじゃなくて、直接見ることが出来るんだ。マナを感じるセンスは申し分ない、いや寧ろ異常な才能だよ」

ソイルの話では、マナを直接見た人間は存在しないようだ。普通の人なら何かを感じる程度。ソイルのような実力者でもその魔法それぞれの、暖かいや、刺々しいといった感覚までしか判らないらしい。「そ、そうなんですかね？」

和也は他の人の感覚が判らないので、異常なセンスと言われても、いまいち実感が無い。

「ま、まあいいか。そしたら今度は、自分で世界にあるマナを感じ取るんだ。カズヤ君なら気配を教えれば判るかな。世界に在るマナは」

「無垢で暖かい。優しくて力強い……ですね」

「う、うん。その通りだ」

（カズヤ君……君は一体……）

そのマナを感じるセンスに、ソイルは若干の恐怖を感じていた。冷や汗が止まらない。

（一度理解すれば判る…世界にはこんなにもマナが溢れていたなんて…）

和也は自分がマナを感じる事がで来たことに感動した。

（でも、ソイルさんの時と色が違う…白い…！！そうか…《無垢》だからだ）

段々とマナを理解する。そして徐々に自分の中にマナを受け入れていく。

それを見たソイルは、さらに驚いて和也を見る。

（まだ教えていないのに、既にマナを取り込んでいる…！）

まだマナを感じる事しか教えていないのに、和也はそれが当たり前
の事かのようにマナを自分の中に取り込んでいる。と、和也に変化が
起きた。

「…ん？カズヤ君が輝いている…？」

ソイルが呟く。和也から徐々に銀色の光が溢れ出す。

「マナが見える…それ程までにマナをとりこんでいるのか？」

どうやら和也は、相当な量のマナを取り込んでいるようだ。その影
響で、普段マナを見ることが出来ないソイルにも、マナが見えてい
るようだ。取り込むにつれ、輝きが強くなる。

眩しさを感じて和也が目を開けた、自分の状況に気付き驚いている
ようだ。

「…！！ソイルさん！！これは一体…」

「マナを感じてから次にする行程、マナの取り込みです。そこから
イメージをして、マナを加工し放出すると、魔法の発動に至ります」

「ここから加工して放出…」

「ええ、しかしこのまま進めると何が起きるか判りません、今日は
此処までにしましょう」

「え…はい、そうですね」

和也は少し逡巡した後、頷いた。

「では、マナへの集中を解いて下さい」

「はい」

和也が全身の気を緩めた。すると徐々に光が消えていき、何もなくなつた。

「今日は此処までです。お疲れさまでした」

「いえ、ソイルさんこそお疲れさまです」

2人はソイルの家の応接室で寛いでいる。2人の前にはビーカーに入つた青い液体がある。昨日とは別の「お茶」らしい。ソイルはグイツと飲んでいる。和也はグイツと遠ざける。

「先程見た限りでは、どうやらカズヤさんは、問題なく魔法が使えるそうですね」

「本当ですか？…良かった」

ソイルの話を聞き、和也がホツとした。ソイルが話を続ける。

「後は、実際に魔法を使つてみて、どの位の出力があるかですね。

それによつて使える規模が変わります」

「出力…それもありましたね」

「ええ、カズヤさんなら相当な出力が期待できそうです」

「そうですね？…わからないや」

ソイルが煽てるも、和也には実感が無いので変化が無かつた。

「それでは、明日は簡単なマナの加工からやりましょう。状況次第で、放出もやります」

「はい、わかりました。それではそろそろ帰りますね」

「そうですね。では明日も今日と同じ位に来て下さい。実験の助手をお願いしますね」

「はい、では失礼します」

和也がソイルに挨拶をし外にでる。

「…あの才能…カズヤ君はどんな魔法使いになるのかな…」

ソイルの眩きが部屋に響いた。

「明日か明後日には魔法が使える。楽しみだな」

和也は商業区を宿屋に向けて歩いていている。自分に魔法を使う事が出来るのが解ったのが嬉しいのか、その足取りは軽い。

「明日も仕事と授業と頑張ろう！！と」

いつの間にか和也は、宿屋の目の前に着いていた。

「ただいま戻りました！！」

和也が元気に宿屋に入る。宿の女将が出迎えた。

「おや、お疲れ様。そうそう、今日の昼にカズヤを訪ねて人が来たよ」

「へ？僕にですか？」

心当たりが無い和也は、首を傾げながら女将に聞く。

「ああ、金髪のとつても綺麗なお嬢さんだったねえ」

「……………まさか」

和也の顔が真っ青になる。心当たりが一人しか居ないのだ。女将が続ける。

「確か名前は……」

「お、女将さん！！その先は言わないで！！！！」

「…ステラさんと言ってたよ。カズヤの彼女かい？」

女将がニヤニヤしている。和也は宿屋の入り口で、真っ白に燃え尽きた…

第12話 ソイルの魔法授業（後書き）

どうも、読んでくれて有り難う御座います。 ころです。

今回は少し早い更新です。 次回はおそらく明日の夜23時から24時位になるかと思っています。 不定期で申し訳ないです。

それでは、T r a p p e rを読んでくれる皆様に感謝！！

第13話 実験と変化

「カズヤ君、その粉をここに半分だけ入れてくれ」

「こ、これですか？」

ソイルがビーカーの中の液体をかき混ぜながら和也に指示を出す。和也が手に取った粉を恐る恐るビーカーに入れていく。

「そう、少しづつ。いい感じだ」

「…ゴクリ」

ソイルがビーカーを凝視したまま呟く。和也の手が震えている。

「……あっ……!!」

「か、カズヤ君……!!」

ボンッ!!

ビーカーが爆発し、部屋中に青い煙が充満した。

ソイルの依頼の二日目、和也は初日と同じ時間にソイルの家に着いた。少し魔法区に慣れたようで、今日は初日のように疲れていなかった。

「ソイルさん、おはよう御座います!!」

「やあ来たね、おはよう」

和也は今日も魔法を覚えられるのが楽しみなのか、やたらと元気だ。ソイルはいつも通りに穏やかに答える。

「今日は実験の助手でしたね!!何をするんですか?」

「ハハ、カズヤ君元気だね。今日は新しい魔法薬を作ろうと思うんだ」

和也のテンションに若干引きながら、ソイルが今日の実験の説明をする。

「今回の実験が成功すれば、画期的な回復薬が出来るんだ。今までの回復薬は、疲労を少しだけ回復する程度だったんだけど、今回の傷も癒せるという物なんだ!!これが完成すれば、冒険者ギルド等で重宝されるだろうね」

「ほうほう、成る程」

（確かにその類の薬が今まで無かったんなら、完成すれば凄いことだ）

ソイルが若干興奮気味に説明した。和也は実験の内容を聞き、逆に今までのテンションが下がっていき、緊張した顔つきになる。

「じゃあカズヤ君、まずは…」
「…まずは？」

ソイルが実験を始めようとする。和也がゴクリと唾を飲み、開始の言葉を待つ。

「…この部屋を片付けようか」
「…そうですね…」

緊張感が一気に崩れた…

「よし…っと、じゃあカズヤ君、僕が指示する通りに動いてくれ」
「はい」

片付けと、実験の準備が終わり、ソイルがまじめな顔でカズヤに言う。和也も緊張気味だ。

「ではまずは…」

ソイルの実験が始まった。

今回の実験は、幾つかの薬品をソイルの計算した比率で混ぜ合わせる。そして出来た回復薬の実際の効果の見聞だ。

しかし先程、和也が手元を狂わせて、混ぜていた薬が爆発した。青い煙が晴れていく。

「ゲホッ…ゲホッ！！カズヤ君…大丈夫かい？」
ソイルの姿が現れる。

「…ゲホッ…すいません…」
和也の姿も見えてくる。

「って、カズヤ君！！その姿は！！」
「え？なんですか？」

ソイルが煙の中から現れた和也を驚愕の目で見る。しかし和也は何

が起きたのか判らないで首を傾げる。

「だから、その姿！！そ、その鏡を見て！！」

「姿？ソイルさん、僕の姿に何が…あった…」

ソイルに言われて和也は部屋の端にあった鏡を見て…絶句した。

「な、何で髪が青いんだ！！」

先の薬品の爆発による影響か、和也の髪はくすんだ青色になっていた。

「に、日本人の証たる黒髪が…」

「か、カズヤ君。取り敢えず今日の実験は此処までにして、カズヤ君の髪の毛を治す薬を作ろう」

「う、あ、はい、お願いします」

ソイルの提案に、パニックになりながらも和也は頷いた。

「うわっ、今度は緑！！」

「おかしいなあ、理論上は間違っていないのに」

「ソイルさん！！次です！！次行きましょう！！」

「よし、そうだね！！」

ソイルと和也の実験は続く…

「あ…赤…」

「あれ？今回は間違いない筈なのに…」

「ソ、ソイルさん。後ろの薬品は何ですか？」

「後ろ？……………」

「……………」

「ア、アハハ…入れるの忘れてた…ごめん」

「……………次です」

その後凡そ4時間ほど実験を繰り返したのだが、和也の髪の毛の色が変わってだけで一向に元の色には戻らない。

ひとまず休憩を挟もうと、ソイルと和也は応接室で寛いだ。

「うーん、次はどの配合で試すか…」

ソイルがブツブツと呟く。その様子はマッドサイエンティストのようだ。和也はピンク色の頭を俯けて、何やら考えている。

「…ソイルさん」

「モスクルの葉を多めに入れて…」

「…ソイルさん!!」

「うわっ、なんだいカズヤ君!？」

和也が気付かないソイルに大声で呼ぶと、やっとソイルは自分が呼ばれているのに気付いた。

「次で最後にしませんか？」

「え?でも次で髪の毛が黒くなる保証は無いんだよ?」

「はい、でも…確かに最初は驚いたけど、別にこのままでも良いかなって」

(これならステラさんにも気付かれないだろうし)

「…判ったよ…自分に責任だし治せないのは悔しいけど、カズヤ君がそう言うならそうしよう」

「はい、最後の実験です」

「今回は色を強制的に変えるんじゃなくて、元の色と混ぜて変化させる薬にしてみたよ」

ソイルが真面目な顔で、和也に最後の薬品の説明をした。

「難しいことは解らないけど、兎に角今までのとは違う物なんですね」

「うん、その解釈で間違いないよ」

「でもこれ売り出せば、髪の毛の色を変えたい人なんか、結構

売れるんじゃないありません？そしたら貧乏生活から脱出ですよっ」

「あ、それは良いかもしれないね。これから真剣に造ってみようかな……」

ソイルと和也、二人とも爽やかな顔で語る。時は来たようだ。

「それじゃあ……いくよ」

「……………はい!!」

ソイルが深呼吸して、和也の頭に薬品を垂らす。するともう慣れた煙が部屋に立ち込めた。

「ゲホッ…カズヤ君!!どうだい？」

「ゲホッ…ゲホッ…ソイルさん」

「……………カズヤ君!!」

ソイルの叫びが部屋の中に木霊した。

ここはユーノスにある一軒の宿屋、その一階にあるカウンターで、1人の男が宿屋の女将と話している。

「済みません、『カズヤ・ホシナ』のパーティーの者ですが、急遽依頼でこの町を出なければいけなくなってしまったので荷物を取りに来ました」

二十代後半の、根本だけが黒い、鮮やかな蒼い髪の毛の男が言う。

「そうかい。今丁度、ステラさんという方がカズヤを訪ねてきてるんだけど、それはしょうがないねえ」

「申し訳ないです。それではこれが今までの宿泊費です」

男が宿屋の女将に銀貨を2枚渡す。

「はいよ、確かに。それじゃあこれが荷物だよ」

そう言つて、女将が男にカズヤの荷物を手渡した。

「はい、確かに。それでは失礼します」

男が女将に頭を下げ、宿屋をでる。…が

「ちょ、ちょっとお待ちになって!!」

宿屋の食堂から、男を呼び止める声が掛かる。男がビクツとして振り向くと、そこには身なりの良い金髪の美しい娘がいた。

「何でしょう？お嬢様」

男が若干身を引きながら訪ねる。暑くのないのに、男の顔には汗が大量に流れている。

「私はカズヤの知り合いのステラという者ですわ。カズヤはどちらに？」

男が済まなそうな顔をしながらステラに答える。

「今回の依頼は王都での仕事なのですが、カズヤは一足先に王都に向かいました。恐らく今日の深夜には王都に到着しているでしょう」

「……………そうですか」

男の答えに、ステラは泣きそうな顔で、しかし気丈に振る舞う。男の顔が歪む。

しばらく宿屋の中にしんとした空気が流れた。と、徐にステラが顔を上げて男に言った。

「……………解りました。それならカズヤに、何処にしようと必ず会いに行くとお伝え下さい」

「…はい、必ず…」

ステラの言葉に、男は歪んだ顔のまま返答した。そして男は、重い足取りで宿屋を去った。

ユーノスを歩く男の姿は、魔法区へと消えていった。

男はソイルの家にたどり着いた。その扉をノックもせず静かに開ける。

「ソイルさん、戻りました」

男がソイルの家に入り、言う。

「お帰りなさい、カズヤ君。無事に荷物は持ってこれた？」

ソイルが尋ねると、男「和也は少しだけ寂しそうな顔で言った。」

「ええ、無事に。他の問題も片付きましたよ。それじゃあ済みませんが、一晩だけお世話になります」

「うん、散らかってて悪いけど、好きに使ってね」

「はい、有り難う御座います」

「じゃあ、取り敢えずお茶でも飲もうか。今出すね」

ソイルはそう言つと、キツチンらしき部屋に消えていった。
1人部屋に残された和也がぼつりと呟いた。

「……………さようなら……………ステラさん……………」

第14話 和也の魔法

「おはよう御座います。ソイルさん」

「おはよう、カズヤ君。よく眠れましたか？」

「はい、有り難う御座います」

和也がソイルの家に泊めて貰い、一夜明けた。二人が挨拶を交わし、応接室のテーブルに座って朝食を食べる。意外にも、料理の腕は良かった。今日は紅い液体がビーカーに入って出される。

「今日は課外授業でしたよね。何処でやるんですか？」

和也はビーカーを視界に入れないようにして、ソイルに聞く。

「うん、課外授業は、街を少し出た西の草原でやるんだけど、今日は午後からの開始だから、午前中はカズヤ君の授業をしようかと思うんだけど。どうかな？」

ソイルがビーカーの中身を飲みながら答えた。

「授業は午後からなんですか。それなら午後まで時間がもったいないし、お願いします」

結局、今日も和也はソイル謹製のお茶を飲まなかった。

朝食を食べ終わり、ソイルとカズヤは家から出て、家の前の少し開けた場所で練習を始める。

「じゃあカズヤ君、まずは復習だ。マナを体に集めてごらん。」

ソイルが和也の前に立ち指示をする。指示に従って、和也は目を瞑り集中を始めた。

和也の身体が、薄く銀色の光に包まれる。和也が目を開けた。

「これで良いですか？」

ソイルが頷く。

「うん、問題ない。それで、一昨日は伝え忘れちゃったんだけど、カズヤ君は相当な量のマナを身体に取り込むことが出来るみたいなんだ。取り込んだマナが多すぎて、普段マナが見えていない僕にも、今カズヤ君が取り込んでいるマナが見えている」

「え？そうなんですか？」

和也は少し驚く、ソイルは真面目に頷く。

「うん、見えてる。でもこれは目立つから、普段は其処までマナを取り込まない方がいいね」

ソイルの提案に、和也も頷く。

「そうですね、目立つのは僕も嫌いだし…ソイルさん、何か対策はありますか？」

和也の問いに、ソイルは即答した。

「うん、あるよ。単純にマナの取り込みをコントロールして、取り込む量を少なくすればいい。まあ、これには練習が必要だけどね」

「なるほど、取り込む量を少なく…」

和也が考えながら頷く。

「うん、はつきり言つて、僕にもカズヤ君の状態がキチンと把握できていないんだ。情けないことにね。だからそこまでの量のマナで何が出来なのか、また何が起きるのかも解らない。だから取り込む量を調節する方法しか思いつかないんだ」

ソイルが和也に情けない顔で言う。和也は首を横に振る。

「いえ、気にしないで下さい。自分自身の事だし、その部分は僕が自分で修行して見つけていきます。」

「…うん、判った」

和也の話を聞き、ソイルは少しだけ元気を取り戻した様だ。

「よし、それじゃあマナの取り込みはカズヤ君に練習して貰うとして、先に進めるよ」

「はい、お願いします」

「それじゃあ、マナを取り込んだら、それをどの様に変化させて、どういう事象を発現するかイメージするんだ。慣れないうちは言葉に出しても良い。まずは僕が手本を見せるね」

そう言つと、ソイルは意識を集中し始める。ソイルにマナが取り込まれたようで、和也にはソイルが淡い緑色に輝いて見える。

「カズヤ君にはマナが見えているから判るよね。今マナを取り込んだ。次に、分かり易く手のひらにイメージするから見ててね」

ソイルが右手を前に出し、集中を続ける。と、段々ソイルの右手が…厳密に言つと右の掌から少しだけ間を空けて、赤く輝く。

「…これで準備は完了、後は放出すれば、術者がイメージした通りに魔法が発動する」

「はい、赤く光っていて、刺々しい攻撃的な気配を感じます。これは攻撃魔法なんですか？」

「そう、今回の魔法は、放出すると球状になって飛ぶ。そして対象に当たると燃え上がるというイメージで構成している。ここまでくると、誰でも魔法の視認が可能になる。大体はこの時点で、どんな魔法なのか判るようになるんだ。それじゃあ放出するね」

ソイルが右手を少し先にある、小さな枯れ木に向けた。と、その手から丸い紅い玉が飛び出し、枯れ木に向かって飛んでいく。

「！？」

和也が魔法の勢いに驚きながら観察する。

枯れ木に紅い玉が当たると、枯れ木が勢い良く燃え上がる。まるで小さな炎の竜巻だ。やがて木が燃え尽き、灰だけが残った。

「着弾、発動…と。これが魔法の発動までのサイクルだ。理解できたかい？」

ソイルが和也の方に振り返り言う。和也は始めて見る光景に、呆氣にとられていた。

「こ、これが魔法…すごい…」

「そう、今のは一番ポピュラーな攻撃魔法だ。マナの取り込みも放出量も少ない、魔法を使う者なら誰にでも出来る魔法さ。さて、力ズヤ君やってみようか」

「はい！！」

和也が再びマナを取り込む。まだ加減が出来ない為、身体が銀色に輝く。

「次に、イメージ…」

和也が右手を前に出し、集中する。

（確かさっきのソイルさんの魔法は…球状になり、対象に当たると燃え上がる小さな炎…）

と、和也の右手が赤く輝く。

和也が目を見開いて、先程の枯れ木の隣にあった木に右の掌を向けた。

「いけつ!!」

和也が言葉に意志を乗せて放つ。和也の手にある赤い輝きが球状に変化して、木に向かって飛んでいった。

「出来た…」

和也が震えながら呟く。出来たことが嬉しいのだろう。

「うん、おめでとう!!」

（一度見せたとはいえ、初めての魔法でこうも見事に発動するなんて…まいったな）

和也が嬉しそうに笑い、ソイルが晴れやかな笑みを見せる。

和也の放った魔法が当たった木は、先程の木と同じ結果を残していた。

「あとはイメージ次第で、どんな魔法でも使える…って、後一つ忘れてた」

「あと一つ？」

「そう、カズヤ君の出力を調べていなかったよ。これが判らなきゃ、どの程度の規模の魔法まで発動出来るか解らない」

「あ、そんなもありましたね、どうすれば判るんですか？」

和也が軽い調子でソイルに尋ねる。ソイルも軽く答える。

「簡単だよ、イメージする前のマナ、カズヤ君の場合銀色だったね。それを手を通して僕に流すんだ。流れてくる量で、大体の放出量が判る。さ、やってみようか」

ソイルが和也に手を差し伸べる。和也はソイルの手を握ると、目を瞑り集中する。

徐々に和也が銀色に輝きだす。

「ここから、ソイルさんにそのままマナを流す…」

ソイルの手から全身かけて、徐々に銀色に輝き出す。しかしその輝きは、ソイルが授業で生徒達に流していた時よりも弱々しい。

（ん、これは…）

ソイルは和也の出力が解ったようだ。

「カズヤ君、大体判った。止めて良いよ」

ソイルが言つと和也が手を離した。輝きが失せる。和也が目を開き、軽く息をはいた。

「ふう、ソイルさん、どうでしたか？」

「うん、そうだね…ちよつと言ひ辛いんだけど、一般の魔法使いよりも低いかな」

ソイルがばつの悪そうな顔で言う。しかし和也には特に変化は無い。

「一般レベルよりも低いんですか」

「そう、恐らく使えても中規模…家を一軒壊す程度の魔法までしか放てない。でも取り込み量は桁外れだから、放出しない魔法…自身に事象を起こす魔法ならかなりの者が使えるはずだよ」

ソイルの言葉に和也が頷く。

（まあ、畏もあるし魔法は其処まで強くなくても問題は無いか。それに使い方次第だしね。地球の知識を魔法に反映出来るかな？）

和也が納得しているのを見て、ソイルが切り出す。

「それじゃあ、カズヤ君の魔法のレベルが解ったことだし、そろそろお昼にしようか」

「あれ？もうそんな時間ですか？…通りでお腹が空きました」

丁度言いタイミングで、和也の腹の虫が騒ぎ出す。

「ハハハ、元気な虫だね。じゃあ、家の中に入ろう」

「…はい」

和也は少し恥ずかしそうに、ソイルの後を着いて行った。

昼食を食べ終わり、2人ともくつろいでいる。

「しかしカズヤ君、よく食べたね」

「ええ、ソイルさんの料理の腕が良かったんです。とても美味しかった」

ソイルがお茶を啜りながら、和也に言う。和也が満足そうにお腹を

叩いた。

今回出されているお茶は灰色だ。

「錬金術の基本は料理だからね。さて、午後は生徒達が来たら課外授業を始めるからね」

「ハイ、昼食の分も頑張ります！！」

ソイルの言葉に、和也は力強く頷いた。しかし手はお茶を遠ざけた。

「さあ、どうだい皆。ここがユーノスの西の草原だ。此処では魔法薬に必要な薬草が何種類か手に入る。魔物も強いのは居ないから、まだ弱い者が実戦の修行をするには良いところなんだ。今日はここで、実際に魔法を使うからね」

西の草原は、所々木が生え、草が覆い茂っている場所もあるそんなに大きくはない草原だ。北には小川が流れ、森が見える。

ソイルの言葉に、和也と生徒達が頷く。

生徒達は、やっと魔法が使えるとあって興奮気味だ。

「じゃあ、始めようか」

鮮やかな蒼穹の元、ソイルの課外授業が始まった。

第15話 修行とレベルアップ

和也は一匹の魔物と対峙している。ライオンを倍にした様な体躯に鷲の翼を持つ《サーベルウイング》という魔物だ、ユーノスの西の草原や、ダクレルの森にいた《一角狼》よりランクが1つ上の魔物だ。

和也は右手にナイフを持ち、相手の動きに併せるためか、サーベルウイングを鋭く睨み、待ち受ける構えでいる。その身体は淡く銀色に輝いていた。

と、突然サーベルウイングが、バックステップしたと思うと直ぐに飛び上がり、その大きな翼を駆使して和也にもすごい勢いで飛びかかる。サーベルウイングの、一角狼よりも倍近い大きさの爪と牙が和也に襲いかかる。

和也は冷静に相手の動きを見定め、肩を狙ってきたその爪を、逸らすように魔法で障壁を作り出して避ける。サーベルウイングは和也が爪を避けたと見るや、そのままの勢いで、和也の首を狙って噛み付いてきた、和也はそれを紙一重で避けて、すれ違い様にサーベルウイングの首をナイフで一閃。

サーベルウイングの首に一本の赤い線が刻まれ、一拍した後にはドツと大量に血が溢れ出す。

サーベルウイングは暫くもがいた後、ドサツと横に倒れ動かなくなった。和也の身体から銀の輝きが消える。

「ふう、これで5匹目。大分魔法にも慣れたかな」

和也が額の汗と、ナイフに付いた血を拭いながら呟いた。

第15話 修行とレベルアップ

時はその日の朝に遡る。ソイルの依頼を終えて一週間が過ぎるが、居心地が良いようで和也は未だソイルの家に厄介になっていた。

その間に雑用依頼をしながらソイルに魔法を教わっていたのだが…

「これで基本属性は全てかな。後はカズヤ君の構成イメージと、使い方次第さ」

「はい。恐らく実戦では補助的な使い方のほうが多いかなと思うけど、大体は理解したかな。ありがとう、ソイル」

一緒に過ごすうちに、ソイルと和也は大分打ち解けたようだ。

「いいいえ、僕も色々お手伝って貰ったしね。持ちつ持たれつさ」

和也が魔法を教えて貰う代わりに、ソイルは実験を手伝って貰っていた。そう、和也がお世話になった染髪薬だ。和也の修行を終えてから本格的に作り上げ、今は商人ギルドを通して完成品が露店等に

並び始めたところだ。売れ行きは上々らしく、近いうちにソイルの極貧生活も脱出できるだろう。

「それにカズヤ君、僕が教えた事をどんどん覚えていくから、こちらにも楽しかったよ。優秀な生徒だ」

「そう言ってくれるとお世辞でも嬉しいよ」

「お世辞じゃないんだけどなあ……」と、そうそう、それで……もう僕が教えてあげられる事は無いし、僕の方も、後は商人ギルドからの報告を待つだけで手伝って貰うことが無いから、ユーノスの西の草原の先に森があっただろう？」

「あー、小川の先だっけ。その森が何か？」

和也が首を傾げながら尋ねる。

「うん、あそこには草原を歩いて二時間位で着くんだけど、これからはその森で修行してみてもどうかと思っただけ。あそこは名も無い森だけど、西の平原よりワンランク上の魔物が出るんだ。カズヤ君の実力を上げるなら、その辺りが丁度良いかと思っただけ」

「ワンランク上かあ……」

ソイルの提案に和也は上を向きながら考える。

確かに、和也はノールの一角狼の捕獲依頼を完了してから、様々な討伐依頼を請けて実力を伸ばし、既に一角狼や、ユーノスの西の草原の魔物では和也の相手になっていなかった。

（もう一つ上のランクかあ、まあこの世界じゃ何があるか判らないし、強くなっておいて損はないか。魔法の練習もしておきたいし、依頼の合間に行ってみるかな）

「うん、明日から行ってみるよ」

和也が頷きながら言う。ソイルは真剣な顔で話す。

「ただ、今のカズヤ君でも最初は手こずると思うから気を付けてね」

「ああ、油断はしないでおく」

翌日の朝、早速和也は西の草原の森に入った。

西の草原の森は、大きさはダクレルの森の半分にも満たない。森の中を丸一日ほど進むと《フォール山》の麓へと続いている。フォール山には、ランクの高い魔物達が弱肉強食を繰り返しており、そこで弱者となった魔物が、強者となるべく森へと降りてくる為、森の中は草原とフォール山の、丁度中間のランクの魔物のテリトリーになっているのだ。

その森は、小さいながらもどこか薄暗く、空気が重い。

「なんか今までと雰囲気が違うな。空気がじっとりとしていて重苦しい。それにこの臭いは…血の臭い？」

よく見ると、視界の端に魔物の食い荒らされた後がある。

「ソイルの言う通り、一筋縄じゃ行かないみたいだ」

（罾を使えば何とかなるかもだけど、今回は修行だしね）

今回は、剣術と魔法の修行の為能力を使わないという縛り、そして今までに無い空気に、和也の緊張感が増していく。

…と、周りを警戒しながら歩いていると、少し開けた場所に出た。見ると、二匹の魔物が殺し合っていた。

一匹はライオンの様な体躯に、鷲の翼を持つ魔物 サーベルウィング もう一匹は、熊の身体にサイの様な頭が乗っている魔物 ライノベアーだ。

「うげえ、強そう…帰ろうかな…」

今二匹は、唸りながらお互いを牽制しあっている。魔物が気付かないうちに逃げようと、一歩足を後ろに退いたとき、パキリと音がした。和也が地面に落ちていた枝を踏んでしまった。

「あ…」

和也が恐る恐る魔物の方を見ると、二匹とも和也を見ていた。目が合い、時が止まる…そして動き出す。和也が猛ダッシュで逃げ出したのだ。

しかし、ライノベアーは移動速度が和也より遅いらしくまだ距離があるが、サーベルウィングはその翼で空を悠々と飛び回り込んできた。サーベルウィングは、回り込んできた勢いをそのまま利用して、

和也に向けて前足を横に薙ぐ。

「うえおあ!!」

和也は意味不明な叫びをあげながら、とつさに地面に伏せて避ける。
「あつぶなかつた!!」

追撃をされないように、転がりながら起き上がり体勢を立て直す。
今の間にライノベアーにも追い付かれ、和也は二匹に囲まれてしまった。和也がナイフを抜き構える。

「腹くくってやるしかないよ…」

途端和也の思考にスイッチが入り、目つきが鋭くなる。

和也がライノベアーに向かい走る、ライノベアーは和也の動きに併せて腕を振るった。和也は当たる寸前で急停止し、間合いを計る。

(今の俺のスピードじゃ捉えられる…なら魔法で…)

和也の身体が淡く銀色に輝き始める、ライノベアーは警戒する…警戒する中、和也の姿が消え去る。

ライノベアーが驚いて周りを見るが、何もない…と、ライノベアーの脳天にナイフが突き立った。

和也が魔法で身体能力を強化し、ライノベアーの頭上から襲いかかったのだ。ライノベアーの目玉がぐるりと上を向き、地に伏せた。

「まずは一匹、つてうわ!!」

ライノベアーを倒して少し気を抜いた瞬間、横からサーベルウィングが和也に襲い掛かった。サーベルウィングは、側面から和也に前足を振り抜く。和也はとつさにロングソードを抜き、サーベルウィングの前足の攻撃を防ぐ。が、和也が装備しているのは、ノールで買った安物のロングソード、防いでいるうちにピシピシと亀裂が入る。

「ぐ…マズイッ!!…炎よ!!」

とつさに和也は左手をサーベルウィングに向ける。と、瞬間手が赤く輝き、サーベルウィングに向けて球状の炎が飛ぶ。流石に近距離で反応できなかったのか、サーベルウィングに直撃、炎に包まれた。
「…プハア!!ハアツ…ハアツ…危なかつた…」

和也は剣をさやに納めて、ライノベアーからナイフを引き抜き、血を拭いこれも鞘に納めてその場に腰を下ろした。

「これでワンランク上…強いなあ」

和也が呟く。頭の中では、ここより上のランクの魔物を想像してぞつとする。

和也が頭を振る。

（余計な想像は止めとこ）

「でも、能力無しで戦えてる…もう少し頑張ろう!!」

和也は気合いを入れて、歩き出す。その後、ライノベアー二匹と遭遇して倒し、冒頭に至る。

「そろそろ良い時間かな…」

五匹目の魔物を倒し、一息付いて和也が言う。今の時間は約3時、帰りの時間を考えると確かに良い時間だ。

「よし、帰るか」

和也は森の出口に向かい歩き出す。

「大分ナイフと剣の腕も上がってきたな…剣は新しいの買わなきゃ

…」

和也のロングソードは、先のサーベルウィングとの戦いで既に実用に耐えうるモノではない。一合でも打ち合えば粉々に砕けるだろう。

「でも、魔法にも慣れてきたし、良い修行だった」

和也が満足そうに頷く。と、森の出口が見えてきた。

「後は草原を抜けるだけか」

和也がのんびりと森を抜けた時、後ろから叫び声が聞こえた。

「…なんだ？」

和也が呑気に振り向く。段々叫び声が近付いてくる。何かの雄叫びも聞こえてきた。

「やばい、イヤな予感しかない…」

和也が冷や汗を垂らし、いつでも逃げられるように構える……唐突にそれは姿を現した。

「タアアスケテエエエ！」

「ウボアアアアアア！」

すさまじい叫びを上げながら、森の中から2人の冒険者が猛スピードで飛び出した。

1人は凛々しい感じの金髪の男性、もう1人も金髪で、こちらは気が強そうな女性だった。

「グルルルルグアオオオオン！！！！」

と、もう一匹…まるでティラノサウルスの様な魔物二人を追って出てきた。

「あ！その人！！」

女性の方が、前方に見える和也に気付き声を掛ける。和也はその声に反応し……

「！！って、ちょっと待てえええ！！」

…一目散に逃げ出した。

そのスピードは素晴らしく。二人と一匹からどんどん遠ざかって行く。

「巻き込まれてたあまるかあああ！！」

…和也はまた1つ壁を乗り越えた……何の壁かは推して知るべし。間もなく和也は、二人と一匹を地平線の彼方に置きざりにして、ユーノスの街にゴールした。因みに行きは歩いて二時間、帰りのタイムは走って20分だった。この記録は誰にも破れないだろう。

「アンタアアア!! 覚えてろよおおお!!!!!!」

女性の叫びが、草原に木霊した…

第15話 修行とレベルアップ（後書き）

いつも読んでくれて有り難う御座います。 ころです。

評価をして貰え、しかもお気に入りになり30人以上も登録して貰えてうれしい限りです。

評価とお気に入り登録が増える度に、飼い猫と一緒に狂喜乱舞しております!!!

もし、誤字・脱字、その他思うところが御座いましたら、お気軽に感想欄に書き込んで下さい。

それではこの辺で、Trapperを読んでくれている皆さんに感謝!!!

第16話 和也とクレア

「ガルフさん、こんにちは」

修行をした翌日、和也は依頼を請けようとユーノスの冒険者ギルドに来ていた、和也はガルフに声をかける。ガルフは、女性職員達が忙しく冒険者の相手をしている中、誰も来ないのか1人暇そうにしていた。

（僕はガルフさんの方が気が楽だけどね）

「おう、カズヤ、仕事か？…そういえばノールからお前の情報届いたぞ」

「へえ、思ったより時間かかりましたね？」

和也の予想では、3日もあればもう届いていると思っていたのだ。

「ああ、それなんだがな、お前さん、ノールで相当依頼をこなしていたんだな。俺も見せて貰ったが、ほぼ雑用依頼だけとはいえ、1ヶ月で184件っていうのは以上だぞ、俺も此处で働いて長いが、初めて見た」

「ア、アハハ…」

ガルフから自分の依頼数を聞かされて、和也のこめかみに汗が垂れる。

「それで、この短期間でこの件数だからな、情報を送るのに、整理に時間が掛かったんだろう。しかし依頼の失敗数が0とは…やるな」ガルフの隣で作業をしていた受付のお姉さんと冒険者が、話が聞かえていたらしく驚愕の目でカズヤを見る。…カズヤの顔を見た受付のお姉さんの頬が赤い。

「い、いえ、雑用依頼ばかりだし、大したこと無いです」

和也が頭を掻きながら言う。

「いや、大した事あるぞ？大抵の冒険者は、所詮雑用依頼だと舐めて掛かって失敗するんだ。恐らくこの依頼数で失敗0はギルドでもトップの成績だ」

「運が良かったんですよ。これからどうなるか判らないし、世界は広い…もっと凄い人は居る筈です」

性格なのか、地球に居た頃の影響か、和也は決して慢心しない。

「ああ、いい心構えだ」

ガルフは和也の慢心しない心構えに、益々気に入ったようだ。

「おつとそうだ、お前さん髪の毛の色『黒』で登録されているが、少し前から変わったよな。どーゆー事だ？」

「ああそれは、ソイルさんの魔法の実験で…その影響です」

和也が恥ずかしそうに言う。ガルフは意外にも普通だ。

「ああ、もしかして最近噂になっている『ソイルカラー』か」

これは例の染髪薬だ。和也がとっさに話を合わせる。

「あ、はい、そうです。『ソイルカラー』は二人で開発したんですが、その時に色が変わってしまつて。僕のは試作品だったのが影響してか、戻らないんですよ」

「そうか、ま、問題は無いな。じゃあ『蒼』で登録しておくな」

「あ、お願いします」

「おう。それで、今日はどの依頼を請けるんだ？」

「ええ…今日は……」

和也が雑用依頼を受けて、約二時間後。和也は依頼を終えて、また依頼を請けようと冒険者ギルドに来ていた。

「ガルフさん、依頼終わりました。まだ依頼ありますか？」

「おう、カズヤ。さすがに速いな！ちよつと待ってる、リストは、つと」

ガルフが探していると、ガルフの隣に居た女性がサツとガルフに渡した。目は色っぽく和也を流し見ている。朝も隣で受付をしていた女性だ。

和也とは目が合わない。

「お、サーシャ…あんがとさん」

ガルフが礼を言い、和也にリストを広げる。サーシャは元の位置に戻った。ガルフがぼそぼそと呟く。

「普段はあんなに気が利く奴じゃないのになあ」

「何か良い事でもあったんじゃないですか？」

ガルフは何も気付かない。和也も何も気付かない。

「そうなんかな？まあいいか。ほれ、カズヤ、どれにする？」

「はい、どうしようかな…」

和也がガルフと依頼リストを眺めていると、ボタン！と、突然ギルドの扉が開かれた。

入ってきたのは二人の冒険者。二人とも金髪で、1人は凛々しい感じの男性、もう1人は気が強そうな女性だった。和也はサツとリストに目を向ける。

二人の冒険者はヨロヨロとカウンターに近付き、受付の女性と話す。「ラルフとクレアのパーティーだ、依頼の品を採ってきた」

「はい、確かに。それでは報酬です」

女性がラルフに報酬の入った袋を渡した。かなり重そうだ。和也が横目で見た。

（凄いな、相当難しい依頼だったのか）

と、二人のうちの女性の方ークレアが和也に目を向けた。和也が慌ててリストに目を戻す。

「……が、ガルフさんっ、この依頼をお願いします……！」

「ん？あ、ああ良いぞ」

「はいっ、では行ってきます……！」

和也が急いで外に出ようとすると、クレアが声をかけてきた。

「あっ、ちよつとアンタ……！西の草原の……！」

「ひ、人違いですううう……！」

和也は一目散に逃げ出す。クレアも追いかけてきた。

「な、何だ？」

ガルフが呆然と呟いた。

和也はユーノスの街を爆走する。しかしクレアもなかなかの健脚の様で、徐々に差は開くものの、和也の逃げ足に辛うじて着いて行っている。

「人違いですって……！追いかけて来ないで下さい……！」

「その蒼い髪の毛とその逃げ足、間違えるはず無いじゃない……！ちよつと待ちなさい……！」

周囲の人達が興味深げに眺める中、二人のチェイスは終わらない。

商業区を抜け、魔法区を越えて、スラムに入る。

「な、何の用ですか!？」

和也が逃げながら叫ぶ。

「いいから止まりなさいよ!!」

クレアも負けずに叫び返す。

（これじゃあジリ貧だ…どうする？）

和也が逃げながら考える。と、何かが後ろから飛んできた。それは和也の頬を掠めると、先にある壁に突き立った。

「……チツ!!」

「つて、ナイフじゃないですかああ!!刺さったら洒落になりませんよ!!」

和也の顔からサアツと血の気が引く。

「大人しく刺さりなさいよ!!こんな美人に刺されたんなら本望でしょ!？」

クレアがさも当たり前のように言う。その言葉に、和也のスイッチが入った…入ってしまった。

和也は少しだけ走るスピードを緩めてクレアに言う。

「はあ!？本望な訳あるか!!美人なら何しても許されると思うな!？タイプじゃねえんだよ性格ブスが!!」

「あ、アンタ誰が性格ブスだって!!」

クレアがムキになり叫ぶ。

（よしっ、距離が縮まっている。やっと疲れてきたようね。捕まえたらどうしてやるうか）

二人はまだ走り続ける、が、2人の距離は後わずか。通りの角を曲がる。二人は再び商業区の大通りに戻っていた。

（あ、後ちよっと!!）

クレアの手が和也に延びる…と、突然足下の感覚が無くなり、クレアは地面を無様に転がった。

「キヤアアアア!!いつ痛…一体何が…」

クレアが転んだ原因を見ると、そこにはバナナの皮が落ちていた。

ふと視線を感じ周りを見る。すると通りを歩く全ての人がクレアをクスクスと笑いながら見ていた。

「…あ…いやっそのっ」

クレアが真っ赤な顔であたふたしている。

と、和也の存在を思い出した。クレアがハツとする。

「そういえば、アイツは!？」

周りを見渡すが、和也の姿は見当たらない、どうやら撒かれた様だ。
「チッ、逃したか…アイツ、なんて名前なのかしら…ギルドで調べるか」

クレアが呟く…と、どうも自分の後ろ側の人達が騒がしい。どうやら笑っているみたいだが。

「?…何なの?ま、良いわ。ギルドに戻るか」

クレアはとっこいしょっと立ち上がり、冒険者ギルドに戻った。
戻る間も、何故かクスクスと笑われるクレアだった。

「…ただいま…逃がしたわ。なんて逃げ足なのよ…」

ギルドに戻ると、ラルフがテーブルに座りクレアを待っていた。その手には酒を持っている。

「お帰り。しかし何で追いかけるんだ?」

ラルフがクレアに尋ねる。

「何でって…なんか気になるのよ…」

「…ほぅ」

「なによ…そんなんじゃないんだからね」

と、二人で話していると、ガルフが声をかけた。

「よおクレア!!お前さんバナナの皮で派手に転んだんだった?」

「な!!何でそれをつ!？」

クレアが顔を真っ赤にしてガルフに聞くと、ガルフがニンマリとク

レアの背中を指差した。

ラルフが酒を口にしながらおもむろに見る。

「ブッ！！」

ラルフが酒を噴いた。

「うわっ！ラルフ何なのよ！？…ん？…これ…は」

流石に気になったのか、クレアが背中に手をやると、何かが手に当たると、それをベリツと掴み取り前に持つてくると、一枚の紙だった。…クレアの手が震える。そこには

『バナナの皮で転ぶ駄目冒険者』

と、書かれていた。

クレアは転んでから今剥がすまで、ずっとこれを背中に張り付けていたのだ。皆が笑っていた原因が判明した。

「あ、あんの野郎おおおお！！」

クレアが絶叫する。その顔は、怒りか、はたまた羞恥なのか真っ赤に燃えていた。

「しかし、ユーノスで1、2を争う実力者に…あいつもやるなあ」
ガルフが感心したように呟いた。

「が、ガルフ！！あいつの名前は！？」

クレアが荒々しくガルフに問う。

ガルフはニヤリと口元を歪め、答えた。

「あいつの名前はカズヤ・ホシナ…現在223の依頼を請け、全てクリアしている男だ」

第16話 和也とクレア（後書き）

どうも、くろです。

今日は、この後17時から仕事の為にこの時間になってしまいました。申し訳ないです。

出来れば、今日の深夜にも次話を掲載したいなと思っています。

それでは、これからもしょしくお願いします。Trapperを読んでくれる皆さんに感謝！！

第17話 アクアベル？

和也は西の草原の森に来ていた。

「えーと、今回は『アクアベル』って霊草を採取するんだよな。たしか、この森の奥、フォール山に近い泉に在るんだっけ…急がなきゃ、っと」

と、和也は徐に右手を右に向けた。右手から氷の槍が飛び出す。
「グアウー!!」

氷の槍が飛んでいった先の茂みから、魔物が呻いて倒れ出る。

氷の槍は魔物の胸に突き立っており、どうやら一撃で死んだようだ。
「残念だったね、もうこの森の魔物にも慣れたよ」

和也は魔物に言っていると、そのまま森の中に進んでいった。

クレアとのイザコザから3日が過ぎていた。和也はこの三日間、クレアに遭わないように、西の草原の森でずっと修行をしていた。そして森の魔物の攻略法が解り、倒すのに苦労しなくなった和也は、4日目の今日は何か依頼をしようとギルドにやって来ていた。

「ガルフさんこんにちは」

「おう、久しぶりだな、ってもまだ三日か」

「ですね。クレアさんはどうしてます？」

「ああ、あいつか。昨日までは和也の事を搜していたみたいだが、今日は何か依頼を請けていたぞ？ギリギリのタイミングだったな」ガルフの言葉に、和也はホツとした。

「良かった。それで今日は、何か依頼を請けようと思って来たのですが。何があります？」

和也の話を聞き、ガルフは真面目な顔になる。

「おう、そうだな…確かお前さん、採取依頼の経験あったな？」

「はい、ノールで6回と、此处で二回ですね。それが何か？」

「なら経験数はクリアだな、人格も問題なし」

「え…何ですか？」

「ああ、大至急請けて貰いたい依頼があるんだ。依頼主からは特に人選の要望等は無かったが、これは俺からの指名だと思ってくれ」ガルフの台詞に、何か重大な事だと思い、和也の顔が引き締まる。

「…請けます。どんな依頼ですか？」

「おいおい、まずは依頼内容を聞け。別に断っても問題無い」

「いえ、ガルフさんの顔には本当に緊急の依頼だと書いてある。その依頼に僕を指名してくれるなら、僕はその期待に全力で応えるの

みです」

「そうか…それなら頼む…」

（コイツにもこんな一面があったんだな）

「はい、何を採ってくれば良いんですか？」

和也の問いに、ガルフは一冊の図鑑を開きながら答える。

「靈草図鑑？」

「ああ、和也には急いで西の草原の森にある靈草『アクアベル』を採ってきて欲しいんだ」

和也が、開かれたページを読む。

「なになに…『アクアベル』は、清らかな泉の近辺に生える靈草で、花びらの色は淡い水色。花開くとき、清らかな鈴のような音が鳴ることから『アクアベル』と呼ばれるようになった。観賞用としての価値があり、また、靈草としての効能も素晴らしく、色々な病気に効く万能特效薬として重宝される。その観賞価値と効能から、かなりの価格で取り引きされており。一般人には手に入ることがないと」

「ああ、で、コイツは西の森の、フォール山近くの泉にあるんだ。実は依頼者の身内が病で死にそうなんだが、『アクアベル』ならその病を治すことが出来ると言う事で依頼が来た。これは人命がかかった依頼だ、実力があって、信用できる奴じゃないと託せなくてな」

「解りました…じゃあ直ぐに戻ってきますね！！行って来ます！！」

ガルフの言葉に、和也は直ぐに返事をし、きびすを返すとギルドの外に駆けていった。

「今回はギルドの進退に関わる…頼んだぞ…和也」

ガルフがぼつりと呟く。と、それを聞いた隣の受付の女性が首を傾げた。

「ガルフさん、進退に関わるって…？」

「ああ、これを読め…決して声に出すなよ？」

そう言っただけでガルフが女性に今回の依頼書を渡した。女性が読む。

「えーっと、依頼人が…っ！！ガ、ガルフさんっ！！これはっ！

！」

「ああ、そういう事だ……」

と、言う事で今和也は西の草原の森に来ている。

「泉はまだ先か…っと、今度はライノベアーか」

和也の事前からライノベアーが現れる。和也はナイフを鞘から抜き、魔法で身体能力を上げる。

ライノベアーが和也に襲いかかろうとした身体に力を入れた瞬間、ライノベアーの眉間にナイフが突き立っていた。

「その、攻撃する一瞬に隙が出来るんだよね」

和也はそう言いながら、ライノベアーからナイフを抜く。

「うん、マナの取り込みも慣れてきたな」

そう、今の魔法を使う時に、和也の身体は銀色に輝いてはいなかった。マナの取り込みの調整が出来ている証拠だ。

「…そうだ、コイツには罔になつて貰おう」

和也は呟くと、新しく買ったロングソードを抜き、ライノベアーを切り刻む。そこには、大きな血だまりが出来た。

「よし、この血の匂いで魔物がおびき寄せられる筈だ。その間に泉に行こう」

和也はロングソードに付いた血を拭くと鞘に収め、足早にその場を去った。

ガルフは、ギルド内でそわそわと和也の帰りを待っていた。今ギルドは、テーブルで酒を飲んでいる冒険者がちらほらと居るだけで暇

そうだ。

「和也はまだ…って、時間的にまだ森の入り口か」

実は既に森の中程まで進んでいたのだが、実際の和也のポテンシャルを知らないガルフには知る由もない。

「依頼終わったわよー！！って、ガルフ何か心配事？」

ガルフが不安顔でいると、入り口からラルフとクレアの二人が入ってきた。どうやら依頼を終えて戻ってきた様だ。

クレアが訝しげにガルフに尋ねる。

「おお、二人か。いや、ちょっとな…」

クレアが尋ねるが、ガルフは言葉を濁す。

「なによ？」

「いや、カズヤがな…」

「カズヤだって！？」

ガルフがしどろもどろに言うと、クレアが和也の名前に反応する。

テールで飲んでいた冒険者が大声に訝しげな目を向けたが、クレアの顔を見るといつもの事かとテールに向き直る。

「カズヤって、あのカズヤだろ？どうしたんだ？」

ラルフが首を傾げて尋ねる。

「ああ、今急ぎの依頼でアクアベルを探りに行って貰ってるんだが、まだ二時間しか経っていないし、まだ森の入り口辺りだろうに、どうにもやきもきしちまってな」

ガルフの話聞き、クレアが鼻で笑う。

「ハンツ…ガルフともあるう物が、情け無いわね。気にしてもしょうがないわよ。それに…アイツの事が解ってないわね。アイツなら今頃、森の中間地点辺りにはたどり着いてる筈よ。アクアベルで急ぎって事は、人の命がかかってるんでしょ？アイツが急いでるならガルフが予想してるより遙かに早い時間で帰ってくるはずよ。」

クレアが自信満々に言う。ガルフは一瞬惚け、再起動して笑い出す。「ガハハハ！！そうだな！！この依頼を請けた時のカズヤの顔は、そういう顔だったな！！しかしクレア…お前さんやけに詳しいな」

ガルフがニヤニヤと言う。

「バツ…だからそんなんじゃないわよ！！ただ、アイツの依頼歴を見て何となくそう感じただけよ！！」

依頼歴とは、ギルドで見ることが出来る、それぞれの冒険者が請けた依頼が全て載っているファイルだ。そこには、依頼書とは違い、その依頼の成否から、どうしてその依頼を出すことになったかの背景まで細かく書いてある。

和也のこれまで請けた依頼は、雑用依頼の一部以外はほぼ緊急性のある依頼だったのだ。そして和也は緊急性のある依頼だと、全て依頼達成期間より大幅に時間を短縮してクリアしていた。

「ほう、カズヤの依頼歴を見たのか。確かに俺もアレを見たからカズヤに任せたんだが」

「ええ、凄かったわ。今のアタシ達にもあそこまで出来るかどうかは判らないわ」

「ああ、確かに」

クレアの言葉に、ラルフも頷く。

「お前さん達にそこまで言わせるか。なら大丈夫だな！！」

ガルフがガハハと笑った。

「カズヤの事は安心して待つとして、お前さん達は依頼の完了処理だったな？今処理する」

「ええ、お願い」

ラルフとガルフが処理をしているなか、クレアは何か考え事をしている。

「クレア、終わったぞ」

「ええ……ガルフ、済まないけどここで待たせて貰うわ」

「ああ、そりゃ構わんが、どうした？」

ガルフが意外そうに聞くと、クレアはニヤリと笑い…

「アイツが戻ってくるのを待ち伏せするわ!!とりあえずビール!
」

テーブルにどっかりと座り、盛大に言い放った……

第17話 アクアベル？（後書き）

深夜に更新出来るかもと書いておいてこの様な時間になってしまい
申し訳ないです。

もしかしたら次もこの位か、もう少し遅くなるかもしれませんが、
どうか見てやって下さい。

それではくろでした。T r a p p e rを読んでくれる皆さんに
感謝！！

第18話 アクアベル？

クレアが、ギルドで話していた頃…

「うう！…なんか悪寒が…」

和也は何かの予感にブルリと身を震わせていた。

「っと、泉まではもうすぐかな…」

ライノベアーの死骸を匭にしたのが功を成したのか、此処までは魔物に襲われなかった。

「ん？…この気配は…」

和也が何かの気配に気付いて立ち止まる…と

「っ！…上か！…」

突如上空から襲いかかる者がいた。

「って、なんだコイツ！…見たこと無いぞ！…」

木から飛び降り現れたのは、猿にそっくりなのだが、その爪と牙が明らかに大きく鋭い。よく見れば、二つ眼の他に額にも眼がある。

魔物は地面に着地した反動を利用して、和也に襲いかかる。

「くっ！速いっ！…」

和也は辛うじて避けるも、その顔は汗でびっしょりだ。

和也に避けられ、通り過ぎてしまった魔物は、そのまま木に跳び移り、方向を和也に修正し飛びかかる。

「お前は猿か！…って、猿か…」

和也はアホなことを言いながら避ける。が、魔物のスピードに、完全には対応しきれないのか掠り傷が増えていく。

偶に避けながら併せるようにナイフを振るうが、余裕で避けられてしまう。

「ならこつちも！…」

和也が身体能力を魔法で強化し、魔物と交叉する。

「でっ！！まだ足りないの！！」

しかしまだ魔物の方が速い様だ。蒼い髪が数本飛ぶ。和也は炎を放

ち距離を取った。

「しょうがない、今回は修行じゃないし人の命がかかっているんだ
…本気で行くぞ」

和也のスイッチが入り、目が鋭くなる。

魔物が和也の変化に戸惑うも、意を決して襲いかかった。素早く木と木を跳び移り、和也の死角から爪を振るう。が、和也はその場にしゃがみ込みやり過ごす。魔物が通り過ぎ、向きを変えようと木にとりついた瞬間、「ガチリ」と何かが作動する音が鳴る。

魔物が他の木に跳ぼうと力を入れると、突如木の左右から、魔物を抱き込むように鉄の刃が生えた。

次の瞬間「バチン」と音が鳴り、魔物が輪切りにされた。

「よし、やっぱり罫を使うと魔物は簡単だよな」

眩きながら、和也は森の奥へ消えていった。

先の魔物の出現に、流石に森の奥の方で、迂闊な行動は出来ないと和也は思い警戒しながら歩いて行く。

「フオール山に近付く程、魔物も強くなるのか。回復魔法は無いし、気を付けないとな」

そう、和也が言う様に、この世界には魔法はあっても回復魔法は無い。回復薬も、先のソイルの実験の時に説明したように、疲労や病は回復しても、傷は回復しないのだ。

「ソイルさん早く造れるようにならないかな…」

和也が自分勝手な願望を呟きながら歩いていると…

「ん？川の流れる音？」

…水の流れる音が聞こえてきた。

和也が音のする方に行くと、小川が流れていた。

「この川はどこに流れるんだろう？草原には流れてないし、地下にでもいつてるのかなあ？」

首を傾げながら呟いた。

「あ、もしかしたら泉から流れているかも…上流に行ってみるか？」
この森には幾つか泉があり、源流がその一つじゃないかと考えた和也。

「よし…行こう」

行動は決まった様だ。

和也が上流に向けて歩いていくと、視界の先に人が映る。

「ん？あれは？」

和也が近付きながら注視すると、どうやら皆赤い服を着ているようだ。手には武器も見える。

「あんな所で集団で何やってんだ？あの人達もアクアベルを探しに来たのかな？」

どうやら女性の気配はしないようで、和也がそのまま歩いて行く…と「…ゲッ！！人じゃない、魔物だっ！！」

その声に気付き、振り返る。

その魔物は、トカゲの顔をした人型の魔物『リザードマン』だ。赤い服だと思っていた物は、リザードマンの鱗だった。

和也に気付いたリザードマン達は、一斉に動き出した。

「これはやばいっ！！」

和也は驚いた為ひとまず逃げようとしたが、出遅れてしまいリザードマン達に囲まれてしまった。

和也はとっさに自分の周囲に罾を張る。リザードマン達が一斉に和也に向けて踏み出すと、「カチリ」とリザードマン達の足下から槍が飛び出す。が、リザードマン達は飛び出した槍のある者は避け、ある者は手に持っている武器で弾く。若干掠った者も居たが、槍は鱗を削る物の、ダメージにはなっていないかった。

「くそっ、コイツ等レベルが違う！！」

流石に、森の中でもフォール山の麓近くに生息している為か、草原近辺にいたサーベルウィングやライノベアーとは格が違う様だ。

「このまま囲まれているのはまずい…」

和也はリザードマンの囲みの一体に当たりを付けて斬りかかる。リザードマンは和也のナイフを難なく弾き、お返しとばかりに斬りかかる。が、斬りかかろうと剣を振りかぶった瞬間、腕が何かに止められる。その隙に和也は囲みから抜け出した。

リザードマンの腕を止めていたのは地面からはえた鎖だった。ナイフが剣とぶつかった瞬間に地面から鎖が生えて腕を拘束するという、和也がナイフをスイッチにして仕掛けた罠だ。

（取り敢えず一対多はやられる。1対1にしないと…）

和也は、リザードマン達に後ろを見せて走り出す。リザードマン達も、和也を追い走り出した。

すると、やはり個人で差があるのか、段々とばらつきが出てくる。

「よしっ、これで次は」

和也は後ろを振り向き、リザードマン達を確認すると、罠を仕掛けていく。

まず最初に来た二匹は落とし穴に嵌めた、嵌ったリザードマンは出ようとしますが、穴の底には幾つもの地雷が仕掛けており、穴から爆発音と共に火柱が上がる。二匹のリザードマンは、爆発に耐えきれず粉々になって空を舞った。

次に近付いてきたリザードマンは、木に仕掛けられていたワイヤーに引っかかった瞬間「バチリ」と電流が流れ、焦げ臭い匂いと共に絶命した。

「よし、やっぱり電撃は効果ある！！次…！！」

和也が次の罠を仕掛けようと振り向くと、火の玉が目の前まで飛んできていた。和也は慌てて魔法で障壁を作り出し防ぐが、近すぎたためか完全には防げずに熱で左腕が焼かれる。

「ぐっ！！」

幸い致命傷にはならなかったが、左腕には酷い火傷が残った。よく見ると、リザードマンが炎を吐き出したようだ。次に飛んできた炎を避けた和也は

「このお！！」

リザードマン達に手をかざし叫ぶ。三匹のリザードマン達は、突如下から飛び出た鉄の柵に囲まれる。と、上空からゼリー状の液体が降ってきて、三匹全員にかかる。

「炎よ！！」

そこに和也が魔法を撃ち込んだ。炎が着弾すると、柵の内側は物凄い炎に包まれた。

「ナパームだ、これなら効くだろ」

ナパームとは、ナフサという主燃料剤に、ナパーム剤と呼ばれる粘着剤を混ぜたもので、900〜1300度というきわめて高温で燃え上がる。ナパーム弾に使われているのはこれだ。

三匹のリザードマンは、のたうち回り力尽きた。

「よし、後一匹!」

残るリザードマンは一匹、和也は立ち止まり、ナイフを鞘から抜きながら振り向いてリザードマンを待ち構える。

追い付いたリザードマンは、そのままの勢いで和也に斬りかかる。

和也は魔法の障壁を使いリザードマンの斬戟を逸らし、ナイフで斬りつけた。しかし、やはり鱗でじやまをされる。

「ちっ、刃こぼれた…ただけ硬いんだ…よ!」

リザードマンが口を開き炎を吐こうとするも、和也がとっさにリザードマンの下顎を蹴り上げて防ぎ、距離を取る。

和也はナイフをしまい、剣を抜き放つ。

リザードマンが再び和也に斬りかかる。が、その腕が止まる。

「同じ罠に嵌るなよな!」

腕をワイヤーに捕られたリザードマンに、次々と新たなワイヤーが飛び、その身を拘束した。

「じゃあな」

和也は呟くと、拘束されたりザードマンの口の中に剣を突き刺した。

「これで全て、かな」

和也が剣を鞘に納めながら呟き、息を吐いた。

「ふう…よし、進むか」

再び和也は小川の上流に向かい歩き出した。

和也が小川の上流に辿り着くと、そこには小さな泉が湧いていた。

「ビンゴ! やっぱり泉から流れていたんだな…」

和也が泉に近付く。泉は小さいながらも、その付近には清涼な空気

が流れており。この森の嫌な空気が、此処には無い。魔物は、此処の清涼な空気が苦手なようで、魔物が此処に居た形跡も気配さえも無い。

「空気が綺麗だ…」

と…

「リイン」

鈴の音の様な音が聞こえた。

「ん？」

和也が音のした方を見ると、透明感のある水色の花びらの花があった。

「まさか…これが…」

「リイン」

と、また音を発しながら、一輪のアクアベルが可憐に花開く。まるで水の妖精が舞うかのごとく、鈴の音と共に花開くアクアベルに和也が感動を覚える。

「これがアクアベルか……綺麗だ……でも…」

少しの間だけ、その姿に見入ると。和也はアクアベルを摘んで腰の袋に丁寧にしたった。

「さて…と、急いで帰るか」

和也は、此処にはもう用は無いとばかりに魔法で身体能力を強化して走り出す。森を出る途中魔物と遭遇するが、あとはユーノスに帰るだけなので、虎バサミやワイヤー等の罠を使い魔物の足を止め、素通りして行った。

草原に出ると、夕日が草原を照らしていた。森の中では薄暗く時間の進み具合が判らなかったが、大分過ぎたようだ。

和也は森を脱出して、草原に出てもスピードを緩めず、むしろ魔物も弱く障害物が無くなった分、更に速度を上げて走った。

この間、クレアと恐竜の様な魔物に追い掛けられた時よりは遅かったが、それでもかなりのタイムでユーノスに辿り着いた。

ユーノスに着いた和也は、その足で冒険者ギルドに行き、ガルフにアクアベルを渡す。

「ハア…ハア…ゲホツ…！ゲホツ…ガルフさん、アクアベルです！早く依頼人に渡して下さい！！」

「力、カズヤ…！あ、ああ解った…！ちょっと待ってる…！」

ガルフはアクアベルを渡されると、急いでギルドを飛び出した。

（ガルフさんが直接届けるなんて珍しいな？まあ、よっぽど急ぎなんだろう…間に合って良かった）

疲れた為か、余り深く考える事をせずに和也はカウンターに突っ伏した。

「やっぱり速く帰ってきたわね。しっかしあの時間に出てこんなに早く帰ってくるなんて、普通ならあと4時間はかかってるわ」

と、依頼が完了して気が抜けたのか、和也がカウンターで突っ伏している、後ろから女性に声を掛けられた…クレアだ。

和也はビクリと身を震わせて、恐る恐る振り返る。

「ク、クレアさん…」

「疲れた様ね、流石に今日は何もしないわよ」

クレアが腰に手を当てて言う。

（『今日は』…って事は…次には何かあるのか…？な、何があるんだ…！？）

「あ、有り難う御座います」

和也はそう言いながらも、心の中で恐怖した。

「それにしてもホント早かったわね。アタシ達でも無理だわ」

クレアが、あまりの早さに若干呆れた様子で言う。

「ひ、人の命が掛かってましたからね。でも大した事じゃありません…だ、大事なのは早かった事じゃなく、間に合った事です」

和也の恐る恐る呟いた言葉に、クレアはハツとしてバツの悪い顔になる。

「そうね、そうだったわ…気付かせてくれて有り難う、カズヤ」

言い過ぎたかと、産まれたての子鹿の様にビクビク震えていた和也だが、クレアの言葉にホツとする。

「それじゃあ改めて、アタシの名はクレア・リーフェよ、宜しくね」

「ラルフ・ストスだ、宜しくな」

クレアとラルフが名乗り、手を和也の前に出す。

「カズヤ・ホシナです…」

和也は名乗ると、ラルフと手を握り握手する。クレアから目を逸らしている。クレアはムツとしながら、無言で手をさらに出す。

「……………ク、ククククレアさんも宜しく…」

和也はクレアの圧力に耐えきれなかったのか、ビクビクとクレアに言い、ブルブルと震える手でちょこんとクレアの指を軽く握った。

「……………まあいいわ。宜しく」

ガルフはアクアベルを手に、ユーノスにあるとある屋敷を訪れていた。その屋敷の中の、一つの部屋に入ると、高そうな椅子に座る1人の青年がいた。

「それでは、これがアクアベルです」

「おお！！早かったな！！流石はギルド」

「…恐れ入ります」

ガルフは、男の前で膝を突いた姿勢で話している。

「これで、父上の病も治せる…」

青年は感慨深く言う。

「間に合って良かったです」

ガルフも安堵した顔で言った。

「ああ、ところでコレを持ってきた冒険者の名は？」

ふと思い立ったのか、青年がガルフに訪ねた。

「はい…彼の名はカズヤ・ホシナ。今急激に伸びている冒険者です。今回の依頼も、私が予想していたよりも大幅に早くアクアベルを採ってきました。人格も申し分なく、今、私が一番信頼している冒険者です」

「…カズヤ・ホシナ…か」

ガルフの話を、青年はしっかりと覚えたという顔をして頷いた。

「それでは、これで失礼いたします。『ライア・フォルス・ダクラマクラ』皇太子殿下」

第18話 アクアベル？（後書き）

遅くなつてしまい申し訳ないです。 ころです。

次への布石として、出来る限り丁寧に書こうと思い、じっくり書いていたら遅くなつてしまいました。

とりあえずこれでアクアベルは終了です。 いかがでしたか？

次話から新展開になるかな？ って感じです。 これからもどうぞ宜しくお願いします。

それでは、T r a p p e rを読んでくれる皆さんに感謝！！

第19話 北を目指して

和也は猪の様な魔物の突進を避けながら、その首筋にロングソードで斬りつける。

魔物はそのまま明後日の方向に突進していくと、ガクツと膝を落とし動かなくなった。

「ふう、まんま猪だったな…」

和也は呟きながら、剣の血を拭い鞘に戻す。

「えーと、このまま北だな…」

和也は、ユーノス北の街道を歩いていく。

「王都かあ…どんなどころかな？」

街道を歩きながら、王都への妄想を膨らます。空では太陽が輝いていた。

第19話 北を目指して

アクアベル採取依頼が終わって一週間が過ぎていた。

今日も和也は依頼をして過ごしている。

「キラーフイッシュの捕獲成功つとー!!」

和也の横には網に捕らえられた大きな魚？が居る。

その大きな魚の胴体は、鮮やかな黄色と緑色のグラデーションを描いている。魚には違いないのだろうが、その胴体には人間の様な足が生えていた。

今回は、ユーノスの東にある湖で、『キラーフイッシュ』という魔物の捕獲依頼を行っていた。

湖に着き、まずは釣り糸を湖に垂らす。と、キラーフイッシュがヒットしたのだが、その臂力で釣り糸が切れてしまった。釣り糸が切れた反動で和也が尻餅を付く。

「イデッ!! くっそ、流石に魔物は釣れないか…」

和也が湖を見ながら呟く。キラーフイッシュは和也を馬鹿にしているかの如く、パシヤンと飛び跳ねた後、背びれを和也に見せつけるように水面から出して悠々と湖を泳いでいる。それを見た和也の目つきが鋭くなる。

「…………… 女性恐怖症を舐めんなああああ!!」

和也はキラーフイッシュにとって意味不明な叫びをあげると、手を湖に翳した。

バチバチバチバチバチッ!!

カズヤの手から魔法による雷撃が湖に降り注ぐ。湖の水面に雷が走った。

水面を泳いでいたキラーフイッシュは、マトモにそれを浴びてしまい、ぷかりと水面に浮かんだ。

和也がハッと我に返った。

「あ……………やりすぎた？」

湖には小鳥の囀りだけが残された。

あの後調べてみたところ、キラーフイッシュはどうやら気絶しただけのようで、和也はホッとした。

「それにしても、何で足があるんだよ……」

和也がキラーフイッシュを見てまず驚いたのが、その足だ。

「魚だろ？カエルじゃないんだから……って、もしかして足で泳ぐのか？」

和也の頭の中が疑問符で埋まる。

和也は極力気にしないようにしようと頭を振り、キラーフイッシュを網で捕らえて担ぐ。しかし大きすぎる為、引きずる形になった。

「さて、ユーノスに帰ろう」

キラーフイッシュを、ズルズルと引きずりながら和也は歩き出した。

今和也は、湖からユーノスへと東の街道を歩いている。

「でも、確か依頼者はコレを食べるんだっけ？」

和也が想像を膨らます。

「…足か？足を食べるのか？実はこの足がとてつもなく美味しいのか？？」

和也がチラリとキラーフイッシュを見る。その人間そっくりの足がぐったりとしている姿が生々しい。

「そ、そんな訳ないよな…魚だもんな、足じゃなくて身の方を食べるよな、そうであってくれ…」

和也が冷や汗を流しながらブツブツと呟いている。

「…ん？」

ふと気付くと、キラーフイツシュが気付いたようだ。

「おとなしくしてろよー」

和也の言葉むなしく、キラーフイツシュはその足をバタバタと動かす。と、どうやったのか、スルリと網を抜け出して、その足で走って逃げていく。

「うわっ！！気色わるー！！ってか逃げんなー！！」

和也が逃げるキラーフイツシュに手をかざすと、突如キラーフイツシュの頭上から鉄製の檻が降ってきて、キラーフイツシュをその中に捕らえた。

「…まったく」

和也は呟きながらキラーフイツシュに電撃を浴びせた。再びキラーフイツシュは気絶して、その足はぐったりと力をなくす。

「ああ、早く帰ろう…」

和也もグツタリだ。

和也はキラーフイツシュの足を縛ってから、再び網に捕らえると急ぎ足でユーノスに帰った。

「ガルフさん、ただいま戻りましたー」

和也は言いながら、冒険者ギルドのカウンターにいるガルフに近付いていく。ギルドの受付の視線が全て和也に向けられる。実はアクアベルの一件以来、依頼の詳細を知っているギルド内の職員から、和也は王族の依頼をクリアした、このギルドの英雄として見られていた。

その影響が、女性職員達の和也を見る艶めいた熱い視線に現れてい

る。しかし興味の無い和也は気付かない。

「おう、ご苦労さん。そのキラーフイッシュを見る限り、どうやら成功のようだな」

ガルフが、チラリと和也が引きずっているキラーフイッシュを見ながら言う。

「ええ、でも途中で走って逃げようとしたり、大変でしたよ」
和也がボヤいた。

「は、走って？ハハ…それは大変だったな…」

和也の言葉に、ガルフはキラーフイッシュが走って逃げる姿を想像し、引きつった笑みを見せる。そのこめかみには汗が一滴垂れた。

「まあ、無事に成功したので良いです」

和也はこのキラーフイッシュの末路を…今回の依頼者がキラーフイッシュのどの部分を食べるのかを想像しないようにして言う。

「そうだな…ほれ、報酬だ」

「はい、確かに。じゃあ今日はこれで帰ります」

和也は、ガルフから報酬を受け取ると、挨拶をして足早にギルドを去る。

「ああ、お疲れさん。またな」

ガルフが和也の後ろ姿に手を振りながら言った。

翌日、宿屋で朝食を食べた和也は、宿屋を出ると一直線に冒険者ギルドに向かった。

「おはよう御座います、ガルフさん。何か依頼はありますか？」

早朝のギルドは冒険者の数が少なくカウンターもガラガラだった。女性の受付達が和也を熱い目線で見つめる中、和也はそれを、係わると巻き込まれるかと思いきやスルーして、一直線にガルフの元に向かった。女性職員達がガルフを睨みつけた。

「まったくお前さんも…」

ガルフが横目で女性職員達を見ながら呟くが。

「え？何か？」

「いや、何でもない」

和也はやはり何も気付かない。ガルフも気を取り直して和也に話す。
「依頼だったな…カズヤ、お前さん王都に行かないか？」

「へ？王都？王都って、ここから北の街道を真っ直ぐ北に3日の位置にあるんですよね？…何でまた」

ガルフの提案に和也は訳が分からずキョトンとしている。

「ああ、お前さんに指名依頼が来たんだ…王都からな」

「王都から指名依頼…」

和也は驚きながら考え込む。

「…わかりました、王都に行きます」

「すまん、助かる…それじゃあ準備が出来次第、王都のギルドに向かつてくれ」

和也は頷くと、ギルドを立ち去った。

「まさか、アクアベルの依頼の影響から、王族から直接和也に指名依頼が入る事になるとは…」

和也がギルドをでた後、ガルフがぽつりと呟いた。

和也は、商業区で王都への旅に必要な食料等を買い込むと、今までお世話になっていたソイルに挨拶をして、ユーノスから北の街道に出た。

「北に歩いて3日か…こっちに来たばかりの頃だったらもっと掛かっていただろうな…」

街道を眺めながら和也は呟いた。

「…よし、行こう！！」

と、ここで冒頭に話が戻る。

街道に出てからの6時間、先の猪型の魔物に襲われた以外は、特に何もなく此処まで歩いてきた。

「この街道にも魔物が出るのか…さっきみたいな奴なら問題は無いけど、何がでるか解らないから注意だけはしておこう」

しかし、それからは魔物が遠目には現れても、こちらに気付いたり特に襲われることもなく、順調に街道を進み、時間は過ぎていった。「そろそろ野営の準備か…ソイルの話だと確かこの辺りに…っと、あった」

ソイルから聞いた話だと、この北の街道沿いに、何力所か川が流れている箇所があるとの事だった。ここなら水の補給に困らないし、どの水場にきたかで、大体どのあたりを歩いているかも判断できるからと、野営スポットとして勧められていたのだ。

「うん、一力所目だから、初日は順調に来たって事かな。さて、準備するか」

和也は其処に簡易テントを張り、石を組んで竈を作る。そして枯れ木を集めてから、魔法で火をおこした。そして周囲に、防犯用の罠を設置して完了だ。

「よし、準備完了!!」

そう言うと、和也はユーノスで仕入れた干し肉を火で炙ってからかじる。

「ふむ、なかなか悪くない…」

干し肉と果物を食べて早々に食事が終わる。

「ま、ご飯はこんな物かな。…おっ」

ご飯を食べ終えてふと、空を見上げれば、この世界に来たときに見た幻想的な星空が広がっていた。

「うん、たまにはこういうのも良いな。自然が気持ちいいし……何より女性も居ないし」

そのまま仰向けに倒れ、しばらく星を眺めた。

……こうして和也の王都への旅は、満天の星空の元、その一日目を終えた。

第20話 王都へ

「ハア、良い天気だなあ」

和也は、馬車に乗りながら空を見てのんびりと呟く。

「カズヤ君、王都にはもうすぐ着くよ」

御者台から男性が和也に声を掛けた。

「あ、はい。クライフさん」

和也は返事をして、再び蒼穹の青空に目を向けた。

第20話 王都へ

北の街道を歩いて二日目、和也は今日も王都を目指している。

「あ、またあの猪型か…この辺りは多いのかな？」

和也が、遠目に見える猪型の魔物を見てのんびりと呟く。猪型は土煙を上げて走っている。

「…あれ？コッチに来てないか？」

和也が段々大きくなる猪型の魔物の姿を見て、凝視する。

「…つて、やっぱり来た…」

そのまま魔物が和也に突進してくる。が、和也は特に動くことなく魔物を見ている。

魔物は動かない和也の事を力もだと思い、さらにスピードを上げた。その突進を止めるのはもはや至難の技だろう。

が、和也の前方5mまで来たところで、突然猪型の魔物の姿が轟音と共に消えた。

「猪突猛进、ちよろいもんだね」

和也が暢気に呟く。見ると、和也の5m先には大きな落とし穴が空いている。猪型の魔物は落とし穴に落ちていた。魔物の嘆きが聞こえる。

「さて、先に進もう」

言いながら和也は、落とし穴を素通りして街道を進んだ。

それから2時間程歩いていると、また前方に土煙が見えた。

「またあの魔物？」

和也は呟きながら眺める。

土煙は段々近付いている様だ。しかも先程よりも規模が大きい。

「え…もしかしてヤバイ？」

和也は若干腰が引ける。いざという時のために逃げる体制をとった。が、さらによく見ると、土煙は魔物ではなく馬車の物だったようだ。

「…追われてるのか？」

冷静になってよく見ると、先頭の馬車は後ろから来ている馬車に追

われている様だ。和也は助けるべきか考える…

「うーん、大概この手の物を助けたりすると、厄介な事に巻き込まれたりするんだよなあ…」

和也が考えているうちに、馬車は20m程の距離まで近付いていた。「！！よしっ、助けよう！！」

和也が、先頭で追われている馬車の御者を確認してから決めた。

和也が街道の脇に寄って、馬車を視界に入れる。右手は地面に向いていた。

先頭の馬車が、土煙を上げながら和也の前を通り過ぎる。

「今っ！！」

和也が罾を設置する。

先頭の馬車を追っていた後ろの馬車が、和也の横を通り過ぎた時「バチン」と、何かが切断される音が鳴る。タイミング良く罾を発動させた事により、馬車と馬を繋いでいた綱だけを切ったのだ。

綱が切れ、馬車は地面を挟みながら止まる。馬だけが重りが無くなり元気に走り去っていった。

次に和也が止まった馬車に手を翳すと、金属製の檻が降ってきて馬車を閉じ込めた。

「はい、終わりっ」

和也が呟く。先程逃げていた馬車は、追ってきていた馬車の様子がおかしい事に気が付いたのか、スピードを落としてこちらに戻ってくる。

檻に囲まれた馬車から数人の男がヨロヨロと出てきた。どうやら馬車が止まった衝撃で、馬車の中でどこかぶつけた様だ。

「いつてー、一体何が…どうなつてんだコリヤあ！！」

出て来た男達の1人が、檻に閉じこめられている現状に気付いて叫ぶ。

「それで、おたくらどちら様？」

和也が男達に聞くと。1人の男ががなり立てる。

「ああん！！何だデメエは！！いいからこっから出せや！！」

男は話を聞かない。和也が困っていると、後ろから声がかけられた。
「その男達はこの近くに根城を持つ冒険者ですよ」

「ん？あなたは？」

和也が振り返る。どうやら男は、逃げていた馬車の持ち主の様だ。
直ぐ近くに先ほどの馬車がある。

「私は、王都で商売を営んでいる『クライフ・ガープ』という者だ。
どうやら君が助けてくれた様だね。すまない、助かったよ」

クライフが和也に頭を下げる。和也は慌てた様子で手を振り答える。

「あ、頭を上げて下さい！！あ、僕はカズヤ・ホシナです。そんな
大した事はしてないですし、気にしないで下さい！！」

「しかし……」

「いいですからっ！」

和也の態度で、ある程度の和也の人間性が解ったのか、クライフは
頭を上げた。

「分かった。しかし、いつかこの恩は返させて貰うよ」

「はあ」

「ところでこの檻は一体？」

和也が納得しないながらも頷くと、檻が気になったのか和也に聞く。
和也が必死でこまかす。

「いや、何だか馬車が止まったら、丁度タイミングよく降ってきた
んですよ！！空で大きな鳥が運んでたんですかね？いや、僕もビツ
クリしました！！」

「そ、そうか……」

和也のまくし立てるかのような説明にクライフはタジタジだ。

「はい……」

和也は勢い良く答える。しかしその背中には汗でびっしょりだ。

「……まあ、君がそう言うのなら、そういう事にしておこう」

（ゼンゼンこまかせてないっ）

「ハハハハ……」

クライフは大人な対応をする。和也がベタな反応をした。

「ところで、君は王都に向かうのかい？」

「あ、はい。王都の冒険者ギルドに様があるんです」

和也とクライフの二人は、先程のやり取りはひとまず置いて、取り敢えず話を進めたいらしい。冒険者の男達は檻の中で喚いているが、二人は華麗にスルーしている。

「ん、そうか……ならカズヤ君、良かったら一緒に馬車で行かないかい？」

「え、でもクライフさんは王都の方から逃げてきましたよね？」

「ああ、実はユーノスに商談で向かっていた最中だったのだが、この男達に襲われてね……ユーノスに持って行く予定だった商品が、全て駄目になってしまったのだよ。だからこれから王都に戻って、また商品を積んでから再びユーノスに向かう予定だ」

クライフの話では、ユーノスに向かうのに護衛が必要で、王都で冒険者達を雇ったという事だ。しかしクライフが言うにはこの冒険者達、護衛の依頼を隠れ蓑にした山賊集団だったのだ。商品は、容器が脆いのか繊細な物だったらしく、逃げている間に駄目になってしまったらしい。

「成る程、そういう事ならお願いしても良いですか？」

「ああ、大歓迎だ！！」

話は纏まったらしく、二人はクライフの馬車に向かう。

「お、おいっ！！俺たちをここから出せ！！」

と、このまま放置されると思ったのか、冒険者達が大声を上げた。

和也とクライフが振り向いた。

「クライフさん、どうします？」

和也が眉を寄せて面倒臭そうに言う。

「ん、このままにしておいて、王都に着いたら守備隊が騎士にでも報告すればいい」

クライフがサラリと答えた。

「そうですね」

和也も当たり前のように頷き、二人は喚く男達を、またもや華麗にスルーして馬車を出発させた。

クライフの馬車は、御者台のほかは荷台という、実用重視の造りになっている。馬は二頭立てだ。

和也は御者台にクライフと並んで座り、クライフの御者技術を盗もうとこっそり盗み見ている。

「今は午後を回ったばかりだから、順調に進めれば、王都には明日の昼前には着くかな」

クライフが和也に話す。

「あ、はい。流石に馬車だと早いですね」

「ん、そうだな」

その後は、特に何事もなく街道を進み、今日の野営スポットに着いた。夕飯は特に何も無かったので割愛させていたたく。

そして夜。今回は二人だが、クライフは商人だからと和也が夜の見張りを申し出た。

「私も野宿は慣れているから大丈夫だと言われてもね…」

和也は焚き火の近くで横になっている。クライフはテントの中だ。

和也が罾の存在を知られたくない為に押し込んだ。

罾を設置したから夜の見張りなど必要ないのだが、実際に罾が起動するのを見たらクライフが不審に思うだろうとの事で、和也は見張りを申し出てクライフをテントに押し込んだのだ。和也は見張りなどせずに寝る気満々である。

「明日には王都：何かあるんだろうな」

和也が王都に思いを馳せる。

「…やっかい事に巻き込まれたくないし、少なくとも城の人達には係わらないようにしよう…」

どうやら変な思いに馳せているようだ。しかし、和也はまだ知らない

いが、今回の指名依頼は王族からなのだ。王都のギルドに着いた時点で手遅れである。

「楽しみだなあ王都！！」

……手遅れである……

次の日、和也は先に起きて、昨夜設置した罠を解除してからクライフを起こした。

「おはようカズヤ君、早いね」

「ええ、何となく目が覚めました。朝食はどうします？」

「ああ、何があるか解らないし、軽く食べておこうか」

という事で、果物など簡単な食事をして、王都へ向け出発した。

三日目は、王都に近付いたからなのか、魔物や賊等に襲われていない。たまに魔物を遠くに見かけるが、クライフ曰くこの辺りは弱い魔物しかないという事で、物は試しと和也が見かけた魔物に魔法を撃つと、皆驚いて逃げていった。

という事で、和也はたまに遠目に見かけた魔物に魔法を撃つだけでとても暇そうだ。今も欠伸を噛み殺している。

「カズヤ君、この辺りは特に危なくないし、昨日は見張りもして貰ったんだ。荷台で寝てて良いよ」

そんな和也を見てクライフが提案する。

「あ…はい…お言葉に甘えます」

和也は少しだけ考えた後、頷いた。

それから数時間が経ち、和也は目が覚めた。ウーンと伸びをする。
「ハア、良い天気だなあ」

和也は、空を見てのんびりと呟く。

「カズヤ君、王都にはもうすぐ着くよ」

御者台から男性が和也に声を掛けた。

「あ、はい。クライフさん」

和也は返事をして、再び蒼穹の青空に目を向けた。

街道の先には、巨大な城壁が近付いていた。

第20話 王都へ（後書き）

いつも読んでくれて有り難う御座います。 ころです。

20話という事で、これから王都編です。

最近では、評価もお気に入り登録も、着々と増えてくれて嬉しいです。
まあ一番は、読者様に楽しんで貰える事ですけどね。楽しんで貰えてますか？

これからもどうか読んでやって下さい。

それでは、Trapperを読んでくれている皆さんに感謝！！

第21話 スフィリア冒険者ギルド

「凄い、…ここが王都『スフィリア』…」

和也は馬車の上からスフィリアの街並みを眺めている。その顔は果然としている。

馬車は、スフィリアの中央大通りをゆつくりと進んでいる。大通りは、馬車が5台は並んで通れる幅があり、ユーノスなど比較にならない程の店や露店で埋め尽くされていた。そこを歩く人々の活気もあつて、まるで祭りの様な雰囲気だ。

「カズヤ君はギルドに用があるんだったね、ギルドはこの大通りをもう少し進むとある。そこまで案内しよう」

「あ、はい。すいませんがお願いします」

クライフの提案に、和也はスフィリアの町並みを見てすぐにお問い合わせした。…道に迷いそうだったのだ。

「フフツ、喜んで」

クライフは、和也の気持ちを知ってか知らずか、クスツと笑いながら頷いた。

第21話 スフィリア冒険者ギルド

「ほら、ここがスフィリアの冒険者ギルドだ」

クライブが馬車を止めて、一つの建物を指し示す。

「…でかい」

和也が馬車を降りてその建物、冒険者ギルドを見て圧倒される。

王都スフィリアの冒険者ギルドは、三階建てで高さはないが、ユーノスにあつた酒場の様な外見ではなく、高い塀で囲まれていてどこか堅牢な砦を思わせた。小さいとは言っても、ユーノスの領主ーゲイルの屋敷よりも面積が広い。

「それではここでお別れだね。スフィリアまで同行してくれて有り難う。カズヤ君がいなかったら、私は街道で人生が終わっていただろう」

「いえ、こちらこそ色々とお世話になりました」

和也がぺこりと頭を下げる。

「それはこちらのセリフだよ。何か入り用だったら店に来てくれ。今回の借りを返そう」

クライブが笑顔で右手を差し出しながら言う。

「はい。クライフさんも、ギルドに何か依頼があったら、是非僕を指名して下さい。全力で遂行しますっ」

和也も笑顔で、差し出されたクライフの手を握る。

「それではまた！！」

「ああ、有り難う」

握手を交わすとクライフは馬車に乗り、大通りに消えていった。

「さてと……ギルドの場所は解ったけど、先に宿屋で部屋を取っておくかな」

和也はギルドの場所を確認して、大通りを歩き出した。

和也が歩き出して10分程、大通りから一つ隣の通りに宿屋はあった。そこは、通り沿いに宿屋が軒並み連なっていて、通称宿場通りと呼ばれている。そこには、貴族や金持ちに対象を当てた豪華な宿屋から、お金のない冒険者や裏の人間向けの質素な宿屋まで様々だ。「何だか凄いなあ。でもあんな豪華な宿屋、僕には精神的に無理だな」

宿場通りを一通り歩いた和也は、その中から一件の宿屋を選び意を決して中に入った。

「いらつしゃいませ！！お一人ですか？」

宿屋に入ると、中にいた女性が和也にすぐに気付いて、元気に声をかける。女将と思われるその女性は40代程の、明るい感じがする女性だった。やはり年齢が関係しているのか、『対象外』の女性だった。和也がホッとする。

「あ、すいません。部屋を一部屋お願いしたいのですが」

和也が宿屋の中の様子を伺いながら尋ねる。

「どうぞどうぞ！！部屋は空いてます！！一泊ですか？それとも長期？」

「あ、伸びるかもしれませんが、取り敢えず一週間ほどお願いします」

「はい！！ではこれが鍵です。部屋は二階の一番奥ですよ」

鍵を渡された和也は、階段を上がり二階の部屋へと入った。

武器と荷物をテーブルに置いて、ベッドに腰掛けて一息付く。

「ふう、今回は当たりだな」

呟いて軽く微笑んだ。軽くガッツポーズもしている。

和也は二階に上がる時に、この宿の授業員に娘、もしくは若い従業員がいるかどうか聞いていたのだ。宿屋を決める時に、通りから眺めて当たりを付けていた和也の予想は見事に的中した。

「これでスフィリアでの生活は安泰だ」

そのままドサツと倒れてベッドに仰向けになる。

「……特に期限は決められてないし、ギルドは明日でいっかあ

……」

そのまま目を瞑る。スフィリア初日とあり、精神的に疲れていた様で、和也は直ぐに眠りに落ちた。

翌日、和也は朝早く目が覚めた。よく眠れたようでその顔はスッキリしている。

「女将さんおはよう御座い！！……ま……す」

和也が、宿屋の女将に朝の挨拶をしながら食堂に入ると、そこには若い女性がいる。どうやらこの宿泊客の様で、テーブルに座り朝食を食べている。

（しまった……こういうパターンを忘れてた！！）

和也は、朝の目覚めの良さも忘れたように、しょんぼりと食堂の隅のテーブルに座る。

「おはようカズヤさん！！今朝食を出すからね！！」

女将が和也に元気に言う。

「はい……お願いします……」

「……???すぐに持ってくるわね？」

女将の言葉に、和也が気落ちした様子で返事をする。女将は不思議に思いながらも、お腹が空いている為だろうと、厨房に早足で消えた。

（仕方ない、生憎此处には知り合いはいないし…大人しくしていれば平気だろう）

女将の言葉通り、朝食はすぐに運ばれてきた。和也はそれをササツと食べると、宿屋の外にでる。

「女将さん御馳走様。それじゃ出掛けてきますね」

「ええ、気をつけてね!!」

和也はスフィリアの大通りに出て冒険者ギルドに向かって歩く。

「相変わらず人が多いなあ」

呟きながら露店を眺める。

「お、あのナイフなんか良いかも。後で色々回ってみようかな」

その後も、和也は露店を冷やかしながら歩いていると、昨日見た砦のような異様を誇る冒険者ギルドに着いた。

「ここも相変わらずで…」

和也が恐る恐る冒険者ギルドの門を潜った。

門を潜ると、そこは中庭の様で、訓練等も出来るのか案山子が数体並んで立っている。

少し離れた場所では数人の冒険者達が、武器で打ち合っていた。

「おお、何だか今までのギルドとは違う感じ…」

それを横目にして和也が進んでいくと、石造りの建物と、建物の入り口と思われる頑丈そうな大きな扉が見えてきた。

和也はその砦のような威圧感に少し気圧されながら、扉を開けてギルドの中に入っていた。

入って直ぐに大きな広間になっていて、奥の方には壁から壁まで続

くカウンターがある。

「お、見ない顔だねえ、登録に来たのかい？」

和也がぼろりと周りを見渡していたら、入り口の近くにいた赤い髪の女性に話しかけられた。女性は、余り面積の広くない胸や肩などを守るだけの革の鎧に、背中に剣を背負っている。どうやら女性も冒険者の様だ。

「あ、いえ、ああの僕は、ユユーノスからき、来ました」

和也がビクツと後ろに一步下がり、女性に答える。

「へえ、ユーノスから…まあいいや、受付はあそこだよ」

女性は和也を探るように見ると、奥の大きなカウンターを指差して言った。

「あ、あ有り難う御座います。そそそれではし、失礼します!!」
和也はとっさに礼を言っ、それ以上の会話を避けるようにカウンターに向かつて行った。

「…何だいありやあ？」

女性は首を傾げながら呟いた。

和也はカウンターに近付くと、何かに気付く顔からサァツと血の気が引く。

「受付…女性しか居ない…」

ヨロヨロとよろめきながら壁にもたれ掛かる。まるでこの世の終わりでも見たかのように絶望感が漂っている。

「…ど、どうしよう…ん？…!!…あれは!!」

しばらく、そのままうなだれながらカウンターを眺めていた和也は、何かに気付いたようでガバツと立ち直る。獲物を狙う野生の獣のように、ギラリと和也の目が光った。

和也の視線の先は、カウンターの一番端。和也はそこを目指して、ズンズンと一直線に進んで行った。

一番端の受付には、女性冒険者がズラツと並んでいて、そこだけ空気が違う。だが、そこに禍々しい気配が近付く。

列の一番後ろにいた女性冒険者が、その気配に気付いて振り返り、ヒツ！と軽く悲鳴を上げてその場から走り去った。

そこには、魔物も一目散に逃げ出すような。「近付いた者はすべて斬る」という気配、まるで呪われた魔剣の様な気を毒々しく垂れ流す和也がいた…

徐々に列の後ろから女性冒険者達が気付いていく。

「それでねー！！ヒイツ！！」

「ま…魔王…」

「た、助けて…！！」

「…この世の終わりだわ…」

列に並んでいた女性冒険者達が、まるで蜘蛛の子を散らしたかの様に悲鳴をあげながら散らばる。

何やら酷い言われようだが、和也はそれにも気付かずカウンターにズンズン進んで行く。

カウンターに着いた和也は、和也の様子にガクガクと震えている目の前の受付の前に仁王立ちし、カウンターにバンツ！と両手を叩きつけて話し掛ける。

「…すいません」

「は、はいいい！！なな何の御用でしょうかつ！？」

和也の目の前にいたのは…まるで産まれたての小鹿のように震える『男性』の職員だった…

「そ、それではこちらで少々お待ち下さい…す、直ぐに支部長をお呼びしますので」

その後、男性職員に説明をすると、奥の小部屋に案内された。

和也はいつも通りの穏やかな雰囲気に戻っているが、まだ男性職員

は先の出来事を引きずっている様で、和也を案内するとそそくさと部屋を出て行った。

「あんなに急いでくれなくてもいいのに……きつと真面目で一生懸命に働く良い職員なんだな」

和也が自覚がないまま、のんびりと呟いた。

そのまま10分程ソファ―に座ってくつろいで待っていると、部屋の扉がガチャリと開いた。

「お、お前は……お前がカズヤ・ホシナか」

入ってきたのは赤い髪に革の鎧、背中に剣を背負っている。先程ギルドの入り口で会った女性だった。

女性は勝ち気に名乗る。

「私は『カラ・シャイム』ここスフィリア冒険者ギルドの支部長だ！！よろしくなっ！！」

……これからの事を想像し、カズヤの顔がサアツと青くなった……

第21話 スフィリア冒険者ギルド（後書き）

いつも読んでくれて有り難う御座います。 ころです。

更新が遅れてしまい申し訳ないです。遅れた理由という言い訳をしますと、今週になって、急遽仕事が17:00から8:00迄というハードワークになってしまい、空いた時間に書いていたのですが、完成が遅れてしまいました。

次話も遅れてしまうと思いますが、見捨てずに読んでやって下さい。どうか宜しくお願いします。

と、追加で急遽書き込みます。本日仕事が休みになったので、深夜には次話更新できると思います！！どうか読んでやってください。

それでは、Trapperを読んでくれる皆様に感謝！！

第22話 スフィロト城

「ス、スフィロト城に依頼人が？」

「ああ、行けば依頼人が誰か判るさ」

和也の言葉に、カーラは頷きながら答えた。

第22話 スフィロト城

和也はギルドの奥の小部屋で、ソファアに座りながら深呼吸をしていた。和也の対面には、このギルドの支部長カーラが座っている。

「スウー…ハアー…スウー…ハアー」

「カズヤ、少しは落ち着いたかい？」

「は、はい…すみません…」

カーラが現れた瞬間に取り乱した和也は、先ず逃げ出そうとし、入り口にカーラが居る事により逃げ場が無くて余計に取り乱した。そうして20分が過ぎ、ようやく和也が落ち着きを取り戻した。和也が申し訳無さそうに謝る。カーラが呆れた顔をする。

「しかし…お前があのユーノスの英雄で、Bランク完遂者のカズヤ・ホシナねえ」

「え、えつと…『ユーノスの英雄』『Bランク完遂者』って、何ですか？それ」

和也が気になる単語があつたのか、戸惑いながらカーラに質問する。

「ああ、ギルド内では和也はそう呼ばれているんだ」

いつの間にかついた呼称に、身に覚えが全くない和也は驚いて聞く。

「ええ！…どうして！？」

カーラは落ち着いた様子で、和也に説明した。

「まずは『Bランク完遂者』だな。これは一定の期間中に、請けた依頼を全てクリアしている冒険者に与えられる呼称だ。その者のランクが、どのランクがスグに解る為に付けられるようになった。つってもギルドの職員内でのやり取りでしか使われないけど。和也はギルドに登録してから2ヶ月の間に、250を越える依頼を全てクリアしてきた。本当ならSかAランクで呼ばれるんだけど、まだ2ヶ月という短期間しかないから、そこまで上げるのはまだ早すぎると言う事で、Bランクに落ち着いたんだ。まあ、お前ならこのままやっていけば直ぐにS…いや、もっと上の呼称を与えられるよ」

「は、はあ…」

和也はいまいち想像が付かないのか、曖昧な返事をする。カーラが続ける。

「次に『ユーノスの英雄』だな。これは今回の依頼にも関わってくるんだが…」

和也がカーラの言葉に、緊張してゴクツと唾を飲む。

「和也…お前ユーノスで請けたアクアベル採取の依頼、覚えてるか？」

「あ、はい。確か依頼人の御家族の方の病を治療する為に、一刻も早くアクアベルが必要という事で請けた緊急依頼でしたね」

「ああ、実はあの依頼な、VIPからと聞いているはずだが、そのVIPが大物過ぎてな…もしお前があの依頼を失敗していたら、ユーノスのギルドは潰れていた」

「え…そんな重要な依頼だったんですか！？」

カーラの言葉に、和也は狼狽える。膝が震えていた。

「ああ、しかし結果は大方の予想を良い意味で裏切り、予想より倍は早い時間でアクアベルの採取を終えて戻ってきた。この結果にユーノスのギルドは依頼人に潰されるところか逆に賞賛され、ギルドは国での信頼と名を上げた。そしてユーノスのギルドは大陸でも名を馳せる支部になったんだ。そしてこの結果を作った『カズヤ・ホシナ』という名の冒険者は、ユーノスのギルドを救い、またギルドの名をのし上げた英雄として『ユーノスの英雄』と呼ばれるようになったのだ」

「そんな大事になっていたなんて…それに英雄って…」

「まあ、ギルド内でしか使われないけどな」

「は、はい…」

そんなつもりは無かったのに、いつの間にか自分がギルド内の有名な人になっていた事に、ズシツと何か重い物が和也にのしかかる。

「なんだ、嬉しくないのか？」

「はい…目立つのは性に合わないの」

「ま、その様子じゃそうだろうけどね。でも二つとも、あくまでギ

ルド職員内の会話でしか使われないから、しょうがないけど我慢しな」

「……………はい」

カーラの言葉に、和也はガクツと肩を落としながら言った。

「それで、今回の指名依頼だけど」

「あ、はい。どんな依頼なんですか？」

和也は気持ちを切り替えて話を促す。

「実は今回の依頼も、アクアベル採取の時と同じ依頼人なんだ。今回の依頼は、ユーノスでアクアベルの採取依頼をクリアした『カズヤ・ホシナ』という冒険者を指名したい…という事しか相手からは言われてなくてね、相手が相手だし、私も今回の依頼の内容は教えて貰えなかったんだ。請けるのなら王城『スフィロト城』に行け。そこに依頼人が居る」

「ス、スフィロト城に依頼人が」

和也は若干震える声でカーラに確認する。

「ああ、行けば誰が依頼人が判るさ」

和也の言葉に、カーラは頷きながら答えた。

「…ハ、ハハ……………か、帰ろうかな…」

和也はスフィロト城の正面に立ち眩く。

冒険者ギルドでカーラとの話が終わり、和也はギルドを出て城を目指した。中央通りを真っ直ぐに歩いて行くと、スフィロト城はある。和也は、初めて間近で見る城の雰囲気圧倒されて腰が引けている。スフィロト城は白で統一された非常に美しく、清潔感溢れた建物で、所々神秘的な細工が成されており、まるで世界遺産のようなオーラを纏っている。

「でも、逃げたらなにが起きるか解らないし……………行くしかないか」

和也は呟くと、肩を落としノロノロとスフィロト城の正門に歩いて行った。

「あの、すいません」

「はい、何かご用でしょうか」

和也が正門の門番に声をかける。流石に王城を守る門番だけあり、しっかりと訓練されている様で、門番は丁寧に応じる。しかし和也に隙は見せない。

「えと、冒険者ギルドの依頼の件で伺いました、カズヤ・ホシナと申します。ここに私を指名依頼された方がいらっしゃると言う事で伺ったのですが」

和也が若干気圧されながら話す。

「お話は伺っております。今ご案内いたします。少々お待ちください」

門番はカズヤの話を聞き、警戒する必要が無いと思ったのか、リラックスして答えた。

正門の前で待っているとすぐに案内役の物が現れたが、和也は

「す、すいません！！…男性の方でお願いします！！」

と言った。

案内役に現れたのは、この城につとめる男装のキリリとした『女官』だったのだ。よほどその女官の身分が高いのか、どうしようかと門番がおろおろする。

「し、しかし」

「だ、駄目ですか？」

と、ここで女官が会話に混ざる。

「いや、問題ない。今代わりの者を寄越すので、少しお待ちを」

女官は直ぐにに応じて、和也を感心した様な顔でちらりと一瞥すると、城の中に引き返した。と、本当に直ぐに、案内役と思われる青年が現れた。

「済みません！！お待たせしました！！それではご案内します！！」
青年は城に来てまだ日が浅いのか、少し緊張気味だがハキハキと言

った。

「は、はい。お願いします」

和也は若干引き気味に答えた。

「はい！！ではこちらです！！」

青年は言つて、キビキビと城に向かい歩き出した……呆氣にとられていた和也を置いて…

「つて、あ、ちょっと待って！！」

和也は急いで後を追った…

「いやあ、すいません。緊張していたもので」

「気にしてないから、カイル君も気にしないで」

あの後、カイルに追い付いた和也は、カイルをリラックスさせる為に足を止めて少し話をした。

話してみても、お互い性格的に気が合ったのか、今は二人共リラックスして城の中を歩いている。

「カズヤさんが話しやすい方で良かったです。先に案内役でカズヤさんの所に行った人からの話では、とても怖いイメージだったのだから、え、あの人？話つて？」

「あ、はい。あの方は僕の直接の上司で、名を『エミリア・スピカ』。ダクラマクラ王国騎士団序列第三位に座するお方なんですけど」

「げ、そんなに偉い人だったの！？」

「はい。それでエミリア様が言うには『あの者はただ者ではない。普通冒険者ならば、女官の案内ならば油断もするし気も抜ける。その油断から情報を漏らしたり、いざという時に対処が出来なくなる物だが。しかしあの者は私の姿を見た途端、余計に警戒心を強くしていた。あの慣れた様子、相当な訓練を積んでいるぞ。この城の者にも見習って欲しいものだ』と、エミリアさんにそこまで言わせるなんて、カズヤさんって凄いですね！！」

「いや…ただの女性恐怖症…」

「??何か言いました?」

「な、何でもないよ…」

和也はカイルの話を、「ただの勘違いなのに」と、少し気まずい思いをする。こめかみには冷や汗がキラリと光った。

「あ、着きました。ここです」

その後もしばらく城の中を歩き、カイルが一つの扉の前で立ち止まる。和也もカイルと並んで歩みを止めた。

「失礼します。冒険者カズヤ・ホシナ殿をお連れしました」

「入れ」

「ハッ…ではカズヤさん、中へどうぞ」

カイルが扉を開けて和也を促す。和也は緊張の面持ちで部屋の中に入った。

「失礼します」

扉を開けて中にはいると、そこはスフィロト城の応接室の様だ。50畳はあるとても広い部屋には、中央に見事な彫刻が成された豪華なテーブルがあり、テーブルを囲むように、これも高そうな三人掛けのソファと、肘掛けの付いた椅子が置かれている。その椅子の一つに、ウェーブのかかった短い髪をサラリと流しながら優雅に座る男性が居た。

「どうぞ、椅子に座って」

「はい、失礼します」

和也は椅子に座る男性に促されて、素直に椅子に座る。

和也が先に名乗った。

「はじめまして、カズヤ・ホシナと申します。貴方が、今回の依頼人ですか?」

「はい、私は『ライア・フォルス・ダクラマクラ』…ここダクラマ

クラ王国の、ダクラマクラ王第一子だ」

「え！？…だ、第一子って、皇太子！？」

和也はライアの自己紹介に、驚いてソファーから立ち上がる。ライアはそんな和也に頭を下げた。

「こ、皇太子殿下！！」

和也はそんなライアを慌てて起こそうとするが、ライアは続けて言葉を放った。

「どうか……ダクラマクラ王国を救って欲しい……」

そう言葉を放ったライアの表情には、悲壮感が漂っていた……

第23話 皇太子の依頼

「皇太子、頭を上げて下さい。まずは事情を話して頂けませんか？」
「あ、ああ、そうだな」

和也の言葉に、ライアはゆっくりと顔を上げる。しかし空気が重い。
「まずは、アクアベルの件では世話になった。礼を言う」

「いえ、それで病にかかっていた人は無事に？」

「ああ、ホシナ殿が直ぐに採ってきてくれたおかげで、無事完治した」

「カズヤでいいです…それにしても良かった」

ライアの話に、和也がホッと息を吐く。ライアの話が続く。

「分かった、カズヤ。それで、病にかかっていた者だが…」

「はい…」

「我が父『ガライ・フォルス・ダク라마クラ』その人だったのだが」

「え？それってダク라마クラ王国の国王様…！？」

和也がその名に驚愕する。

「そうだ。病で伏せて居たのだが、今はピンピンしておるぞ」

「そ、それは喜ばしいことで」

ライアはそんな和也を解そうと冗談混じりに話す。和也の肩の力が抜けた。

「しかし、病が治ってから解ったことなのだが…どうやら父が伏せった原因は病ではなく、毒だったのだ」

「毒…ってことは！？」

「ああ、未遂で終わったが…暗殺の疑いがある」

ライアの言葉に、部屋は重苦しい空気に包まれた。

第23話 皇太子の依頼

「暗殺…」

和也が深刻な顔で呟く。

「そうだ。そこでカズヤには…今回の暗殺事件の首謀者を、秘密裏に見つけて貰いたい。それが今回の依頼だ」

ライアが真摯に言った。プレッシャーを感じているのか、和也の手が震えている。

「で、でも…そんな大事な事を、ただの冒険者に依頼するなんて…」
「だからこそだ。城の者では誰が首謀者で、誰が首謀者と繋がっているか解らない。だから外の者を使おうと思ったのだ」

「確かに一理ありますね…でもなぜ私なんですか？もっと優秀な冒険者が居る筈です」

「アクアベルの一件だ」

和也の疑問にライアは即答した。

「アクアベル？」

「確かにもつと実力もあり、経験豊富で優秀な冒険者もいるだろう。だが、あの一件でのカズヤの行動を報告書で見た限り、信頼という面では和也が一番なのだ。これはユーノスのギルド支部長も言っていた」

「ガルフさん……」

「頼む……暗殺がこのまま未遂で終わればいいが、もし暗殺が続き父が殺されれば、この国がどうなるか解らない……」

「皇太子殿下……」

ライアが再び和也に頭を下げた。和也は目を瞑り苦悩する。

（ライアさんの言葉に嘘は感じられない。でも俺なんか暗殺の首謀者を見つけられるのか？……でも、もしかしたらこの国が終わってしまう……この国の人々も……）

それから10分は過ぎたか、和也は結論を出したのか徐にライアに話しかけた。

「皇太子殿下……」

「カズヤ……」

「分かりました……この依頼、請けしましょう」

「……すまない……頼む」

ライアをまつすぐに見つめて頷いた和也の目には、強い意志の光が溢れていた。

「……先ずは情報だよな……」

ライアとの話が終わり、和也は宿屋に戻っていた。ライアからは城に滞在しても良いと言われたが、極力自分の存在を周囲に知られないようにする為に、和也は基本的には宿屋で過ごすことにした。

「暗殺の情報…」

和也はベッドに仰向けになって考える。

「暗殺…貴族…暗殺と言えば闇の部分…」

と、考えているとなにやら外が騒がしい。和也は考え事の邪魔をされ、不機嫌な表情で窓から外を見る。

窓の外、下の通りを見ると、何やら若い娘が男達に囲まれている。

「や、やめて下さい!!」

「良いから着いてこいよ…楽しいことしようぜえ」

男達は下品な笑い声を上げて娘に近づいた。

「目障りな…」

和也は呟くと、男達にサツと手を向けた。

ゴォンッ!!ガンッ!!

「フギヤッ!!」

「グガッ!!」

男達の頭上に金属のトライが落ちた。娘を残して男達は地面に沈む。何が起ったか理解できない娘は呆然としていたが、やがてハッと我に返り、走ってその場を去っていった。

「よし、これで静かになった」

和也は下の通りを見ながら頷くと、再びベッドに寝転がる。

「と、待てよ？」

和也は先程の男達を見て何かを閃いたのか、思案顔になる。

「暗殺は裏の顔…盗賊ギルドか暗殺ギルドなら何か解るかも!!」

和也はガバツと身を起こした。

「でも、この二つのギルドは場所さえも定かではない…どうやって行けば…?」

和也はまたも思案顔になる。

「取り敢えず、町を歩いて情報を得るか…」

和也はベッドから立ち上がり、武器だけを手に宿屋の外を出た。

「つても、どこに行けばいいのやら…」

和也は宿屋を出て、大通りを歩いている。相変わらずの賑わいだ。

「うーん…取り敢えず、カーラさんにでも聞いてみるか。支部長なら色々知っているだろ」

和也は決断すると、テクテクと冒険者ギルドに向かい歩き出した。

ギルドに着き中に入るが、ガーラが見当たらない。ならば聞くまでと、和也はカウンターの一番端にいる受付の職員に声をかけた。この前和也を、奥の部屋に案内してくれた職員だ。

「すいません」

「は…！！はい！！今日は何の御用でしょうか！？」

和也は今日も頑張ってるなーなどと思いながら、カーラの居場所を聞く。

「はい！！カーラ支部長は只今奥の支部長室で休憩中です！！今ご案内します！！」

「あ…うん、有り難う…」

和也はちよつと頑張り過ぎじゃないかと、戸惑いながら頷いた。

「失礼します！！カズヤ・ホシナさんをお連れしました！！」

「ん？ああ、入れ」

職員の青年が扉越しに声をかけると、直ぐにカーラからの返事が返ってきた。

「そ、それでは、どうぞ！！」

「うん、有り難う…失礼します」

和也が部屋に入ると、カーラは椅子に座りくつろいでいた。

「どうした？珍しいな」

カーラが部屋に入ってきた和也を認めて声をかける。和也はおどおどと話す。

「はい。じ、実はお聞きしたいことがあるんですけど」

「ほう、なんだい？」

「あの、この街の盗賊ギルドと暗殺ギルドについて教えて欲しいの

ですが…」

「盗賊ギルドと暗殺ギルドねえ…今回の依頼と何か関係があるのかい？」

「はい。詳しいことは話せないのですが、情報を集めるのに有力だと思つて」

和也はカーラの質問に当たり障りのない部分だけを答える。

「フーン…」

カーラは和也をじっくりと見つめる。和也は居心地が悪くなり顔を俯けた。

「まあ、『ユーノスの英雄』なら、問題ないかあ。」

「え？何でそれが今出てくるんですか？」

カーラは気楽な様子で言うが、和也にはまいち理解できない。

「よし、じゃあ今から行くか。カズヤ、着いておいで！！」

「ええ！？ちよ、ちよつとカーラさん！！一体どこに！？」

「良いから良いから、ほら、早くおいで！！」

カーラは、和也に何の説明も無しに部屋を出る。置いて行かれそうになった和也は、訳が分からないまま急いで着いて行つた。

二人はギルドの中を歩いている。

「それでカーラさん、ホントにどこに行くんですか？僕は盗賊ギルドと暗殺ギルドの事を聞いただけなんですけど…」

和也が、カーラという『女性』に騙されているのかと、若干警戒しながら尋ねる。右手はナイフに添えてある。

「盗賊ギルドと暗殺ギルドの事に関しては、冒険者ギルドでは一定のランク以上の者にしか教えないようにしているんだ」

「へ？」

カーラが歩きながら突然話し出した。和也はいきなりの事に戸惑つてしまい、警戒心が削がれてしまった。

「え」と、どう言う事ですか？」

ギルドの奥進むと、一つの階段が見えてきた。どうやら地下に続いているようだ。カーラはその階段を下りながら説明を続ける。和也もカーラに着いて行く。カッソーンカッソーンと二人の足音が階段に響く。

「盗賊ギルドと暗殺ギルド。この二つのギルドに、下手な冒険者が関わりと命に関わってくるんだ…扱っている物が物だけにね。だから冒険者ギルドでは、『Aランク完遂者』以上の者じゃないと教えない事にしている。職員では副支部長以上だね。だから普通の職員に聞いても名にも知らないよ」

「でも、それじゃあ何で僕に？僕は『Bランク完遂者』ですよ？」
和也はなぜ教えてくれるのか疑問に思い、カーラに尋ねる。まだ階段の先は見えてこない。

「ここに来たときに説明したでしょ？和也は本来ならAランク以上の完遂者になるって」

「はあ、聞きましたけど…」

カーラの説明に、和也は釈然としないまま返事をする。

「あと、『ユーノスの英雄』だからね。まあ後は、依頼歴を見ての人間像と、実際に和也と会ってみての印象かな」

「そうですか…」

和也はやはり納得は出来ない物の、まあ教えてくれるなら良いかと無理やり自分を納得させた。

「お、そろそろ着くよ」

「あ…」

カーラの言葉に、和也が階段の先を見ると、階段の先の方が、この辺りより明るくなっているのが解った。うつすらと靡らしき物も見える。カーラが話を続ける。

「それで、盗賊ギルドと暗殺ギルドは別に二つに分かれている訳じゃない。本当は二つ併せて『裏』もしくは『闇』のギルドと私達は呼んでいる」

「呼んでいる？」

階段の一番下に着き立ち止まる。目の前には金属で造られた、複雑な意匠が施されている重厚な扉があった。カーラがその扉に手をかける。

「そう、『闇ギルド』とは、我々冒険者ギルドの裏の顔」

「裏の顔……って、まさかっ!？」

カーラが扉を開く。見た目に違わず、ギィィと重そうな音が響いた。

「ようこそ、冒険者ギルドの影の部分……闇ギルドへ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549o/>

Trapper

2010年11月2日14時11分発行